

早稲田大学図書館紀要別冊 2

早稲田大学  
図書館所蔵

古短冊集目錄

二種

早稲田大学図書館

早稻田大学図書館紀要別冊 2

早稻田大学  
図書館所蔵

古短冊集目錄

二種

早稻田大学図書館



目次

其一 俳句短冊集……………三

其二 古短冊集……………二

俳句之部……………七

狂歌之部……………八

和歌之部……………一〇

小短冊之部……………一六

雜之部……………一七

付水口豊次郎筆蹟並肖像……………一八



其一  
俳句  
短冊集

## 凡 例

- 一、本短冊集の図書番号はチ六・四〇九七であり、特別図書に指定されている。
- 二、各短冊の配列は、出来るだけ作者の五十音順になるように心がけた。
- 三、難読の署名が一件（一二六）あるが、現段階の整理過程においてはやむをえなかった。
- 四、旧蔵者 細川武子氏の遺族の住所および氏名は左記の通りである。  
東京都大田区田園調布四ノ一七ノ二 細川英雄氏
- 五、本短冊集は、本学文学部教授中村俊定氏の尽力により昭和三二年に寄託され、同四二年遺族の特志により改めて寄贈されたものである。
- 六、本短冊集の整理は、昭和四〇年七月に行なったものである。

ア

安之 ↓益翁

安靜 ↓似空

イ

意朔 水の月や天上天下油井か浜

為山 つくくくと春たつかとの柳かな  
於楼働興

惟草 明月のしたのあかりや墨田川

一時軒 よとめ菊盃河のすんなかれ

惟中 ↓一時軒

一松 数盃哉柳くれない花みとり

一朝 人臭ひ東風や伝て江戸下り  
大坂西鬼あいさつ

一鉄 いさなれん鬼にくろかね山桜

胤及 雪にあけよ障子の引手嶺の松

エ

永重 寒しとて水にや鴨のいるまやう

栄春 声をふりあけよほととぎ鈴か山

益翁 花は根に鳥さし竿は梢哉

悦春 鶯の朝なくをすりゑかな

燕石 花にくむは壺前栽か源氏酒

カ

塊翁 ↓竹有

雅因 兼て聞しる想や幾世万春楽  
湊舟十万句巻軸に

可玖 万葉の種や尽せぬ六の花

岳輅 名月や爪はしきせる竹のおと

可全 ふしまろひなくやねんねこねはんさう

葛古 気うつりのするやあわせの手なくさみ

禾刀 昼みしぬ蚊帳や三輪の作りもの

臥鵬 名月や芙蓉を洗ふ沖つ波

可躍 そろつへいも雪やゆるして姿の富士

完来 松に藤かたふく塔をかくしけり

キ

紀英 書初の筆勢躍れとらとし

幾音 さけ肴かはるくむ小鮎かな

其山 寐たふねに来て雨震ふ千鳥かな

季貞 くもる夜は下和か玉の兎哉

二	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一					
季貞	其山	幾音	紀英	完来	可躍	臥鵬	禾刀	葛古	可全	岳輅	可玖	雅因	塊翁	燕石	悦春
くもる夜は下和か玉の兎哉	寐たふねに来て雨震ふ千鳥かな	さけ肴かはるくむ小鮎かな	書初の筆勢躍れとらとし	松に藤かたふく塔をかくしけり	そろつへいも雪やゆるして姿の富士	名月や芙蓉を洗ふ沖つ波	昼みしぬ蚊帳や三輪の作りもの	気うつりのするやあわせの手なくさみ	ふしまろひなくやねんねこねはんさう	名月や爪はしきせる竹のおと	万葉の種や尽せぬ六の花	兼て聞しる想や幾世万春楽 湊舟十万句巻軸に	↓竹有	花にくむは壺前栽か源氏酒	鶯の朝なくをすりゑかな
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

葵亭 名月の明てすくなき鴉哉

休安 ねをたては春宵いつれ郭公

きうほ 妄想か胡蝶のねふる花の露

杏谷 友はくれして哀さよ浦千鳥

暁台 聞初し夜より乱れて風花鴈

行風 鳥がなく吾妻の春や宮古いり

(裏)破魔弓やとりあけは、か腰の骨

ク

空存 能因や鐘に花散る証抛人

くら丸 白妙といふ名に誇る桜哉

ケ

月化 わか菴や花につとめる豆腐串

玄札 も、しぎの花をかさるや内裏ひな

玄子 別れたる人のみえたる若葉哉

玄子 くら／＼とやみをはなれて初からず

元順 ↓方由

顕成 炭所もとむとて行く池田哉

コ

江雲 ↓菴宿

興 渡 満月をみこす鳥井や鏡たて

好々 夢中の吟 波た、せ亀にや問はむ春の水

好々 紅すたれおろしてふねの梅見かな

孝晴 鐘梅は一き当千の匂ひかな

江琳 砂糖の夏小人の毒は草也けり

乞隠 ↓文暁

幸和 ゑにかくや雲間の月の丸ぬかし

サ

西順 又来るや留主つかへとも老の春

定清 うへ見れば実尽期もなし秋の月

三草 賜なくや野分の後の西明り

シ

紫雲 見あげたるこゝろもとらすふしの山

似空 花 声や仏事花の跡とふ春の風

三

元

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇

三〇



苑女 衣たへまにまふてかみつから織ぬつみふかし  
曾也 雲や擣籠こんこく雪こんこ

夕

駝岳 名月や今宵は海の鳴もやむ

卓池 田の神とおほえて祭る雛かな

卓池 川越の立派にわたす角力かな

千

竹有 船楼ものたらぬ夜明心や須磨の浦

遅梅 客中初雪や旅おもしろく成にけり

忠由 おなこ竹の髪のめてたきしけり哉

長治 やふれ団頭れわたる網代哉

調和 眼裏窄し花と愛子と容色と

樗堂 烟してのとけき谷よ山の家

椿堂 此ころのよひ寐をかしき時雨かな

椿堂 きのふけふ真さかり也秋の暮

ツ

月守 閑時の留別いつかはといふによるかはとしの浪

三 二

定清 ↓サ テ

三

東洲 風呂敷に夕日つゝむやわらひとり

三

道寸 赤人のなかめは白し不二の雪

三

東巴 黄鸝や声のすはりも雨の後

六

鍋盛 ↓紫雲 ナ

六

日能 名月曇らせてうそ月と成す今宵哉

六

任他 跡もなししかしなからの橋の霜

六

三

三

梅通 初鶉声の下行羽音かな

三

三

必山 江の月は澄て田畑のおほろかな

敏名 はなれうしや尾花の波のより鯨

二〇二

フ

節分

不琢 鬼も年とつてかまうよ大豆の数

二〇三

肥後 引浪や萍かゝる磯馴松

二〇四

ホ

法古 何処見ても眺く卯月の芳野山

二〇五

方孝 八月十五日夜 月の鏡今宵の名にや新藤五

二〇六

方由 書初や例のもらしつ祝義迄

元日

二〇七

保友 長閑なり花てこそあれ今日の春

二〇八

本水 ↓宗臣

マ

正式 女郎花のまねかや嵯峨のくねり柿

二〇九

満直 秋は春にひくりかへるや天津鷹

二一〇

ミ

未仏 おひへたる手にしひるゝや蟬の声

二一一

明栄 文月や千々にもものこそかなましり

二一二

モ

木王 大原梶井御門主御下屋敷になり 木の有を題にて坊宮宮内卿所望

二一三

問加 何とやら似たり白藤富士の雪

二一四

ム

友寛 桜花に同つくしの韻字かな

二一五

友桂 松高ふして門に一声の礼者かな

二一六

友世 涼むとは昼ねの枕ことはかな

二一七

友直 ↓宗立

二一八

悠々 煤はきや男まさりの女見る

二一九

之次 ↓意朔

ラ

頼広 鈴鴨や八十瀬の波にぬれくす

二二〇

リ

利玄 かつつりに千代も経ぬへし菊の酒

二二一

葎宿 食櫃のはいま見てけり釣簾の隙

二二二

江雲 千句第五 すらねては有情と成るや花の哥

二二三

其一 俳句短冊集

立和  
↓ 満直

レ

嶺利  
春雨は何かけつりて作り花

口

露言  
杜蟬  
板絵馬蟬そいはゆる杜の陰

鷺眠  
さく花のかけせく岩間くかな

未詳

〔  
〕  
怪我なしにいぬかや雁の中帰り

無署名

我祖父之吟  
古池の面影はかり落葉哉

二三

二四

二五

二六

二七

其二  
古  
短  
冊  
集



## 凡 例

一、本短冊集は、水口豊次郎氏旧蔵短冊 二、四六四枚、および杉浦正一郎氏旧蔵短冊 三三七枚よりなる。両者は別個に受入れたものであるが、便宜上一つにまとめて整理した。

二、本短冊集が館蔵に帰したのは、水口氏旧蔵分は昭和三〇年、杉浦氏旧蔵分は昭和三八年である。

三、本短冊集の図書番号は、チ六・四〇九六であり、特別図書に指定されている。

四、本短冊集は、俳句之部（二、二〇〇枚）・狂歌之部（四四一枚）・和歌之部（一三三枚）・小短冊之部（一八枚）・雑之部（九枚）に分けた。各部の配列は、出来るだけ作者の五十音順になるように心がけた。

五、狂歌と和歌の区別は、一応のものであって、厳密な意味はない。

六、小短冊のうち、もとの形のままのものは別置したが、裏打ちして普通の形に準ずる大きさにしてあるものは、特に区別をつけずに配列して、本目録中のそれぞれの句・歌の下に△印を付した。

七、小短冊一八枚のうち、一七枚は俳句であるが、俳句之部の目録には特に指示を行なわなかった。

八、目録中、左の記号はそれぞれ下記の意味をもつ。

↓を見よ

↓をも見よ

〔誤入〕 整理終了後による発見のため、番号の大移動不能のための措置。

九、杉浦正一郎氏旧蔵短冊の番号は左の通りである。

二・一六・二一・二四・三三・五七・七三・七八・八八・九四・九五・一〇四・一〇七・一一二・一一八・  
一三四・一三五・一三六・一四六・一四九・一五三・一五五・一五七・一五九・一六九・一七六・一七七・二〇

古短冊集目錄

三・二〇六・二一〇・二一一・二一五・二二六・二三三・二四〇・二六二・二六九・二七三・二七五・二七九・二  
 九三・三〇一・三〇二・三〇四・三〇七・三一二・三一五・三一九・三二六・三二九・三四八・三五五・三五六・  
 三六四・三七五・三七八・三八一・三八二・三八三・三八六・三八九・三九〇・三九六・四〇五・四二二・四三  
 八・四三九・四四〇・四四一・四四二・四四五・四四七・四六四・四七〇・四八七・四九六・四九八・五〇一・五  
 〇二・五〇五・五一〇・五二六・五二七・五四五・五四六・五四八・五六二・五七七・五九二・五九七・六〇五・  
 六〇七・六一六・六一八・六二四・六二八・六三四・六四五・六五三・六七〇・六七二・六七六・六七九・六八  
 三・六九二・六九三・六九四・七〇〇・七一・七一四・七四九・七五五・七六一・七六二・七六六・八〇二・八  
 〇七・八〇八・八一九・八二一・八二五・八四八・八四九・八五〇・八五四・八六二・八六三・八六七・  
 八七二・八七五・八七八・八八一・八九八・九〇〇・九一四・九一七・九二二・九二五・九三三・九三七・九五  
 五・九六〇・九六二・九六三・九八〇・九八九・九九四・九九五・九九六・九九七・一〇〇一・一〇〇六・一〇〇  
 七・一〇一七・一〇二三・一〇三四・一〇五八・一〇七二・一〇七三・一〇七九・一〇八六・一〇八九・一〇九  
 四・一〇九九・一一一〇・一一一四・一一二四・一一三三・一一三五・一一四七・一一四九・一一五八・一一六  
 八・一一七五・一一八二・一一九五・一九八・一二〇三・一二〇九・一二二四・一二四〇・一二五三・一二六  
 〇・一二九九・一二七三・一二七四・一二七八・一二七九・一二八三・一二八九・一三〇四・一三〇五・一三〇  
 六・一三〇七・一三〇八・一三一・一三一五・一三二六・一三二八・一三二九・一三三〇・一三三八・一三四  
 五・一三六六・一三七二・一三九〇・一三九二・一四〇〇・一四〇一・一四〇二・一四〇四・一四〇六・一四〇  
 七・一四一一・一四一二・一四一四・一四一九・一四二〇・一四三六・一四三七・一四三九・一四五〇・一四七  
 五・一四七六・一四七七・一四八〇・一四八五・一四九〇・一四九三・一四九八・一五〇九・一五一〇・一五一  
 二・一五一八・一五四三・一五五四・一五五七・一五六二・一五六七・一五七〇・一五七八・一五八〇・一五八

一・一五九五・一五九九・一六〇一・一六〇七・一六〇八・一六一五・一六一八・一六二〇・一六三五・一六四  
四・一六六五・一六六六・一六六七・一六七二・一六七八・一六九四・一六九七・一七一六・一七二四・一七二  
九・一七四六・一七四七・一七五七・一七六五・一七七二・一七七三・一七七五・一七七六・一七八七・一七八  
八・一七九一・一八〇一・一八〇二・一八〇三・一八〇六・一八一八・一八三六・一八三七・一八四九・一八五  
〇・一八五七・一八五八・一八六〇・一八六四・一八六九・一八七四・一八八五・一八九二・一八九四・一八九  
八・一八九九・一九〇五・一九一一・一九一九・一九二六・一九三二・一九三五・一九四一・一九四三・一九七  
四・一九八二・一九八三・一九八六・一九九〇・二〇〇一・二〇一四・二〇一八・二〇二一・二〇二七・二〇二  
九・二〇四〇・二〇四二・二〇四八・二〇六七・二〇七五・二〇七九・二〇九四・二一一〇・二一一三・二一一  
四・二一四六・二一四九・二一五五・二一五七・二一七四・二一八八・二一九八・二二〇〇・二七九三・二七九  
四・二七九五・二八〇〇

一〇、本短冊集整理にあたって、難読によるあやまりも今後多く発見されることと思うが、現段階においてはやむをえざるものがあり、逐次訂正を期する次第である。

二、旧蔵者の遺族の住所および氏名は左記の通りである。

東京都大田区馬込東二ノ八八五 水口 雷 三氏

武蔵野市吉祥寺南町二ノ二二五六 杉浦美知子氏

三、本短冊集は、昭和四〇年一二月をもって整理を完了し、この目録を作成した。

三、本短冊集が館蔵されるにいたったのは本学文学部教授中村俊定氏の尽力によるものである。

四、水口豊次郎氏旧蔵短冊は、遺族より特に本館に寄贈されたものである。本短冊集の末尾に水口豊次郎氏の自筆俳句短冊（二八〇二）ならびに肖像画（二八〇三）をそえてこれを記念する所以である。



俳句之部

了

秋 曆 世と酒と古来まれ人冬至梅  
すかしき夢の神垣に奉る

重 溪 梅か香に身をあてゝきく日なりけり

あし まろ 木からしや有明たかき嵐山  
蒲城莫才の全館へはしめて罷り侍りて

阿 人 春もまた行とはいはし華の宿

安 水 ほとゝぎす魂もつきぬとおもふ浜

阿 誰 土へたにまことの霜や十三夜

かつしか 珍らなる管物をめくまれしを謝して  
花に実にか室咲よ舌つゝみ

蛙 水

曰 人 はらくと度く寒き木の葉かな

阿 亭 ちよつとして近付き出来し夕すゝみ

あや足 掉さすは物に狂ふか冬の月

あられ 正月も三日月かゝる層屋かな

有 明 風呂先へしくれ降来る夕日かな

有 房 気の散るや拍子の霞む船大工

其二古短冊集(俳句)

安堂不 百舌啼やおのゝあかき山の色

1

一 為 一 うめかゝや梢にあはき月の良  
令息を奥村氏の世嗣と成し給ふ  
主人を賀して

二 倚 橋 花を待つ菊の分根や末楽し

三 以 兄 朝の梅畳に影の置あまる

四 倚 彦 南天の実に日をもつてしくれかな

五 以 哉 仏々の灯も掃捨や夕涼み

六 巳 山 もて余す夜となりけり老か秋

七 為 山 磯山のあかりくちより梅の花

八 為 山 采立やあとにひかへの花の春

九 為 山 添竹に花はそむけて雨の菊

一〇 惟 草 ありてよきはしの左右の柳哉  
園丁大人のうらの山の竹をかんして  
像前にひさまつく

一一 惟 草 木からしの吹残しけりうらの山  
奉納

一二 以 足 水や空乙女まつらん植代田

一三 一 阿 拜 奉賀御還曆  
はつ桜細きこゝろをとりはなつ

一四 一 逸 常盤木のみとり益く繰返し

古短冊集目錄

一	雨	備新々居士 而て見るもつれなし枯尾花	元
一	娥	藪影の松に粧や葛紅葉	三
一	牛	誰を見まほしき姿そ雪女	三
一	四世 漁	顔かくす程は葉もなし女郎花	三
一	具	緋箱の埋る宮の落葉かな	三
一	具	門過る袷もひとり二人哉	三
一	彦	村中か榎木のかける夏の間	三
一	馬	初手ひとつ剥ふり鈍し真桑瓜	三
一	馬	豎横に地を翔り行乙鳥かな	三
一	丸	よろつ代の春にそ帰れ六そしの賀△	三
一	由	鳴一羽往て氷らぬ水田哉 <small>未たし</small>	三
一	維中	はつ手水に六根を清めんと 笥のもとによりて 梅か香をそへてむすふやはつ手水 まつかはやぬしのもとに鶯の来つゝ ありければ 鶯もまつに千とせの舎りかな	三
一	陽井	素外	三
一	路女	抱たかる殿にすゝめむ桃の酒	三
一	淵	子に親のぬれ羽かふせる燕かな	三
一	可	露霜や囀の鷹の羽の光 □般秀億叟は万葉庵老叟の俳門に入我は 松窓の門に入とも旧友心に隔なし長く風 流を俱にせん事を願ひて万句を壽きぬ 江戸の香の樽も二代やこしし酒	四
一	雀	啼堪てかたちみせけり閑子鳥	四
一	一	蓑笠人	四
一	徑	思ひ羽の是にもあるか蝶ふたつ	四
一	蕙	木からしやむかしのまゝの角田川	四
一	壺	きのふより寐たらぬ藤のさかり哉	四
一	茶	うか／＼と人に生れて秋の暮	四
一	蓑	何処に居て鶯なくや笹の雨	四
一	一	雪清し塵は机の上はかり	四
一	九々翁 之	福来んと笑ひ初けり門の梅	四
一	舟	冠に初ていたゞく千世の春	四
一	章	茶の花にうしろ向たる栖哉 <small>米賀</small>	四
一	声	人や見ん九重ちかき花桜	四
一	逸世	寄懸る書院の窓や合歡の花	四
一	叟	さく花と言にくきはと茶木咲	四
一	巢	舜のあふみは湖にもたれけり	四



古短冊集目錄

雨竹庵

↓松意

鳥頂

奥のある春と見えけり臘月

鳥頂

加茂川や宵から更て月涼し

鳥頂

望月の幾つ重るはたむかな

雨塘

七夕やあちらの丘もひとの家

雨塘

いくしくれ林をこゆる鹿ふたつ

雨塘

月夜にて鳴おはずかしきりくす

宇梅

形代や鶯の小蠅も流れ添ひ

雨麦

浦山や雨天うけてはつさくら

雨麦

気のまゝに寐夜か出来て月のさす

七十五翁  
鳥麦

初雛の賀  
はつ雛や愛度さに床狭からん

有無庵

花鳥の中やぬるみもよしの川

東武  
鳥明

さはつたらちらむ桜の真盛

松露庵

かゝるものを風の自在や雲の峯△

東都松露庵  
鳥明

暑まけの老を先訪ふ土用かな

鳥明

松に眼をしばし休めて紅葉かな

雨来

松を杖団子いくらの藤の花

右竜

初雛や袂の中のかくや姫

有隣

一とつれは上藤達かはつ祐

字鹿

猫の恋いまは身おもし蓼の花

雲崖

もみ立て行や時雨の小さゝ原

雲山

水に世を隔てゝ遠し蓮の花

雲山

あけまりの跡は柳の月夜哉

雲子

亀を友に遊ぶや春の花心△

雲叟

古社に狐のこゑや月さむし

雲帯

鳴雀梅苔をかそへるか

雲帯

桐の葉も家鴨もしはしなかけり

雲裡

はつ雪や木曾に桜の名は聞かず

雲郎

松原へ人吹こんで枯野哉

工

永機

さみたれや鯨押える草の上

永機

衣川やきのふ泡のとふ螢

永機

やみの夜はよし原はかり月夜哉

永機

木宝詞宗を悼  
花時や二度と帰らぬ旅ながら

永機

降れや雪竹の網戸の青きころ

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

小 木 髪 小 老 風 肝

詠 帰 爪 茄 子 の 匂 ひ に ふ け て な つ の 月

英 父 ち か く に ふ る 雨 も る や 雉 子 の 声  
毎 朝 め の さ め ぬ を 言 ふ に

櫻 風 短 夜 や 寐 た り ぬ 窓 を 明 烏  
行

榮 舞 坊 起 た 音 と 竹 も ね さ め か 夜 の 雪

越 台 居 な か ら も 見 ら る へ に 出 る 雪 見 か な

猿 左 桜 の 月 暮 く と 見 し は 山 の 陰

筵 史 囀 の 裾 ふ る へ は 飛 や 筆 の さ や

燕 子 花 夕 立 の を き て 行 け り 竹 の 月

小 未 仏

行 と し 七 十 六 市 上 郭 公

衰 丁 線 香 も 草 鞋 も う れ つ ほ と ぐ き す  
行 と し 七 十 八

衰 丁 七 草 の た ら ぬ 小 庭 や ふ ゆ こ も り  
八 十 二

墨 染 も な か は 葉 に な る さ く ら か な  
亡 師 の ほ 句 を 壁 に か け て け づ の 会 を  
い と な み 給 ふ に

偃 武 筆 の 跡 仰 け は 寒 し 夏 の 霜  
塾 狐 精 神 梁 魏 訛 人 と 我 翁 枯 尾 花 に 跡 を  
陰 し て 今 に 天 下 の 人 を 訛

燕 草 夢 千 里 枯 野 を 廻 る 月 夜 哉

燕 林 三 遊 亭 小 円 遊 子 の 改 名 を 賀 し て  
は な の 名 も 人 に 知 ら れ て 春 の 艸

其 二 古 短 冊 集 ( 俳 句 )

オ

応 々 ほ と ぐ き す 啼 け り 賀 茂 の 御 長 櫃  
吾 山 法 橋 の 馬 の は な む け に

鶯 谷 思 ひ や る さ そ な 都 の 花 の 春

鶯 谷 何 花 の 暈 に 咲 く や 五 月 雨

桜 齋 鶏 頭 に ち る 日 の な く て あ は れ な り

鷗 沙 ↓ 一 筆 坊

鶯 山 む ら 落 葉 ち さ く 見 お ろ す 峠 哉

鶯 宿 山 家 集 読 て な く 也 宿 の 花

鶯 宿 啼 尽 し 夜 を つ く し け り 浦 千 鳥

鷗 叟 態 と 置 燈 も ほ そ 殿 や 驪 月

鷗 叟 瀑 布 視 く ふ る え と ぐ や 藤 の 先

應 澄 粟 津 葉 も の ふ て う こ く 柳 や 焔 の 暮

鷗 里 初 雪 や き り こ な し た る 山 の う へ

鶯 笠 い さ ぐ な 花 に も 見 ゆ れ 魚 と 口

小 对 竹 小 鳳 朗

粟 散 辺 土 と 笑 は る へ も  
万 国 に さ く ら の さ く は と の 国 そ

木 辺 野 丸 山

大 江 丸 公 綱 も か う む さ れ け び 高 燈 籠

大 江 丸

- 二七 三六
- 二六 三五
- 二五 三四
- 二四 三三
- 二三 三二
- 二二 三一
- 二一 三〇
- 二〇 二九
- 一九 二八
- 一八 二七
- 一七 二六
- 一六 二五
- 一五 二四
- 一四 二三
- 一三 二二
- 一二 二一
- 一一 二〇
- 一〇 一九
- 〇九 一八
- 〇八 一七
- 〇七 一六
- 〇六 一五
- 〇五 一四
- 〇四 一三
- 〇三 一二
- 〇二 一一
- 〇一 一〇

大江丸 なにとなく雨ふる冬の田つらかな

〔旧国〕 雨過て庭の萩はらしつか也

〔旧国〕 元日やうくひすもなくてしつか也

翁 折るなかれ松に手をひく桜哉

七十二叟 名護屋城趾

屋烏 八月や胆の潰るゝ濤の音

屋烏 声かけてやけに芒の中の道

乙 因 夕立のあとにうかふや亀の甲△

乙 因 九日湯もとにて 菊ひてゝ女まぢりにゆあみせん

乙 雨 月の野に居直りて見るさくらかな

乙 二 大津絵は梅にうつらぬ寒さかな

乙 人 わかれ 名残おし黒髪山に残る雪

乙 巢 後京極殿の夜半なりぎりゝす

乙 由 冬かれを孤笑ふや赤椿

乙 雄 命おもかけ買ぬ昔の菊の雛

乙 良 歩行音些は聞たき千とり哉

乙 柳 姥捨山 吹よせの花に水なき田毎かな

乙 国 はらいゝ青空に成る柳哉

明安き夜や莫太に船の寄

一五

乙 国 松山の松風に満小春かな

一五

一五

乙 彦 賀米寿 花やかに米積上てたから船

一五

一五

乙 丸 午時飯のかねかななるなり花重

一五

一五

乙 峰 髭風君の賀を祝しはへりて 花はあまた柳の老木たのもしき

一五

一五

乙 也 けさのことおもひ出されす藤の花

一五

一五

乙 也 はしめて金城に入て 鯪はこの光る木の間や雲のみね

一五

一五

音 人 水のみによれば団扇もかされけり

一五

一五

温 克 雪の樹々知る人とは柳かな

一五

一五

塊 翁 見え初る夜より乱れて飛螢

一五

一五

小 竹有

一五

一五

海 翁 早乙女やちゝをのむ子も笠のうち

一五

一五

介 我 招き度友に初雪を訪れけり

一五

一五

快 台 寐せつけてゆけよ我身も友ちとり

一五

一五

可 因 鶯の細き咽よりはつ音哉

一五

一五

花 因 そつくりと落ちて地に咲椿かな

一五

一五

何雲房 聞夜にも味しめさせす子規

一五

一五

何雲房 聞夜にも味しめさせす子規

一五

一五

何雲房 聞夜にも味しめさせす子規

一五

一五

何雲房 聞夜にも味しめさせす子規

一五

可盈	みて貰ふ菊にたらしたあふらかな	一八			
菓烟	故郷の遠きよ夏の草の丈	一九			
可翁	我ものにわか身はなりぬ秋の風	一九〇	雀鳴	広庭や宵にころりと初蛙	二〇六
臥央	桐の実のくろきよりしくれそめにけり	一九一	雀鳴	木からしの日は榎からのほりけり	二〇七
荷乙	つむ出した腹に雪吹の仁王哉	一九二	樂乎	鳴の声これや見ぬ世の夕ま暮	二〇八
荷外	さきへ来て退屈するや花の奥	一九三	岳輅	巾着に小判春雨梅の花	二〇九
霞外坊	猫ふんて転寐さめる火燵かな	一九四	岳輅	鶉のちから繩一はいに見ゆるかな	二一〇
花染坊	やまかせの消す夜はほそし鹿の声	一九五	鶴光	宵の間や七日は月の品さため	二一一
柿磨	呉そふに見ゆるや奥の炭たはら	一九六	花兮	魚のためなてし子つみぬ露こゝろ <small>漁村</small>	二一二
花喬	葉にひそみ葉にひそみつく椿哉	一九七	禾月	営に寐ぬ家もあり郭公	二一三
可狂	水に斗涼しい影を初嵐	一九八	花泉	夜は既に深山こゝろや郭公	二一四
花曉	鶯の声にかゝりしはるの雨	一九九	花紅	名所花 ちりみたす花やその名もあらし山	二一五
荷曉	朝涼や髪をふり行洗ひ馬 初老を祝す	二〇〇	鶯溝	淋しさの水はなかれてかきつはた	二一六
荷曉	不尽白し春たつ朝のほり坂	二〇一	佳山	踊場は月夜も闇もなかりけり	二一七
鶴老	右につきひたりにつくや花と水	二〇二	何戎坊	さふ飛へは水にもひとつほたる哉	二一八
雀城	鴉の巢の雨夜もてらせ飛はたる <small>琵琶湖</small>	二〇三	花叔	鴈金の夜を広けたる野山哉	二一九
鶴頭叟	蓑亀のみのほとのはせ髭の春△	二〇四	鶯少	艸の実のほち／＼と飛小春哉	二二〇
雀阜亭	水の面は鳥に譲りて二夜月	二〇五	華城	菜畑や夏くるいろをのせて吹	二二一

其二 古短冊集（俳句）

小菊貫

鶯雪 いなつまや何はなくとも酒ひとつ 三三

可洗 世はかくとしらてこそすめ風の露 三四

鶯仙 火袋を抱て花さく八手かな 三五

瓦全 高田のいほりにひとり世をのかれて 三六

瓦全 行としや是まてしらぬ松の声 三六

柯則 舟頭の朝寐して居る寒哉 三七

荷邨 もれ出る女珍らしまつの内 三六

何鳥 明ほのや豊かに算ふ羽子の音 三九

可兆 行春の柳はくらく明にけり 三〇

葛古 初午や梅も赤きに咲かはり 三三

葛三 はくからてするや御祓の咳払 三三

葛三 ねもころにとりあはせけり草の花 三三

葛三 橘のいまにはしめぬ寒かな 三四

葛井 小春秋庵〔三世〕 三四

可都良 花芒わか名を隠しとけにけり 三五

葛羅 頻趨法道三十年欲身雄常碎心魂 三六

かづ 番禰宜の嗽止んて虫の啼 三七

可都里 静岡公園 三六

かづ よふこ鳥啼や夕付花の色 三六

竹はしら細き心に小夜しくれ

可提 やかてさくはなもおもほす掃尺 二四〇

可貞 気のそれる野も断りそさいた妻 二四一

嘉奈女 初しくれ日かけさしおふ紅葉かな 二四二

可南 うくひすの土ふむはるのゆふへかな 二四三

蟹守 とぎの間もけしきさためぬさくら哉 二四四

花鳩 しくるゝや我身ふりゆく影ほうし 二四五

兼也 ↓ケ 二四五

かの おほつかな雨かと夜の藤の花 二四六

歌白 鹿の角つま木にかけて猶淋し 二四七

歌白 朝桜身にいたつきはなかりけり 二四八

歌白 春かせや民に聞せて楽のふね 二四九

歌白 墨も日をもつてかそへつとしの暮 二五〇

鵬臥 こへかたき日の一日そ雲の峰 二五一

小万和 二五一

可朴 月の出て遠ふ成けり冬の山 二五二

禾木 月もるや取ちらけたる膳の上 二五三

何丸 ↓ナ 二五三

花明 短夜や夢には長い事も見せ 二五四

亀丸 夏の月またるゝ秋の月夜哉 二五五

茅 簾 寐れは猶寐たし雁行舟の中  
 化 来 苗分て賜へ久しき菊の主  
 可 来 名月や言はゝ難波のなには橋  
 過 来 梅か香は花にかゝるゝ日南かな  
 可里保 飯蛸の足から春の夜か減か  
 化 竜 窓へ来て物ぬう尼や夕時雨  
 荷 了 汐先のはれかねてあり朝さくら  
 珈 涼 風の名を漸吹てみそきかな  
 我 六 朝鷺の雨をうけ取柳かな  
 卷 阿 きくの香や隠者にしても身たしなみ  
 草／＼を其儘に  
 巻 阿 おくれて翁春を営み玉ふ庭前の  
 撫子の霜にも逢はて此日まで  
 貫 阿 行秋やつく／＼鳴の立すかた  
 寒 鳥 岨つたふ行もあふなし雲の峯  
 菅 雅 あくた川のあた咲ならし杜若  
 菅 雅 むし籠や子は寐てしらぬ親の恩  
 閑 雅 ものたらぬこゝろの外よきしの声  
 灌 河 漣や鳴のあわいを春の風  
 甘 海 よみかへるやうそ土用の朝あらし

其二 古短冊集（俳句）

二五五 寒 厓 夜をこめてちるけしきなり山さくら  
 二五七 寒 厓 松風の落て夜をしるふすま哉  
 二五九 判者 抱雪園 飛鳥のかけも移りて水ぬるむ  
 二六〇 判者 抱雪園 捨水の流れす乾るや蟬のひる  
 二六一 関 月 いかたしも紅葉にさすと竜田川  
 二六二 完 伍 鶯の声はくもらぬ浦辺かな  
 二六三 鴈 戸 追善や彼岸さくらの花ほうし  
 二六四 甘 谷 なつかしき茄子のはなや拾ふほと  
 二六五 閑 斎 山影のひは／＼はしや霜の鳥  
 二六六 寛 山 競渡のあとや稲さの夕穢  
 二六七 喚 之 若葉水にうつりて心動きけり  
 二六八 岸 芷 汐の月の光りみちけり寒のやみ  
 二六九 閑 樹 秋来ぬと人はしらすも草の露  
 二七〇 岩 松 能てさえ僧は旅なり芝の上  
 二七一 官 翠 富る家の秋の豊や米俵  
 二七二 玩 世 浦のけしき千鳥の宵となりけり  
 明石の夜泊  
 二七三 甘 泉 はつ裕人肥たるか故にゆたりとす  
 二七四 関 叟 ゆり起せ合歡も柳もほとゝきす

管鳥 ほととぎす夜の心をわすれたり

二九二

其阿 雪をつみ水をくたく筏かな

三〇九

管鳥 たけ過ぬ杯こそよけれ女郎花

二九三

其惟 あたならしするや夜明の遠碓

三〇〇

管鳥 見るものはなりけり雪の国木はら

二九四

其一 念入て問ふみちすしや露の苔

三〇一

甘棠 名月や隈無き須磨に塩曇

二九五

紀逸 降そうな三十日をふらてしくれ哉

三〇二

雁宕 降ゆきや彼岸さくらを襲

二九六

紀逸 雲つかむおとこ揃や不二詣

三〇三

塞馬 ↓サ

二九七

紀逸 月やあらぬある夜越たる藪の梅

三〇四

寒白斎 雉子啼やなくやと雨の少しつゝ

二九八

紀逸 誰ための千すしの道や山さくら

三〇五

雁門 子規松そ月夜の仏心寺

二九九

機一 闇のうめはゝき木ならぬ匂ひかな

三〇六

甘葉 座敷まで影ひく梅の薫りかな

三〇〇

機一 夕鰻口も土用の入る日かな

三〇七

完来 鶯や鳴たつ沢も夕暮す

三〇一

希因 面白しことしは古巢にほととぎす

三〇八

完来 春の月日波にふたつはなかりけり

三〇三

清得舎の主にさたまる国瑞のうしに  
まうしおくる

三〇九

完来 真孤江の水くらき夜や啼水鶏

三〇三

奇淵 老木とは後に気につく柳かな

三〇〇

完来 かゝる夜のありとはしらす後の月

三〇四

野放しの馬呼声や秋の風

三〇一

鷹来 佐保姫の機嫌をふくか松の風

三〇五

砂地から夕日輝け如意くはり

三〇二

閑里 腰かけて片袖寒し梅の花

三〇六

規丸 掃華咲や根岸の星月夜

三〇三

菅笠 照り々や紅葉も色に照し梟

三〇七

起々守 朝茶にもひと客隔て梅の花

三〇四

キ

玄阿 ↓ケ

三〇八

其玉 空何こ声もまちかき時鳥

三〇六

〔誤入〕

季吟 ささちやうにほこらすわらやひの袴

菊庵 行先についてまはるや秋の暮

菊雄 その外はなんにも鳴す閑古鳥

きく雄 さかすには居られぬ梅やさとのむき

菊溪 日のすちや若葉に光る風の色

菊兮 啼なれて月のなき夜もほととぎす

菊兎 来ては又用ありそふに水鶏哉

菊舎 うくいすやけつく聞たい下手なうち

菊所 草の花白きはいたり過にけり

菊石 初月を見るとて立や人の中  
小春のひとつ鷹と聞ける句に對して

菊貫 冬かへる鷹なら又の春や待

菊貫 拜 未た水に残る星や葛の秋

〔菊貫〕 初午やみつの外なる懸行燈

〔菊貫〕 乙亥春冬央子六十賀送る  
今年より十かへる末や松の花

〔菊貫〕 十かへりの花咲松や二度おほ子  
(裏) 双鬼賀鐘子三月廿五日

〔菊貫〕 千妖の松風聞や耳果報

(裏) 丑九月十三日沾山六十賀願にまかせ  
愚考当人へ直遣ス

其二 古短冊集(俳句)

三七

三六

三五

三四

三三

三二

三一

三〇

二九

二八

二七

二六

二五

二四

二三

二二

〔菊貫〕 甘棠子の惣髪を祝ひ送る  
古枝にも若衆粧ひや冬の梅

小 雀阜亭

菊也 眼ふたけは我より外は時雨かな

其敬 夏菊や紙魚ふりこほす椽の先

紀月 雲に包む夜は猶寒し冬の月

希言 艸臥て声のかれたる花見哉

希言 木の中の家と見るより雪の降

倚彦 ↓イ

有白庵 其香 しくるゝや見返る園は蒔たほと

き齋 丈草の得手を桜のみち哉

喜山 置霜のちりに残りはなかりけり  
其角は翁のなきからを笠にかくす  
我も今

箕山 亡骸を覆ふ芭蕉の破葉かな

蟻山 行あたるものにとまるや秋の蝶

几秋 すゝしげや髪てふものは世のほたし  
祝

亀洲 寿や幾十かへりを松の花

祇杖 楫音や霜の夜を啼淀の犬

義上 竹の筒振て見たれば蛙かな

三三

三四

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

四一

四二

四三

四四

四五

四六

四七

四八

四九

古短冊集目錄

淇水	假名ならふ寺の男や春の雨	三六	其 蝶	御庭の芒にむら雨ありしを 一粒の雨にもゆれるすゝきかな	三五
既醉	華々に菊も揃ふて庵の秋 卯月の満水に沼津の鷹入道に休らひ 待りて	三九	暉蝶	なかれ木をうつや寄居虫の出で歩行	三七
其水	齒にきぬをきせつ出たり裸妻	三〇	起 蝶	ほんのりと海より明て梅の花	三七
き水	世埃りに汚れぬ耳や初鳥	三〇	橘水	ねにおとゝふたつに成りぬ秋の水	三七
其成	朝千鳥花に水よりあらはれし	三一	橘童	雪よりもめつらしき人のまゐられし	三七
其声	峰の月鷹はこふしにもとりけり 風流の四君にまみへて	三一	其汀	幾く苗に淵のはしめや春の雨	三〇
亀成	まかり出ていとともみちそ筆の先	三二	葵亭	なくくひな笛そよるうちは昏寂し	三二
亀成	暑き日の根さしや朝の一しづく	三三	葵亭	竹の子のはひこむ篤のまかき哉	三三
亀成	降ゆきや木を裂くものとおもはれす	三三	葵亭	花に倦て明すの御重覗く人	三三
綺石	野を来れば野にもなく也夕ちとり 蚊のいふせきもいとほす圃丈子と談笑して	三七	葵亭	むつましく見ゆるこよひの月と雲	三四
祇川	夜はなしやあふぎの音も相拍子	三六	几董	玉碗にうつらふ庭の黄菊哉 祖翁忌	三五
其爪	治豊酒のきいた人間彼岸哉	三六	其濤	古池の蛙は鳴て初しくれ	三六
寄三	人の居ぬ舟のおほさや浦の月	三七	帰童	うちあはず高浪のひまをしられけり	三七
葵足	旅にをるせなかくれを砧かな	三七	其堂	鶯の見なれ聞馴てはし近し 柳丸子のゆくりなき旅行を祝して 咲花を道連にして旅寝かな	三八
猗竹	一度は空へのひても柳かな	三七	蟻道	安永二年巳二月十一日初午 はつむまや宮居は今日も歳開	三九
宜中	いたつらに過る幾日花木権 歳旦	三七	祇徳		三九
喜鳥	其うちば花の種なり初霞	三七	椿年	↓チ	三九

(三九)

龜貝 朝夕とめくるしくれや七大寺  
 既納 白 秋の夜の陰ふり消すや今朝の雪  
 亘麦 おもふ人は思ふ人造れ闇の雪  
 其風 村雨の晴行を見て  
 風て拭く鏡や秋の最中の夜  
 沂風 翌しらぬこゝろや花に隣する  
 亘風 せり摘の鳴追立てもどりけり  
 龜文 むつかしき根は片隅や藤の棚  
 龜文 月夜かと聞は明たりとし忘  
 其逢 裾に物ほしい夜明けや厂の声  
 三時庵 曇無きこゝろに咲やとしの花  
 其鳳 五六日離れて塞く巨燧哉  
 其曆 秋かせにねくら定し鳥かな  
 其明 眠の五十年目や永平寺  
 其由 極月の婚姻を祝て  
 冬籠り開て匂ふ梅の花  
 其遊 水仙や物見の翠簾に目の及ふ  
 龜遊 たる事は知れとみしかき世なりけり  
 九起 うすみ茶の塵撰るやはつ鳥  
 丘高 鬼灯はよい植処よほしむかへ

其二 古短冊集（俳句）

三九二 九 阜 新年雪  
 三九三 九 阜 ゆき明り朝とおもふうちはつからす  
 三九四 牛 行 題日待  
 三九五 旧 国 鶯や寐ぬ曉も声高し  
 三九六 旧 国 ↓大江丸  
 三九七 九 秋 陽炎に見こすやはては勢田の橋  
 三九八 九 成 浅草にて  
 三九九 旧 竹 曙と夕くれの樹や梅柳  
 四〇〇 虬 道 こからしや年く埋る菴の池  
 四〇一 牛 吞 初ゆきや舟の巨燧にさし向ひ  
 四〇二 久 任 去人か雪路を分る富士詣  
 四〇三 九 老 朝貞やまかきさかみの隣りより  
 四〇四 ↓梅亭  
 四〇五 杏 蔭 虫と我とちらか庵の主かな  
 四〇六 杏 蔭 はつ花や我より先に蝶ひとつ  
 四〇七 晚 河 女郎花からたくいほのしくれ笠  
 四〇八 京 山 葉やなきに鳥のしらかへ富貴めく  
 四〇九 教 秀 燕  
 こすちかく春日にかたるつはめかな  
 花のあるしとたり給へる相今居士の  
 なきあとを訪ひて  
 行 春 像に顔合すや帰り花の主

古短冊集目錄

橋水	来た秋のはつくらかりや草の蔓	四三	玉屑	山茶花冬至の日脚いそかしき	四四一
暁台	春の雪扇てはらふ衣紋哉 桜水の里なる雲悦きみの高堂を はしめて訪侍りて	四六	曲川	かへり花それにはうゑぬ木なりけり	四四三
狭道	水に香の不断桜や華の井戸	四七	玉英	炭組や我國両も夜の鶴	四四三
魚淵	↓ナ		玉洋	空悉し梶の広葉に雨の音	四四四
去何	柳壳女ならばとおもはるゝ 初栂のあしたといふこゝろを	四六	玉洋	色鳥や紅葉する木によりもせず	四四五
去何	あきたつといは井くみ上て漱かな	四元	巨山	はせを忌や望月ちかき帰花	四四六
魚眼	おとゝいとなつてしつたる冬至かな	四〇	きよ女	山てらやひと吹風の花をまく 神無月のはしめ信濃へ文を送る	四四七
居橋	はつ雪や我はきのふの我ながら 梅	四三	虚舟	初雪や爪立て見る北の空	四四八
玉翁	日なをりて梅いそかしきにほひかな	四三	虚舟	いさ宵の闇間を白しころの巢	四四九
曲肱	傘たる傘の重たし夏の月	四三	巨椎	今浮て水輪の中の蛙かな	四五〇
曲齋	白衣着る身となる児や未開紅	四四	漁藻	福寿艸千疊敷のねしめ哉	四五一
玉成	こからしや山に向てひとはしり	四五	虚白	むろまちを田舎にしたり赤つはき	四五二
玉屑	峰の花雲の往来にこほれ梟	四三	虚白	山さくら見れば人やくところ哉 草庵	四五三
玉屑	古寺や仏もぬれてかんこ鳥	四七	居白	烏米の役もつや冬至の猫やな木	四五四
玉屑	住吉の社なる夏はらへに詣て 御祓する旅寐之年をわすれ草	四六	御風	あたまから人のほめるや秋の月	四五五
玉屑	我老を見てこそしれり秋の山	四元	御風	春雨に寐こゝろかはる夕月かな	四五六
玉屑	寝時分の月ありくな今朝の雪	四〇	魚坊	鶏かねの中や一声ほとゝきす 春雨や苜に事欠く家もなし	四五七

去来 春山暮色  
花の日や入相のかねの鳴りて後  
雪窟のあるし何方より来り又何方へか  
去子も亦何方より来て彼の叟を友とし  
白裏白表の槿花をくれ先立て去年の水  
無月のつこもり身まかり給ひしをけふ  
の筈に尊靈を招て聊近慕の志を述る  
慕ふ也忘れぬ日の名の御祓

四五

去留 窮屈に超るや蟬の枕もと  
祓妻や切たをへたる煙艸から  
手まぐらも楽し雨さへ春の事

四六

其鸞 鐘はあしにひゝけて秋の夕へかな  
丹波路吟行  
鶯を日たゝ山路の便哉

四七

桐山人 水仙に掃けは塵のかゝりけり  
こき交て其色くくの若葉かな  
葭雀の声恥かしやほととぎす

四八

其流 鷹の声聞て夕のかしき哉  
幾秋もともに丸かれけふの月  
露ほとな乳房見せけり相撲取  
御射山翁の剃髪を賀

四九

希六 鷹の声聞て夕のかしき哉  
幾秋もともに丸かれけふの月  
露ほとな乳房見せけり相撲取  
御射山翁の剃髪を賀

五〇

金英 鷹の声聞て夕のかしき哉  
幾秋もともに丸かれけふの月  
露ほとな乳房見せけり相撲取  
御射山翁の剃髪を賀

五一

金英 鷹の声聞て夕のかしき哉  
幾秋もともに丸かれけふの月  
露ほとな乳房見せけり相撲取  
御射山翁の剃髪を賀

五二

金英 鷹の声聞て夕のかしき哉  
幾秋もともに丸かれけふの月  
露ほとな乳房見せけり相撲取  
御射山翁の剃髪を賀

五三

金英 鷹の声聞て夕のかしき哉  
幾秋もともに丸かれけふの月  
露ほとな乳房見せけり相撲取  
御射山翁の剃髪を賀

五四

金英 鷹の声聞て夕のかしき哉  
幾秋もともに丸かれけふの月  
露ほとな乳房見せけり相撲取  
御射山翁の剃髪を賀

五五

金華 梅菊の肌へ替るや初居士衣  
百年の花さかりや玉椿

五六

錦華 百年の花さかりや玉椿

五七

琴雅 長閑さを踏へて居るや畑の鶴  
冬枯の鳥にとはるゝ添水哉

四六

銀鷺 きのふ見た富士も容るや諏訪の湖  
思ひ邪なきの友求めたる□を祝して  
万代の白水涼しや玉柏

四七

琴吟 赤城神社  
たくたく手に木香ほととはしる氷かな

四八

琴々 曠の座に影深くさす桜かな  
軽尻に薄の上の法師かな

四九

錦江 きりさめや馬の耳ふる橋の上  
名におふ来往の松のほとりまで  
雙李公の帰駕を見送り奉りて  
松に往来いはふ別れや郭公

五〇

錦江 春宵翁の古稀を寿く  
菜大根もこれにあやかれ福寿草  
葛城や君も夜数を佐祐

五一

金谷 鶯や縁かへしてもくからず  
此頃の不尽のひくさよいかのほり  
青空や京取まはす雪の山  
宵月の影もせり込田植哉

五二

琴左 猪牙に寐る夢なやふりそ川千鳥  
朝貞や垣の外えも一二りん

五三

琴糸 朝貞や垣の外えも一二りん

五四

琴志 朝貞や垣の外えも一二りん

五五

琴糸 朝貞や垣の外えも一二りん

五六

琴志 朝貞や垣の外えも一二りん

五七

琴糸 朝貞や垣の外えも一二りん

五八

琴志 朝貞や垣の外えも一二りん

五九

琴糸 朝貞や垣の外えも一二りん

六〇

其二 古短冊集(俳句)

古短冊集目錄

琴堂

朔日を二度見て落る椿哉

四九二

駒々

舟へりの霜や千鳥の足の跡

四九六

金洞

辻切のその夜まことか寒念仏

四九三

空存

夜学迄所化や螢の影法師

四九七

琴風

青空か木の間に出来て千鳥かな

四九四

草丸

明月や無言に見ゆる池の水

四九八

琴風女

やとり木に花かしてやる桜哉

四九五

国村

月花や広がる空の鷹の声  
賀

五〇〇

公望

はつ雪や初瀬にかゝる朝ほらけ  
↓撫庵

四九五

句梅

梅芬々闇の夜さらに感せしむ  
題梅香

五〇〇

金羅

月籠月夜は夏と思ひ見

四九六

句仏

時津風かくて四つの始かな

五〇一

金羅

夕顔や世をふりむかぬ嵯峨の庵  
右邊夜雪庵 秀逸

四九七

句梅

梅芬々闇の夜さらに感せしむ

五〇〇

金羅

千国の月こそ出れ梅の花

四九八

句梅

紛かはしき花さへやさしすみれ艸

五〇三

金羅

元よりも弓箭の国の案山子哉

四九九

句梅

月の柳かくさしとたゝ嵐すれ

五〇三

金羅

↓櫻風

四九九

句梅

上見れば切はないとて柳かな

五〇四

金老

神風の立さらすして青田哉  
船さして月もある也梅の門

五〇〇

句梅

夜の明て後もあふなしけしの花  
賀

五〇五

金老

神風の立さらすして青田哉

五〇〇

句梅

朝かほによせては絞る豆腐哉

五〇七

金老

船さして月もある也梅の門

五〇一

句梅

七草よ華よ芹は白髪の頸

五〇六

金老

船さして月もある也梅の門

五〇一

句梅

ひるかほの手もつけられぬ盛かな

五〇八

空阿八十二夏

朝風の眠りをさます柳かけ

五〇二

句梅

垢離小家も手にかさるゝやさゝけ咲

五〇九

空阿

てる月に弓を捨たるかもし哉

五〇三

句梅

うくひすやさかせてまはる蔵の間

五〇〇

空阿陀仏

すみれにも小雨かゝりてむつましや

五〇四

句梅

大根と云ふ味方あり冬こもり

五〇三

空陰

垣草にくらへて青し山蚊帳

五〇五

句梅

大根と云ふ味方あり冬こもり

五〇三

ク

ケ

小 咫尺 小 蓮之

惠 列 あらたに營し給ふ御もとにまかりて

此宿をあらたに見るや冬の梅

月 応 ありとある星の機嫌や草の露

月 化 燕子華使に伏れと申けり

月 居 名月や梅をりし夜をおもひ出て

月 居 咲にけり梅の木のまま梅の花

月 居 鳴たつやおほきはものゝ風情なき

小 半桂

月 溪 さくらかり初夜ひと時の夜道かな

月 齋 一山の米も搗せる清水哉

月 齋 明行し夜の短かさや花の夢

艸の数々をそろへて送りましたまへる

月 樵 七艸の君か齡そあやからん

月 樵 みしか夜はおかし月落鳥啼

古河 月 川 霜風や雀の巢こもる松一ト木

月 巢 元日やしきりにものゝ遠まさり

月 巢 行春をつかねて富士の使ひ哉

月 巢 松うりにとはてもとしつ雪の事

月 叟 すなをには散れぬなりもつ木の葉かな

五三

五三

五四

五五

五六

五七

五八

五九

五〇

五一

五二

五三

五四

五五

五六

五七

五七

月 叟 一枝は猿に蹴られて落葉かな

月 窓 年礼や扇もらねはもの足らず

八十二翁 月 窓 葉柳にまさる影なり枯柳

月 村 黄もたまに有て気をぬく紅葉哉

月 邨 三千の眠気さめたり山さくら

月 底 宿たつとひといき山やうめの花

月 峰 水の声ひゝきてちるか山さくら

月 峯 陸尺のねころんて居る落葉かな

月 朗 我身にはまた盛なりやふ棒

下 物 香に高し梅の最中の机

玄 蛙 秋淋し花にも実にも艸の上

玄 蛙 春の来るくらかり有りて花椿

玄 阿 嫁か田に誰か来て蒔そ根なし草

幻 外 雪かちにおく山みゆる天気かな

玄 々 雪花菜汁に驚まてるあしたかな

玄 々 一 ↓ 竹窓

玄 固 春秋の花見る霜の木草哉

玄 子 よそへ気のちらぬ眺や雨の花

五八

五九

五〇

五一

五二

五三

五四

五五

五六

五七

五八

五九

五〇

五一

五二

五三

五四

五五

其二 古短冊集 (俳句)

乾 什 耳塚の耳も動くか時鳥

五五

見 風 置替て風のつら□木槿かな

五二

乾 什 武蔵野の一人を追す名こり月

五五

玄 武坊 雪の夜やふるはくくと人の声

五三

玄 俊 曙や華にいひえぬ鷹の声

五七

兼 也 雪をれをいとふやはらふ松の風

五三

玄 祥 風のさす千船は池の木葉かな

五九

犬 養 ↓イ

五九

玄 仍 苔のしたも霞やいかに春月

五九

見 竜 寒さしる霜の降夜もよそながら

五九

玄 心 かつらきの雲や咲ね□花の嶺

五〇

↓蓮二

五〇

玄 碩 郭公  
ひと声に天彦もかな時鳥

五二

玄 竜 ひとまらぬ雲の流れや郭公

五五

玄 碩 鷹か音や琴に遠の山かつく

五三

コ

五三

↓歌白

玄 川 老かままりてのとしの暮に  
身はもとのみにして暮ぬ年もかな

五三

古 逸 蔽入や法華えらみてあはれなり

五三

幻 窓 山路を過る  
冬の来て安堵にみゆる木通哉

五四

香 以 松魚未た四谷を知らず藤わか  
柴の戸や寐過して何を朝桜

五三

↓湖中

見 村 物の香のうつして涼し月と水

五五

江 月 垣穂から振て出てゆく火串哉

五〇

玄 仲 相州諸越原にて朝鮮人往来之時  
さそな見んもろこしのはらの雪のはな

五六

送 別  
わかれはの雲かなるかや初さくら

五九

元 朝 はるの海魚見の采配の動く也

五七

弘 湖 都へはなせ出ぬらん閑古鳥

五二

玄 陳 雪に今朝色をかへけり庭の松

五六

駒 々 ↓ク

五三

玄 的 神かきは野への幾色手向草

五九

嵩 左 坊 木からしや巖に凄き鷺一羽

五三

映 波 秋野々や丘より花のみたれそめ

五〇

豪 山 唯浅く啼け名月の菝

五四

公成 咲みちて木の間さはかし山さくら

海辺

江草 蟻のむれ蟹のあゆみにわかれけり

敲氷 今一度御幸も待たて落葉哉

孔阜 腹の立こゝろつめたきはしら哉

岱李主人の初老を賀して

寄居虫磨 此れからや花の中なる四十雀  
(裏) 備後沼隈郡松永村中浜 遠部和平

紅 冷酒よひて未だ帰らず亭の客

香匣 ぬくもれば帰る気のさす雪見哉

今日召吟の元旦

黄鸝 鬼も今朝礼魁を斗けり

(裏) 天野梅翁

公路 降る雨の暗う成たる椿かな

五雲 百に成河爺か留守して田植哉

古音 暑き夜はそこらへ置いて今朝の秋

呉厓 風癖はいけてものかぬ薄かな

呉嶽 月はまた入らぬ明りか天の川

五菊園 頃もよし花の紐とく冬至梅

五橘亭 また慾は鶴に乗たしけふの月

五休 いたつらに袴ぬらすや春の草

枯魚 日のでりて降やこいけの鴨は留守

五五

黒花 山中にやとる  
猪を追ふ声の聞えて夜寒哉

五七

谷水 来たといふ秋のたよりや桐一葉

五八

黒駱 膝かゝえなとしてありて秋の夕

五九

黒駱 悔りの口ふさげはつ椽

五九

黒駱 雨十粒ひと村やみしきぬたかな

五九

黒駱 本意なしや今年は雪の夜降かち

五九

古玄 鶯や茶せんかさりも裏書院

五九

古光 うらゝかや亀にもいふ老はたそ△

五九

壺公 滝むら大通院のほとりにて

五九

五口 月影のしみこむあたりけさの霜

五九

五口 菊や道喜か溝に宵節句

六三

五貢 菊溪風人の首途を祝して

六三

五貢 こゝろほと華に着ならせ旅の笠

六三

五貢 董酒山門にいることをゆるさすとても桜かな

六三

五貢 けふも又同じ桜におなし友

六四

吾山 鷹はまつ時に入けりほとゝきす

六四

吾山 春の野や錦のうこくをんな連

六六

湖十 草木非常をしめす

六七

湖十 松かせのしはしらえつ夕桜

六七

湖十 青柳のふりほときたる寒哉

六八

湖十 とし籠のむしろ催し給ふ日いと面白く  
ふり積りけるに  
としそ積雪のひらきや白懐帯

小 異窓

虎杖 門々や瓜の荷をきるみつむまや

小 天姥

五条坊 草刈も樵夫も黙るあつさ哉

午心 鳴るひたり垂る石清水岩根かな

午心 籠り居て冬に逢ぬと襟に来る

午心 川くも安き旅ねやはつ紅葉

五 錐 仕付芋の火にくはる夜そ東風曼  
(裏) 東奥の行脚柳里といふ

湖 静 しくるゝや富士は笠着て見へかくれ

古 声 春雨のすかたか須磨の古簾

古 声 蛸の月まさくくと夜は明てあり

梧 井 日の脚や梅に柳とうつり行  
春興

午 節 滝とのは立木の中よ春の霜△

呉 雪 多針堂の君の東都へ下り給ふを送り奉る  
風かほるへしたよりきく度々に

呉 雪 ひとり居の庭に余るやさらし布

呉 仙 締めある匂ひやうめの朝ほらけ

呉 仙 鶯を思ひ出す日や冬の梅

五 則 行々子なくや釣する人もある

五 竹坊 紅梅やしつかと春の気にすはり

湖 中 何として氷を出しそ山の雲

小 幻窓

五 調 望るゝ芸をは持し節季候

吾 長 栄ふみの亀の齡や春の雨△

乞 隠 日のゝほる霧のうしろの高根かな

小 文晝

兀 雨 むら雨のあとも日長き四月かな  
牛頭天皇法案

兀 雨 尊しやはらふ哲ひを馬の蠅

小 鳥酔

五 渡 朝かはやひとりうれしきゆふ詠

五 道 遊ぶ顔の花や水くれ月もくれ  
髭風子の七十を寿はへりて

古 帆 白ひけの八握に薫れ梅の風

古 帆 四五本の松から見出す霞かな

おしむへき□をは人にとはせてそ  
らたのめにやならんとすらんといへ  
る哥のつくくおもひやられて

壺 半 草にこそ海も音すればるの暮



古短冊集目錄

燕芝居士一周追善

菜英 思ひ出さず其時鳥此夜哉  
 西鶴 むかし男の詠め残せしかた野の花に行て  
 何と世に桜も咲す下戸ならば  
 採花女 白雲は北へなかれて柳の芽  
 採花女 わすれよと肩に吹くか草の風  
 在器 珍客やまづ唐網の月まろみ  
 柴居 とつくりと見れば柳もさわかしき  
 祭魚 山かぜや雪にもならて小一日  
 西月 登る月のあかつきちかき野風かな  
 在古 末枯の日のさしぬける疊かな  
 再見坊 寒菊や置まとはせぬ霜の中  
 采窓 ↓菜英  
 左逸 ぬる故蝶形の外のいのちかな  
 左軛 膝へ来て猫のうるさし夕時雨  
 西馬 名月の試みによる伏屋かな  
 西馬 雪となる迄にこなれし夜空哉  
 塞馬 はつ花や彼岸過ての一ゆとり  
 塞馬 草の戸やさく事にして菊の花

小橋道

六〇  
六一  
六二  
六三  
六四  
六五  
六六  
六七  
六八  
六九  
七〇  
七一  
七二  
七三  
七四  
七五  
七六  
七七  
七八  
七九  
八〇

才磨 はつ雪にさらりと鷹の屏風哉  
 西武 こはいかにあぎればはてたり秋の果  
 来 かはる夜の月も見にけりといふし  
 去来の哀傷もおのつから思ひ出て  
 無やさそたゝさえもこのあぎの暮  
 沙鷗 はな米囊や男気遠き算の鉦  
 沙鷗 山梔子のはなものそくやほとゝきす  
 沙鷗 此月に酔すは何をはぎの宿  
 左角 紅葉焚く鍋もあるへし錦山  
 さき まよひしもあたにはなれて鹿の声  
 左琴 咲かして木に幅の出るほたんかな  
 昨非 加翁のはつ幟七とせ余りふたとせに  
 なりぬれと色かわらぬ愛たさ祝てま  
 たも端午節句にたてならへたり  
 色かへぬ若まつ浦ののほり哉  
 左見 名月に団もつたも道具かな  
 さゝを さりとともと見るや小春の重山  
 小波 桃のまとのそけは並ぶ人形かな  
 乍昔 燈も氷る北野の森や鉢たゝき  
 紅花  
 榎雀 明日の日はふるともよしや紅の花  
 左雀 鳩一羽うく水無月の朝心

六五  
六六  
六七  
六八  
六九  
七〇  
七一  
七二  
七三  
七四  
七五  
七六  
七七  
七八  
七九  
八〇

茶 静 帳面に付いた宮司の鹿の子哉

茶 静 夏河やめし櫃氷る岩の間

左 人 水鳥の声きく夜の忙寐哉  
水鳥

些 知 春のかせ只ゆかしきは築地哉

察 調 山吹の蛙に□をいわせ鬼

実 起 ↓ 雨表

左 文 浄柔居士の三周忌の法筵を覗き侍りて  
蟬声や小僧も経は達者なり

左 文 五菊雅公の八十を賀して  
舞へ謡へ八十嶋かけてすゝみ舟

砂 文 鴈おつるかたよりおこるゆふへかな

砂 明 <sup>三桃舎</sup> 蝶飛て花の居直るすみれかな

左 明 寐覚れは星に音ある時雨哉

沙 羅 須弥山に寄かゝりけり冬籠

茶 雷 初夢や春のはなしの早ひとつ

座 来 もろ共にあまる寐覚のこゝろ哉

左 柳 森陰や朝出の馬に露しくれ

↓ 古梁坊

作 笠 鴛鴦の巢作る夜の巨燧かな

沙 笠 おなし人の諷ふてかへる夜寒かな

蓑笠人 御蔽 浮しつみたか形代そなかれ行

↓ 一羽

左 簾 人の短をいふ事なかれ花を友

左 簾 ひとり言申て臥ぬ妖の雨

左 簾 たつ鹿のそなたの空や残る月

左 簾 奥深く降雪黒し三輪の山

三 猿 遠ければ梅はかほらす遠柳

三 猿 午の日の午の剋にも皐月雨  
(貼紙) 土浦藩

三 猿 白梅や窓から明て雪匂ふ

三 猿 夏の雨星を飛く戻り鬼

山 花 はつ冬や沢辺の水に薄烟

山 外 耳馴て降ともいはす五月雨

傘 狂 枝くはとりひろけても柳かな

三 眺 白梅や雪によこれし崖外れ

三 径 いつもく朝の戸はやしかとやなき

山 皓 雨過て予もあやかるとふじばかま

杉 谷 蚊のなかを又火貫の来事そ

其二 古短冊集(俳句)

古短冊集目錄

小金ヶ原閑道

杉氏

鶯も啼て夏野に深みかな

七代目  
三升

振袖の鹿の子班や花のまぢ

追善

三升

昨日けふ思へは霞む山の形

小白猿

三松

花の枝にちらさず鳩やならひ居て

寄礼花

山夕

夕顔のはなや飯餅うるわたり

一犬かたちをほゆれは千犬声を  
吠るとかや

三泉

初花に先たつひとのうはさかな

望夫石にて

山鳥

姫石はなみたの種子や虎の雨

我家春事

杉長

十ヲてはと九ツさいた桜かな

一雅君婚姻賀して

三鳥

松二木日にく雪の深み哉

三菟

遊るかとおもふなまこのすへり哉

三無

大そふな山のわらひや雪御

三西

坐に寄ば背中へ廻る寒かな

三曜

はつ厂や肌の寒さもけう一重

三駱

あさ顔や朝寐の人の哀れなり

山李坊

初時雨沖にはさけふ人の声

七三

山麗

なつかしき樹の枝焚や雪の宿

七四

(裏)浪花東籬園

七五

紫庵

ゆゝしさや野に出て月もかけ離れ  
柳几雅公山水の勝を尋て此地に  
遊ひ給ふと聞て

七六

市隠

我のみか待えて嬉し郭公

七七

志宇

奉納  
白梅のもの云初て花の春

七八

志宇

白玉の露を鳴ねかむしの声

七九

志宇

遠やまの雪水と成手水の湯

八〇

紫雲

芳野と云へる山中の茅屋にやとりて  
寐る程の宿とみへしか時鳥

八一

士英

つゝ立て秋を見よとや峰の鹿

八二

斯焉

萩の芽に雨はゆるみし四極哉

八三

しをに

くま笹や尾越の鴨のひとあらし

八四

自我

咲も仇見るも化也帰り花

八五

子貫

目に涼し青田の中の日傘

八六

似鳩

行秋や葛の根浸す山根川

八七

司丸

忤めにくとの接穂かな

八八

似鳩

行秋や葛の根浸す山根川

八九

似鳩

行秋や葛の根浸す山根川

九〇

似鳩

行秋や葛の根浸す山根川

九一

似鳩

行秋や葛の根浸す山根川

九二

似鳩

行秋や葛の根浸す山根川

九三

似鳩

行秋や葛の根浸す山根川

九四

似鳩

行秋や葛の根浸す山根川

九五

似鳩

行秋や葛の根浸す山根川

九六

似鳩

行秋や葛の根浸す山根川

九七

似鳩

行秋や葛の根浸す山根川

九八

似鳩

行秋や葛の根浸す山根川

士喬 あさのうち日々におほへて梅の花  
 只狂 後の月といふ際もなし後の月  
 紫暁 福曳やはつねの君に竹箒△  
 自経 ほとゝきす宜しくまくらを定めけり  
 玆竟 しけりあふ青葉のあたり子規  
 子琴 ↓ 文阿坊  
 此君 けさからは雨か勝なり行々子  
 市九鶏 徳運義光居士なゝとせの牌前に  
 士敬 雨ひと日やみなく過て稲のはな  
 指月 水くゝる夜の錦や飛ほたる  
 指月 夕立や山の眠の覚るとき  
 鉄舟 ↓ 白峰  
 指月庵  
 重丸 一日向あてゝ見に出る紅葉かな  
 重頼 聖護院宮御入峯寛文五曆八月  
 重頼 強力もあはれと思へお峯入  
 而后 てらゝと海もま近し山の梅  
 支考 ↓ 見竜 ↓ 蓮二  
 士口 鴨啼やくひすし包む幾寐覚  
 糸口 葛紅葉 よれまとひねたれ上戸か葛紅葉

其二 古短冊集（俳句）

七三 支兀 寿の一字を詠す  
 七三 四山 人こゝろうつせはうつるさくら哉  
 七三 紫山 梅支兄の新盆に  
 七三 芝山 珠数をくるひまのなくてや盆の月  
 七三 芝山 樽と寐て夢もよし野の桜かな  
 七三 芝山 小李白  
 七三 芝山 花の名をさまゝに咲小草かな  
 七三 芝山 老安き身をうかゝと月見哉  
 七三 枝舟 北時雨空也の門を叩き鬼  
 七三 旨恕 郭公二声きくや発句脇  
 七〇 自笑 降出した日に近よるや五月雨  
 七〇 自笑 子か新居を訪ひて  
 七〇 自笑 青竹の枝折戸たゝく水鶏かな  
 七〇 支水 しら梅のしらみかねたる寒さ哉  
 七〇 芝水 来年を最うまたせるそ散さくら  
 七〇 只青 見とめたり水のうへなる月あかり  
 七〇 咫尺 玉磨の手もとに落る春日哉  
 七〇 慈石 苔より開て軽し花のえた  
 七〇 史干 押のけて寐たり眼に来る夜の花  
 七〇 士川 うこく共見へす跡ある田にし哉

二川	百生のあからさま也初しくれ	八四	若翁	梅一むらうち捨てある月夜哉	八九
資膳	みとり子のふり分髪か絲柳	八五	若翁	庭前二木の花もけふのせくの幸なれば はらからの雛やさくらも姉妹	八〇
自然堂	よし原やわかれおしみの小夜時雨	八六	雀志	菊咲や夜にかたよりしものゝ寂	八三
紫竹庵	霧の引かたになひくや山の草	八七	雀志	桐の葉第十集を賀	八三
七尺	留守くくと自身答て冬籠	八八	若人	入船を祝うてむれぬ浜千鳥	八三
子鬘	初月忌成日古律丈の館にして追善の 俳諧催させ給ふは実成願得脱の意に も叶ふらめとおし斗りて	八九	若甫	松風のいたつらするやほととぎす	八三
此通	はげ山の入日見おくる寒さ哉	九〇	若甫	雲公鳥鳴てみしか夜覚へけり	八四
十黄	水仙の垣や日も照り時雨もす	九二	若甫	風先にのり行声や郭公	八五
十竹	卯のはなや二番鯉をつけた馬	九三	若甫	しら雪や終に明行松の月	八六
士の	黄鸝の初音曠野に行わたる	九三	酒竹	冬枯や鶺鴒の糞白き石の上	八七
餌平	鶯や枯葉の落る竹のかけ	九四	社麦	あなめくといひし草も枯野哉	八六
紫鳳	盗人にはなをもたするさくらかな	九五	舍用	社内から揃ふて出たり大根曳	八九
八十老翁	夕立や松の位もかゝる時	九六	社来	水鳥の口ほくれけり隴月	九〇
紫鳳	白けしや眠たゝくうちの花さかり	九七	社来	ひたくとするや小舟の隴月	九三
四明	雨過る雲路にさむしらの声	九八	車来	大鳥のとしくとふや十三夜	九三
資明			車両	健気にも蒼持けり冬の草	九三
沙鷗			士田	はる風になれも遊か糸柳	九四
			史雄	寄亀祝	九四
			史雄	毛衣に緑をかされ六十の春△	九五
			史雄	花にあらしの名もたゝすさくら草	九六

秀億 ほしおいてわすれ小袖やさしくれ  
 秋禾 夕越てさくらに幅を付にけり  
 秋瓜 はつ午や田に若草を誉て行  
 秋瓜 名月や降はかつらか椎の実か  
 秀外 足跡へ落て重る田にしかな  
 秀外 たれこめてきく耳早し時雨  
 秋化坊 咲さいて一村曇る桜かな  
 秋卉 射すて行青竹の矢にしくれけり  
 秋举 かほりなき海をむかふにきぬたかな  
 袖月 売た樹の影つてありみそさゝる  
 秋香 一輪の薨空を定めけり  
 重厚 青簾手習ふ君か化粧哉  
 重厚 象潟のうつゝに昼の水鶏哉  
 重厚 冬籠人そしるへき口もなし  
 秀国 天のかく山耳なし川を過て  
 舟山 泊りたし桜ある家の夕けふり  
 秋耳 初雪や暦のいらぬ家の上  
 秋色 世のなかやしたしきものは草清水  
 法眼 冬も又うかるゝ夜あり里神楽  
 従心軒 なをさりに来て見ぬものか山さくら

其二古短冊集(俳句)

三七 秋水 月にしてうき雲消るこよひかな  
 三六 秋水 かゝる夜も身は木の端の鉢たゞき  
 三九 秋水 夕顔や最ひとつさかば屋の内  
 四〇 穠水 跡掃くも涙や去年の村落葉  
 四一 秋雪 合観ほめて行くゝみるや国学者  
 四二 周泰 江のはたや一つらなりに月と梅  
 四三 秋兔 古稀賀  
 四四 秋兔 つくもなる髭しも見せよ梅の風  
 四五 秋兔 入相のかねに花のちると聞へし古曾部の  
 四六 十磨 寺にまふてゝ其桜の落葉しけるを  
 四七 秋兔 世の中はさらても遠し冬木立  
 四八 十磨 初鷹をはやして行や座頭連  
 四九 秋良 いろめきしあけびに伝ふ玉の露  
 五〇 秋良 新月や草喰ふ馬も狩野の筆  
 五一 周和 数珠もちし侍通る枯野かな  
 五二 寿翁 熊谷堤に軽尻やとふ  
 五三 守黒 雪ちらりくゝ震ふや馬の耳  
 五四 守三 きのふから姑に成し巨燧かな  
 五五 守静 掃よせてこゝろ老ゆくさくらかな  
 五六 守拙 彳は暑し小松もたのもしき  
 五七 守拙 懐古  
 五八 守拙 花悲し君か御園のよし野山

守中	外海は空をひたるや雲の峰	八七三	春鳥	天津空に華守はなしほととぎす	八九〇
寿堂	降遅れたをとりかへしたる月見哉	八七四	春鳥	十六夜や鞍を休めし駒の嘶	八九一
珠来	山家には野老ほるらむ露の臺	八七五	春潮	栗栖野ようこくものなき雲の峯	八九二
珠来	しくれくるむら／＼青き空よりも	八七六	春亭	冬かれの力味もぬけて梅の華	八九三
春峨	なまなかに帰る人来て秋のくれ	八七七	春来	↓紫庵	
春蟻	山青し佐野の莖立おもふとき	八七八	春鯉	白雨やうしに一鞭牛の綱	八九四
春蟻	春の夜や手を出して見て雨を知る	八七九	春竜	土籃の豆こほれけり若葉陰	八九五
春湖	遅さくら見るにたとへん後の月	八八〇	春倫	尾花あし毛馬にて海や浪の露	八九六
春湖	雪一度きよめに散て新嘗会	八八一	子鷹	日は声のうしろに落て閑子鳥	八九七
春江	如言子のたちをの五十回の追福をい となみものし給ふにまねかれ侍りて 入相やむかしを思ふ月見月	八八二	正阿	三日月は山にあれとも梅の華	八九八
春鴻	あらましの日かす雨降茂り哉	八八三	浄阿	梅さかぬ里はあらしな餅の饅	八九九
句光	かき越しにうちこむなみやほととぎす	八八四	正意	枝ふりも其儘梅は咲にけり 年の暮に	九〇〇
俊佐	子こもりやかつらはみのる鮎の魚	八八五	昌逸	守る夜やたゝ春秋は夢心	九〇二
春子	春なれや鳥いろ／＼の朝ほらけ	八八六	昌胤	待てけさたてはこそあれ宿のはる	九〇三
春秋庵	老懶兎角炬燵をはなれず いかのほり空は南もふくさうな	八八七	昌隠	言の葉の根さへかれめや炊のきく	九〇三
春色	小 白雄 酌とりの童子愛らし菊の酒	八八八	蕉雨	月かけは枝の鳥にはしまりぬ 寄亀祝	九〇四
春蝶	ほととぎす八瀬の里人ゆかしさよ	八八九	松宇	さとに杖尾をひくかめや老の春△ 卯の花に打返したる寒さ哉	九〇六

松 宇 燭剪て見守る太刀や夜半の秋  
 昌 雲 裁て見る人を野守か萩の庭  
 昌 億 御即位あるへき年元旦 今日や先去年の日継の御代の春  
 丈 河 うかとすな家のそこらに冬のある  
 生 外 方丈の居間にも見へつ蠅叩  
 案 兄 撰 風月の中にたのしき案山子哉  
 法 眼 昌 桂 その色と名やゆふかほの花の色  
 法 眼 昌 桂 夏衣帰さやかろき旅姿  
 昌 堅 ↓道柯  
 昌 俛 聞絶てきくや時雨の秋の色  
 松 後 はしり帆に左右へわかれて千鳥かな  
 松 後 かしく日や蜻蛉ちゝける村はつれ  
 松 後 わか返れ六つをかくしてひとつから△  
 昌 功 竹に啼黄鳥青き羽色哉  
 嘯 谷 梅見へて野は人里の近よりぬ  
 昌 佐 木からしを初秋風の柳哉  
 丈 左 元日はうれし二日はおもしろし  
 丈 左 春の夜や不斗出て渡る水のある  
 昌 三 一こゑに恋はまさりぬ鶴

其二 古短冊集（俳句）

六七 嘯 山 広島柄崎氏所持の八重垣古硯に句を望れければ  
 六八 嘯 山 七夕に貸さは八雲に入ぬへし  
 六九 嘯 山 暁湖水を泼てそちこちとして蜷汁  
 七〇 昌 叱 霧のまやとを山松の下もみち  
 七一 松 什 菊の香やさかなはしほにあちのある  
 七二 昌 爾 はなしろし霞を残すみねの松  
 七三 仍 春 閏十月 雪にたらず時雨にあまる日数かな  
 七四 少 汝 月更て花のしら雲思ふかな  
 七五 少 汝 かゝ見山いさ立寄りてほとゝぎす  
 七六 少 汝 淀のあたりはまた夜深きに梅の花  
 七七 昌 純 鳴て入山の端にけよ杜宇  
 七八 昌 惇 見しやそれ空目おほめく花曇  
 七九 松 翠 右 星飛としぎりに梅の白さかな  
 八〇 松 瑞 月の瀬にて 雪と見はさむし煤さく山つゝき  
 八一 昌 成 宿からむ異木は疎し花の陰  
 八二 犬 石 散もあり咲あり今そ花盛  
 八三 犬 石 月も人に見られん晴の今宵哉  
 八四 常 仙 寿 かゝれとて霜置月や御くし上

簫台	おち葉見に行くせ者よあらし山	四三	升六	軒高く入船つなくさくら哉	五九
昌琢	風の間の眠しらるゝ柳かな	四三	升六	ゆふたちちふと木屋のにはひけり	六〇
松筆坊	明しらむ山に帯ひく桜かな△	四四	如琴	また行む花より奥の木玉哉	六一
八十六翁	若猫やはしめは一夜つい二夜	四五	諸九	山吹やおのか花とて持こたへ	六二
小知	名月蝕に	四六	諸九	鹿鳴や障子にうつる山の形	六三
昌通	月の名もいひけつとかや薄曇	四七	諸九	いく筋もたちし跡あり野々錦	六四
昌程	伊勢衆所望 涼しさの亦上もなし奈の声	四七	渚月	朝もやに鶯近し水の音	六五
昌頤	有浦客船 舟道は有てふ浦や霧の海	四八	如月	おく霜の松位あるあした哉	六六
正哲	戸たゝくは何ことくそ秣の風	四九	如月	冬をやまひと木く譲る声	六七
紹巴	いつくにていつの間にねし時鳥	五〇	如見	寒るよや風のかけたる酒の間	六八
小波	↓サ	五〇	如見	寒るよや風のかけたる酒の間	六八
松夫	花見るや舟と丘とのかはり合	五一	汝篁	馬働や枝も撓て覚東な	六九
菖蒲菴	吹きつて山涌出るや霧の朝	五二	徐々坊	煤に逸て風呂のよい頃戻りけり	七〇
樵風	銭なしのよひ初ものや天津鴈	五三	如水	秋ひと夜風のさはる扇かな	七一
松圃	宿とりて未だ落着す子規	五三	徐生	関守の拾ふて入ぬ蚊遣くさ	七二
松母	月のしたく芙蓉の落花摘のみそ	五四	女川	白雨の空も過行暑か哉	七三
昌陸	仙人の光なるらし菊の露	五五	女千坊	存命てあふもめてたし仏生会	七四
小笠	梅ちらほらこらへ情なき老の癖	五五	女竹	はつ鮭や利根も七里あらまほし	七五
松隣	行過る一雲はやし紙鳶の上	五八	如泥	老の皺のはすやこゑの若鮎壳	七六

催雨は乞ふに応してこよひ清光復何を  
足らすとせん

女 媒

十分の良あはさはやけふの月

九七

士 朗

ほととぎすおもひ捨ても月夜かな

九三

如 髪

和光老人の健なる旅姿を見送りて  
昼かほの杖は伊達かも箱根山

九六

士 朗

川舟やあとへなたゝるほととぎす

九四

徐風庵

春の色うちかふせけり三笠山

九五

士 朗

野に山に身はみつもあれほととぎす

九五

徐風庵

陽炎や波引磯のうつせ貝

九八

士 朗

花の木にむすひかけたる菴もかな

九六

徐風庵

春亭裏鏡七回忌の追福に  
うしと見し花も七たひ七日かな

九二

士 朗

暑日や小庭の松ににけかへり

九七

如 文

初さくら散日となりて又寒し

九三

秦 峨

月しくれざりとは古きけしきかな  
句相連の群賢弥彦子を発起として祖翁  
の靈をまつらるゝ事とし有りことしも  
其法苑にいさゝか香をさゝく

九八

如 毛

ともしふれは露たるゝかそ雛のかほ

九四

甚 化

物売ののほる御代がなくもい山

九九

如 蘭

朝雨の跡かたもなき暑かな

九五

真 海

雨こほし／＼走るや秋の雲

一〇〇

しら雄

ふきいれしこの葉に琵琶のそら音かな

九六

真 貫

冬なればぬくとく御座るあをたゝみ

一〇一

白 雄

名月や后も神田の花もみち

九七

真 彦

鶯やはつ音の夢にけふもなく

一〇二

思 染

人たのむひとや師走のものあんし

九八

信 元

鶯やはつ音の夢にけふもなく

一〇三

滋 蘭

桃てすら曇る日のある盛哉

九九

信 元

門松や榮は古今相同し

一〇四

二 柳

初かすみおくは月雪ほととぎす

一〇五

尋 香

声の下みな名所はほととぎす

一〇五

二 柳

御出立をいはひてよめる  
かせにつれゆきてもかへる柳哉

一〇六

尋 香

巢の鳩やかくすこゝろにひとは見る

一〇六

↓ 不二

子 亮

これてこそ誠の不二そ雪の朝

一〇七

申 齋

三日月の明りに帰る鹿子かな

一〇七

司 鱸

吹風は天津乙女の切籠かな

一〇八

晋 子

はつ厂のみちつくりけり庵の空  
西行と武蔵坊には清水哉

一〇八

其二古短冊集(俳句)

新車 かほみせや赤かは元より四つ紅葉

1010

尋車 手向  
いつも日は短かく思ふ寒さかな

1011

唇秋 竹の節つめて掃けりとしの煤

1012

蜃州 つくくくと人みる花の山からす

1013

信杖坊 夏山や雲一筋に明わたり

1014

新々 居たなりにへこむてかひる入梅の床

1015

新々 泉玉老人西逝と聞て  
彦芽まで出る庭草や離れ霜

1016

〔森〕々 争はぬ姿見へける柳哉

1017

藜々 峯作る雲や果なき海の上

1018

薪水 冬川の水も細れる寒かな

1019

臣石 うちましろ高位の客や月の宿

1020

真澄 ちる花やからすの糞や我天窓  
あまりさきみちたるを

1021

真澄 おなし藤なからも花の咲まよふ

1022

榛堂 鹿垣を今朝はこゆるやはるの水

1023

心非 くれ遅き柳のかたや御船唄

1024

津富 涼風や秋の初空星若き

1025

藜阜 行春や鶯の子も青みつく

1026

又

椎陰 夕くれや鴨のぬけ行花のひま

1027

随鷗 雑  
かくも世をへたきは鶴の齢かな

1028

翠雅 いろと君の旅路ををくりてわかれしに  
有明は又逢ふ月のわかれかな

1029

水外 はつ雪やたまさか青き池の艸

1030

水許 向ひ合ふて夏座布団の涼しけれ

1031

翠兄 山茶花やそむきくりに咲てゐる

1032

翠兄 雲飛や最上へわかる落し水

1033

瑞枝 よろこひのあるか扇をならし行

1034

〔端〕心 八十八翁  
なからへし虫の細音や枯尾花

1035

吹石 更衣上野は青く成にけり

1036

翠川 春風やゆく先さきの柳ねむし

1037

水竹 ほととぎす座頭の聞たはなし哉

1038

翠不 村塾の素読聞こゆる柳かな

1039

吹萬 むし啼やひさこむく家の戸さすをと

1040

碓嶺 やま風のおしかへさるゝさくらかな

1041

寸松 囉はれて花になりけり冬椿  
賀復童  
君か春みきりの亀に酒くれん△

1042

寸艸

1043

寸長 雉子なくや大竹はらを真うしろに  
八十翁 曲り出る水のとまりやかきつはた  
寸風 稲妻  
寸来 いなつまにかた葉の芦のなひきけり

七

青阿 淡雪の届きかねたる都かな  
青阿 空年居士の遠芳忌をいたむ  
青阿 はみかしの縁者なりけり此時雨  
正阿 似た山を見てさへ嬉し不二の山  
井蛙 花にめてたゞ口籠るはかりにこそ  
井蛙 虻となり此あさかほの夜も守らん  
井蛙 時雨  
井蛙 あめつちの道たゞしにや来た時雨  
成安 花は昼もあふなき風の扇哉  
静雨 生涯を無事て老行案山子哉  
青岬 失ふた穂もはへけり春の雨  
井花 谷合にこほれて霧のなかれけり  
青荷 初声をすましたのちや明鳥  
青宜 七十九翁  
青宜 葉さくらや上野も夜るは深山めく  
青橘 馴鳥の梅に人見ぬ夕かな  
青牛 量見る年のはしめの野山かな

其二 古短冊集(俳句)

一〇四四	青牛	阿領上人の御やとをもふして 梅か香や匂ひは宿に留りけり	一〇〇〇
一〇四五	青牛	のへつけに咲て春ける椿かな このほと石原にてらら子にはしめ 逢琴曲を聞しきりに完来か事をお も出されて	一〇〇一
一〇四六	七十翁 青牛	在はさそ愛せんあやめ杜若	一〇〇二
一〇四七	青牛	面白し蛙啼たつ苗代田	一〇〇三
一〇四八	青牛	昼貞や露には寄らぬ花盛	一〇〇四
一〇四九	青牛 麦窓 青牛	みしか夜を明石に泊り合せけり みのに笠におのはよう着て雪の馬 吹落るかるみに成ぬ竹の皮	一〇〇五 一〇〇六 一〇〇七
一〇五〇	青溪	留主の家の式軒まであり紅の花	一〇〇八
一〇五一	井月	ふる雨も清水に成やはなのおく	一〇〇九
一〇五二	西月	月の後此時雨ありひとつ松	一〇一〇
一〇五三	貫乎	引雲の花に障らす草の姪	一〇一一
一〇五四	井左 八十一翁 井資	葉は見せず句はしらすうめの花	一〇一二
一〇五五	井資	ほととぎす静な人や聞こえる	一〇一三
一〇五六	静庵	秋雨やひとり出て見る夜の松	一〇一四
一〇五七	政二	鯉はねた雫かゝりぬ納涼台	一〇一五
一〇五八	政二	さま／＼の恋しつくして頭巾かな	一〇一六

古短冊集目錄

青敷 彼鳥を遊はせて見たし桐の花

一〇七

正式 ↓マ

清焯 送る茶に夜長まきれよ宇治拾遺

一〇六

清焯 しら地こそ人は心のもち扇

一〇五

静処 青空や何処からとなく初嵐

一〇八

青城 来鴈は先しほやきに見られけり

一〇九

正信 ↓マ

一〇八

青坡 暮かねて梢風もつ四月かな

一〇三

井眉 啼かはず鳥あるに似て水鶏哉

一〇四

成美 ささらきや捨て日のさす魚のほね

一〇五

成美 尾長なくそれにも秋の名残かな

一〇六

星布 貝ふくはいさなよりぬと夏の月

一〇七

星布 むさし野の月にうかれ出て

一〇八

星布 行も野中帰るも月の野中哉

一〇九

青芙 紅葉みる窓や居ながら旅心

一〇九

星譜 まつといふ一字の義理に散はなか

一〇〇

青楓 名月や松見てもよし海もよし

一〇一

成明 稲妻や動ぬ雲の間より

一〇二

青羅 月とわか中に今宵のけしき哉

一〇三

山李坊

青李 髭風雅翁を祝して  
希人や雪解いとわぬ高足駄  
一〇四

井里 酒うけてなかめて居たり天の川  
房州保田の里にて  
一〇五

青良 あはれとて馬の喰ひけり水仙花  
一〇六

青盧 苗代や鷺のかづらにそよぎつれ  
一〇七

尺艾 幟見の女にうしろ見られけり  
一〇八

尺艾 見上つゝ月に引つる阿むしろ  
一〇九

石海 月よさに虚舟見ても雁そ啼  
一〇〇

石鯨 古川の水静なり浮寐鳥  
一〇一

石言 春の日や土しつかなる梅の影  
亥春興  
一〇二

尺五 寵愛のはしめゆゝしき幟かな  
賀  
一〇三

碩斎 山家迎花にも見ゆる時雨哉  
一〇四

碩水 道すから加減して来て明の梅  
一〇五

石中 さみたれの雲おほそらに余りけり  
一〇六

石鼎 水音をまくらにしたり簾  
一〇七

碩布 木瓜咲や杉のさし根も来ぬ当り  
豊城下の夏まつりをおかみて  
一〇八

石羅 暮を符殿を盛の花火哉  
一〇九

石蘭 あけほのゝしろきをいつる柳哉  
 世好 下りてたちおりてたつ年の雀かな  
 世塵 塩竈に魚焼人やけふの月  
 世竹 朝々の月夜となりぬ峯の霜  
 雪暉 名月や疎らに見ゆは星の影  
 雪兮 はつ厂や今宵寐まきのみしかさよ  
 雪鴻 卯の花や一際寒き朝の雨  
 雪才 いたみ わするゝに問なし時なし雨の夏  
 雪齋 人よりも先へ春立草木哉  
 節山 踏かふる馬を埋むや山さくら  
 雪志 おもひ入やその道芝に啼蛙  
 雪簫 秋たつや身には添はねと荻の声  
 雪人子 篋士は片のりもせぬさくらかな  
 雪叟 さみたれの夜か明である木の間かな  
 雪村 有を見て押売にする若菜かな  
 雪頂 東都の烏洲大人にはしめてまみゑ  
 雪丁 奉りて 五月雨やすつはりとしたはなしきく  
 雪斗 こからしや竈見通す藪隣  
 十月の箸にも捨す袖の箸

其二 古短冊集（俳句）

雪堂 あさ顔の匂ひさへなき清さかな 二二〇  
 雪万 かけろふの遠野となりけり雪解つ 二二一  
 世南 めい月のこよひさへあり月の隈 二二三  
 是来 保雪庵 咲初し花の心地や三日の月 二二三  
 江戸深川 二二三  
 儂衣 いねの香や旅行人の日もすから 二二三  
 洗羽 山吹や影よりをふく散半 二二三  
 全瓦 諏訪の里遊女夏の比わか謫居を 二二四  
 千崖 取りもせて過ぬ 尋んとて句を給ふ人つてなれば 二二四  
 爺婆の世話にもならぬ柳哉 二二五  
 千崖 折るひたに蜂出されけり藤の花 二二六  
 沾橋 鶯に麦の葉は地をはなれけり 二二七  
 泉玉 貧しさも知られて安しはかり炭 二二八  
 専吟 菜の華や知音の門の漂落 二二九  
 泉香舎 うくひすや竹の園生の奥そたち 二四〇  
 沾山 題竹六十賀 二四一  
 沾山 たけのこや千尋の蔭へ五六寸 二四二  
 沾山 空の秋あらしや作る運ひ雨 二四三  
 七十七翁 七十七翁 みな人の舌をもたるる寒哉 二四三  
 法橋沾山 七世 水に絵を書てことしも暮にけり 二四四  
 沾山 二四四

師徳をおもひ斗りて

泉之 すらくと竹のそたちや五月空

川二 時雨とやとのみ袋の片ひつみ

沾洲 むめ香々の手広也けり春の風

けふはからすも喜泉様のあるし  
祖翁の百五十回をいとなまれけ  
るむしろに座して

扇暑 はせをかれて替らぬけふをとしの春

扇暑 枯野にもうづら来る日のみちはある

扇暑 見はつれのついて来る也竹の雪

仙女 名月の雪はとけけり山かつら

此君林  
仙杖 菊咲や空にしられぬ星の色

泉石 をのつから滝のやせけり冬木立

宣頂 歌人なく朝霧めくる離れ嶋

沾頂 行末の富貴のたねや田植唄

仙瓢 夏の雲またくひまに退にけり

仙鳧 にきやかにほこり静めて春の雪

仙風 侘しさや長等の花の咲き鳧

仙風 まるの鷹は粟津の松にとまりて  
京まてはふるまし雪の小一時

〔川望〕  
仙李 起されて返事はかりや春の雨

夜の船路果しや知れと雉子啼

仙人 古人も稀なる寿を祝す  
花も賀を祝ふて八重の牡丹哉

沾涼 ↓米山

沾嶺 鶯や齧てうこかす浮氷

ソ

素庵 梅か家の道や蜘蛛手に四方の春

宗因 五月雨や天下一枚のうちくもり

宗因 夕立や首すし宙に大井川

草宇 山里やしくれくとたゝの雨

双鳥 老松のふりはけたかし竹の春

双燕 鳥立てうめ鎮らぬ匂ひなれ

桑蛾 さくら咲堤の下や田螺壳

窓外 絶えなんとしてまた道のある花野哉

草涯 燃へしざる火もさしくへす秋の暮

宗鑑 宗論をするや御法の花軍

蒼虬 ひとつ家のあるしもとりて雲のみね

蒼虬 からさきかなくはとこまて麦の秋

小南無庵(二世)

菓鳩 瓜むいて尻立に寄るはしらかな

二四三

二四六

二四七

二四八

二四九

二五〇

二五二

二五三

二五五

二五五

二五五

二五五

二五五

二五五

二五五

二五五

二五五



古短冊集目錄

宗隆	人とめぬ清水かもとを閑所哉	二〇四	素兄	良夜石山にて さゝ浪を空にかはすや月の湖	二一九
七十九老	正月十四日の昼の正夢に有くと見たり		素月	艸の戸や何はなくとも梅の花	二二〇
藏六	はつは吉なり人にもらすまし	二〇五	尼月	なれにける千鳥の空の別かな	二二二
宋也	初しくれ葦あらはとおもひける△	二〇六	素后	武藏野や富士とつく波のはつ霞	二二三
岨雲	ほとゝきすまで持せし藤のはな	二〇七	素更	夢に似しはしめおはりや花赤	二二三
素円	菊咲やなく程骨はおろふもの	二〇八	素更	手をつたふ雫となりぬはつ氷	二三四
素淵	はちたゝき霜ふむ音は前に有	二〇九	楚山	曳馬野や袖の時雨を置土産	二三五
素屋	遠山の明すかしけりうめ林	二一〇	素十	早乙女や瀬田から並ぶ屋の月	二三六
	小・貞瓊		素十	九日賀を祝ふ人に送る	
素外	よむや蛙軍せし日もゆき暮て	二一一	素信	菊の酒天の駿とたはれけり	二三七
素外	春水先生のわたましを賀して	二一一	素信	朝かほやかそえまとふた宵の露	二三八
素外	開く名は何にも嬉し燕子花	二一一	素心	小・梅室 小・雪雄 小・陸々	
素外	黒塚の鬼かもみちの奥角力	二一二	素心	小野良かつくとおもへと焔の鐘	二三九
素角	人足の手もとにたまるつゝし哉	二一四	素心	小・素信	
鼠肝	↓老鼠肝		疎心	名にしおはよむ言葉そ鶯菜	二四〇
素玩	提灯に菊匂ひけり駿河台	二二五	素塵	あひ分る蝶や暖気の長堤	二四一
素郷	夕紅葉あかきはものゝ愛る色	二二六	素石	鳴々てやみ夜にしたる蛙かな	二四三
楚空	露の身とおもひ捨しも秋そかし	二二七	楚石坊	青嵐桜の跡のいろなをし	二四三
即撰	卷中高吟 元日や遊ぶゑて未だ冬こゝろ	二二八	素長	峯いまたはけしき風や梅の花	二四四

素 瀟	連湖亭の主人川越の旅に餞別 月を出す花野は嘸な駕の窓	二三五	素 明	毎日やおなし程つゝ春の風	二三二
素 堂	白梅に袖口むさし驚の齧	二三六	素 羅	あらぬ名を付ても見るや夏の草 慈眼寺のさくらをよみ侍りて	二三三
素 童	黄鳥や首途祝の折もをり	二三七	素 蘭	世にしるきさくらはたきの名なるかな	二三四
園 女	鈴むしや眺寒うふる布子	二三六	素 流	青葉洩る風すゝしめの宅居哉	二三五
素 躑	けふの事みな消果て時鳥	二三九	素 練	冬こもり人にはひとそ紛れける	二三六
素 躑	朝日よき山家に住て烁の月	二四〇	鼠 六	行燈て罌する馬やむら時雨	二三七
素 躑	見て寐すは猶寒からむ冬の月	二四一	尊 阿	遠浅の暮たはかりやほとゝきす	二三八
素 風	陽炎や蓮の折根の穴目くく 伝ひ聞て無水月中八日右左坊雅亭の 枝水くくをのみたれは隔なくして	二四二	存 義	醉さめや地主に入日の遅さくら 解くく手毬ほと也雪丸け	二五九
素 風	おもふ事ありて	二四三	存 義	七十九翁	二六〇
素 風	風とよむ人なし花のちる夕	二四四	存 二	三河の国よし田をよきりて牛久保 てふ処の蒲城ぬしを訪らふ道すか らにて	二六二
素 風 宗巴	江戸川やかせに凍付く岸の雪	二四五	異 窓	あきのくれ東海道のよこのみち	二六三
粗 文	繁山の雪はひさしき霞かな	二四六	盗まれし蓮のぬしの朝ほらけ	二三三	
鮎 文	七夕や目白もちかき橋となり	二四七	湖十(二世)		
素 甫	したかはんみくに千年やきくの宿	二四八	夕		
素 煤	珠数提て遊女も出たり盆の月	二四九	寄射花		
素 丸	八十三翁 里で見たつゝしの山てしれぬ成 鳴と聞こゑはゝ木きやほとゝきす	二五〇	苔 雨	花なれや弓矢取る身の夫婦連 藻の花	二六三
素 丸	二五二	苔 雨	藻の花や目高の潜る裾模様	二六四	

其二 古短冊集(俳句)



卓池 斜凌君へ別るゝ時即興  
 行雲は何れの華をとりまくか  
 卓池 二空に啼てあとなし時鳥  
 卓池 時とつて真臘にふるや秋の雨  
 沢七翁 風すゝし雨のうしろに山の月  
 落花転々鳥春惜  
 沢堂 鳥も地におりて華踏む四月かな  
 卓郎 鶯や去年築かけし夜の山  
 卓郎 涼風を捜し歩行や家のうち  
 卓郎 雪添て十一分や梅に月  
 卓郎 なくしては吹出す風や蓮の中  
 卓郎 駅指て夜の有丈の月見哉  
 卓郎 節季候の読て行けり経御堂  
 汰溪 天地の恵み合せて接く穂花  
 李径叟の一周年忌を手向するとて  
 多少 白蓮の上にかさなる月日哉  
 兌堂 よき向に風見はなりぬ梅のはな  
 兌堂 はつ雪のふりけり芦のふしのまに  
 田女 ↓テ  
 九十翁 暁天  
 たよ女 良あつて雲はきれたり家の花

其二 古短冊集（俳句）

二三六	たよ女	這出して時雨に逢ふや藪の藁	二三四
二三九	たよ女	入月を名残となくか虫の声	二三五
三〇〇	探淵	松影の五尺にたらぬ冬至かな 長州馬関の懐古	三三六
三〇一	潭月	貝寄やよするか中に平家蟹	三三七
三〇二	団斎	花のもときのふへ戻る道もかな 倚柱子の号を得させ給ふを賀し奉りて	三三八
三〇三	丹志	風雅には大黒はしらの牡丹哉	三三九
三〇四	旦水	米の直の底かぬけるか夏の雨	三三〇
三〇五	団雪	田も秋へ戻る支度や帰る厂	三三一
三〇六	旦々	生酔の橋弁慶や冬の月 老懐	三三二
三〇七	淡々	人交りするもはつかし花に杖 藤の花蛭の息の屋形かな	三三三
三〇八	潭北	形代やゆく天竜のあなめてた 敬拝	三三四
三〇九	千影	千	三三五
三三〇	千影	散こゝろつけは皆ちる梅の花	三三六
三三一	千影	秋かせや海こえて来て垣根草	三三七
三三二	千影	ひとつ葉の露の中までけふの月	三三八
三三三	竹有	おししつめくふる春の雨	三三九
三三四	竹有	栂の雨寐に行家のあればこそ	三三〇

稲妻のけしきにむかふあらし哉

竹有 炭の香のひとりうれしき寐覚哉

小塊翁

竹妓 五月雨やいつまてかくす沖の舟

布袋贊

竹妓 ふくろから出てかもしらすはるの月

山家

竹妓 しかなくや月を見て知る十五日

八十八編  
竹香 求めたる榮耀てはなし夏座敷

竹齋 木からしや華なき里の草せまり

竹山 暁はむれへ群入る衛かな

竹二 御降の晴て目立つや松の色

竹窓 うき草や泥亀の背に咲て行

小侶月

竹邨 口あひて歩行はすゝしいその窓

竹頭 荒波を出抜て蚤の涼み哉

竹堂 寐ても花さめてもはなのよしの山

雪静庵

竹坡 色かへぬ松とししらぬ茂り哉

竹茂 梓弓おしてはるの日の入狭山

竹葉 夜こゝろや誘ふ千鳥に降雨か

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

竹里 岡崎のはしによめる

竹里 橋を出てはしに入けりなつ月の

竹里 鯉汁や此夜月すむ松のかせ

竹里 さしむかふけふはすゝきの静なり

竹盧 枯草や只蒼々と天高し

十雨堂

竹老 道草の喰初もよし藪の梅

竹老 植こみの木の間に風の薫けり

知石 小松川にて

知石 代掻や鼻とりなしの二才馬

雉啄 關にしれ利生早梅御薫り

千春 人しれす咲て木槿の潤みけり

千春 奉賀

千春 ならひ立豊の春なり千代の松

中阿 梅か香や朝貞見する閨の窓

九 去年と戸を閉て今年と明にけり

女 梅の手をつえてまたるゝ初日の出

千代 剃髪の春を賀して

蝶阿 月まろしはなのあそひの影法師

長隠 朝顔のさかりを虫の喰けり

鳥海 ほとゝきす聞や翌の九十川

散人 磯伝ひ友にふかるゝ春の風

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

三三三

鳥 宜 泡消て水と成田や春の雨

三三二

鳥 見 夜啼や楳火の中の芋かしら

三三三

調 固 坊 既望や魁に照るほしの数

三三四

長 齋 との華のちるとも知られちりにけり

三三五

長 齋 月にのみひとはなきけりすまのむめ

三三六

葛 齋 □の翁忌に炭俵のほとけたるをさく  
り金屏の冬籠に魂のぬくと云を語つゝ  
時雨来る筋も見えたり櫻炭

三三七

朝 四 汐曇り晴し小鳥やわたり鷹

三三八

長 秋 燕 鉤簾のとにひまなくかたる燕かな

三三九

鳥 周 年ころゆかしかりき兎岸齋の乞□を仰て  
ほととぎす思ひも月もいま晴れし

三三〇

聽 秋 軍せぬ身ははつかしや老の春

三三一

長 嘯 ↓芙蓉坊

三三二

潮 水 雪晴や何処にやとりし鷺の群

三三三

長 水 ゆきも今朝沢辺に腐て氷かな

三三三

柳 居

三三三

長 翠 朝虹の遠く消けり紙職

三三四

長 翠 冬川に百も捨たる小舟かな

三三五

長 翠 銭こほす人や師走の塵の中

三三六

鳥 醉 めてたさに鶴もおりけりたねおろし

三三七

鳥 醉 七十四輪<sup>二世松原庵</sup> 紫竹絶えてさて其後そ気掛の月

三三八

雨

三三九

長 成 うつみ火や応と出て行筏さし

三三九

朝 叟 真白なる富士晴わたる小はるかな

三四〇

丁 知 散てよるあひも音の間もはま千鳥

三四一

潮 堂 稲妻の消て冷たき木の間かな

三四二

鳥 道 木守りのまた熟もせず初しくれ

三四三

朝 陽 田にたまるほとはまた来すはるの水

三四四

蝶 夢 ふくろうや竹の葉光る隣の灯

三四五

構 雲 浅川や目にも留らぬ魚涼し

三四六

構 火 摘草のき給ふ袖を袷哉

三四七

直 生 春風や音なくちからあらはるゝ

三四八

構 堂 見かえれば月夜也けり山さくら

三四九

構 堂 静さを鳥にとられな苔の花

三五〇

構 堂 一休の陸や曇りて盆の月

三五〇

構 堂 出る度に秋はおほかた月夜哉

三五〇

構 道 時しらぬけしきなりけり夏木立

三五〇

西馬

其二 古短冊集 (俳句)

千代尼 ほととぎすなげはこそ人の郭公

三九四

月もり

秋来ぬとよく寐てしりぬ山里は

一四〇元

楊良 花なから春のくるゝそ戀みなぎ

三九五

恒丸

月のない夜を寐て居ればぎりくす

一四〇

猪来 山そへの菊おうきくもなかりけり

三九六

恒丸

しら露のうつゝに秋のたちけり

一四一

楊幽 茂る名のみとりやまつの筆の花

三九七

恒丸

うつくしき雲の立けり春の山

一四二

知来 曇る夜を好ひて出るのほととぎす

三九八

テ

椿翁 裾に里有か烟るや雪の山

三九九

汀雨

鶯之主  
待くて鶯は啼けとも子規

一四三

枕山 我こそは秋よと一葉落にけり

四〇〇

蹄雨

月見てもとしはよるましますまひとり

一四四

枕山 造花かと疑はし冬牡丹

四〇一

定雅

郭公啼さへすれは高音哉

一四五

椿堂 長居して姥は帰りぬ栗の花

四〇二

貞義

おなし音に鳴はくり浜千鳥哉

一四六

椿堂 秋かせや行燈につるす唐からし

四〇三

鼎左

有明や暫ありて花に鳥

一四七

椿堂 萩の花浮雲く夜にもかたよらす

四〇五

鼎左

根を伐て引ぬく菊のちかひけり

一四八

椿年 打かけて雨にくつろく畑ヶ哉

〔三九二〕

鼎左

降中に香のきらつくや雨の菊

一四九

陳良 海山や月を親しむ氣のうつり

四〇六

鼎左

かきよせる木の葉や霜を見る始

一五〇

ツ

三世  
堤齋

秀億ぬしの文台ひらき賀し侍りて  
入船や門さらに狭き大湊

一五三

椎陰 ↓ス

定時

けふ春の季や延立て老か宿  
八瀬へまかりて

一五三

月雄 麦秋の埃りに曇る鏡哉

一五七

貞室

里の名のやせ子にならへ郭公

一五三

月丸 梅さくやよせ来る浪は替らねと

一五八

貞室

人にちと寐よとや残す夜半の月

一五四

貞 恕	七月もなかれて早き師走哉	一四五	田 社	ひたものに狐啼けり冬の月	一四四
貞 松	吸あけし水の中までけふの月	一四六	田 女	肌かくす女の罪のあつさかな	一四四
貞 麦	立秋やふたり連たつ地歩壳	一四七	田 々	蜻蛉やとまらんものゝありまかせ	一四三
定 武	駄賃馬に夜は明にけり里神楽	一四六	天 年	ちつ居にもやと云ながら花騒ぎ	一四四
貞 風	一株の芋の葉にさへ穠の声	一四九	天 馬	相生の葵かつらや若夫婦	一四三
貞 瓊	松風の末にきはすや池の鴨	一四〇	天 姥	身ひとつの暑をさます蔭もなし	一四六
	↓ 素屋			↓ 虎杖	
八十翁 貞 笠	縮入へ戻る日もあり五月雨	一四三	天 民	日にそむき仕丁の眠る牡丹かな	一四七
貞 和	異な道に蹄の跡や初桜	一四三	天 遊	雪てつむ山もこし路のはなしかな	一四八
鉄 斎	あさあらしいさころもかせ春の山	一四三	天 来	ことし春の末つかたより雨降つゝ きて今穗見月のはしめ迄天日の影 まれ／＼なれば日和中の祈念す	一四九
轍 之	雪の山かそへ残して暮にけり	一四四	天 老	雨に寐て于水になるや天の川 梅折は梅持てゆく月夜哉	一五〇
てる尼	うら不二は桜咲日を初かつを	一四五			
行脚 田 禾	左笠君の新宅を賀す 家建て春待人やうらやまし	一四六	ト		
田 禾	ひと釣瓶かきつはたにも浮しけり	一四七	藤	名高きややまともろこし時鳥	一五一
	↓ 篤老		杜 右	菊に日かとひて花の形儀かな	一五三
田 雀	築山の嶺に雲置蚊遣哉	一四六	東 阿	よろつ代と尾を引亀や花の泥	一五三
田 士	盛こほす鱸のはしも秋の月	一四九	東 為坊	うくひすや梢のそけはとんた跡	一五四
田 社	芍薬の中に秀て牡丹哉	一四〇	東 塙	三国の笠雪高き時雨かな	一五五

其二 古短冊集 (俳句)

橙 雨 北山の夕に啼けりかんこ鳥

一四四

東 阜 曇る夜は月も等着る踊かな

一四七

桐 雨 ゆく春もものうき檉の落葉哉

一四七

東 蒿 ぬくめ鳥  
放ちやる空に名残やぬくめ鳥

一四三

東 雲 君か代のためしに引む深根芹

一四八

輻 光 幹ふりもしらてますなる野梅かな

一四三

冬 映 一寸の胡瓜に五分の匂ひ哉

一四九

桃 左 更行や千鳥聞夜の片まくら

一四四

冬 映 終そこの声とはしらしきりくす

一四〇

等 栽 うら枯の残月か原や昼きつね

一四五

小 方堂 小 野一・野逸

冬 鶯 蚊やり火に人さす草も焚れけり

一四二

桃 室 茅はなぬく野原に不破の関とのみ

一四七

網戸籬薫丈かねて匂無心さしあるに  
はや柏原へ来ませければ

桃 央 勝いろは今もあるなり梅の紅

一四三

桃 舍 橋守のさく鳥もあり春の雨

一四八

冬 花 吉なら上手に落る椿かな

一四三

桃 秋 一輪のさくらちらさす初しくれ

一四九

溝 花 はつ午や凧にいとまも此日より

一四四

冬 涉 雨の日や薄かふりてなく鶉

一四八

小 一 簑

道 柯 享年八十八の元日に  
十八をそへてまれなることしかな

一四五

東 水 暮とはや直に飛つく軒菖蒲

一四二

東 榎 坊 凧やふもとにきはふ葉大根

一四六

陶 水 施水にも価の有や雲のみね

一四三

桃 宜 春雨になを若やくや松の色

一四七

桐 栖 けふ来すはくとて花十日

一四五

洞 溪 なからへぬむしも売るゝ浮世哉

一四六

桐 栖 さみたれはいつ降なれし須磨の松

一四六

等 湖 仰向くはくすりの比よ山桜

一四九

銅 駝 ほろくどほろうつ雉子や朝日山

一四七

東 泉 敷捨に露の溢るゝ団かな

一四〇

東 堤 背戸畑や千鳥のよこす菊の花

一四八

洞々 菊植ん屁へりの虫の涌かぬ中  
 童平 世の中は女房子供にあつさかな  
     三涼軒先師のみまかり給ふを悼  
     無き跡の鏡に残る別哉  
 東甫 前世からしらせて我にも時鳥  
 冬眠 年とへは七ツ也けり齋壳  
 桐葉 春旅立ける友をおくる  
 冬陽 春風やそれでも旅は心せよ  
 東陽 山もとにたつ煙直し霜の朝  
 道楽 枯のこる小草のしとふ時雨かな  
     大隠は市にかくれ此翁は六十の  
     市に遊ぶ  
 冬里 桑つみや爪櫛つかふ戻りみち  
 塘里 龜の尾のみどりもふかし老の春△  
 女李 さく椿もう葉かくればなかりけり  
 桃里 誰もかも桜色なり後の雛  
 桃隣 しら桃や雫にもおちす水の上  
 桃隣 曆にもなき日ゑらむや土用干  
     (真)東都自適葬  
 桃隣 しをに咲く家や煮壳のはかり栗

小葉石

其二 古短冊集(俳句)

一四九 兔園 雁かねやあとなき夜の天津かせ  
 一五〇 斗園 曳よふを見ておもひつく小松哉  
 一五一 免郷 さつくりと人咄しあふ柳哉  
 一五二 得器 猪牙といふ舟工めかし天の川  
 一五三 得器 川狩や名残の灑に月一つ  
 一五四 得器 くれて行年を騒かす豆腐壳  
 一五五 得牛 また末の盛りも長し百合の華  
 一五二 得燕 凧や波もさそはぬさゝれ貝  
 一五三 得燕 冬の梅かしこくをれし小枝かな  
 一五四 得友 千町田に水まざる夜や啼蛙  
 一五五 篤老 禁札や鳥より踏ぬ管の花  
 一五六 篤老 寒けれとけさも出けり梅のはな  
 小田禾  
 一五七 吐月 背なに日の更こゝろよき接木かな  
 一四八 渡虹 手にとりてまたすに返す雀の子  
 一五九 都雀 春風や渉し待間の小唄ふし  
 一五〇 兎什 不尽を見て戻るや表の蒔仕舞  
 一五三 杜春 をかしみは宵の間にあり鉢叩  
 一五三 杜人 つく／＼と見たる冬至の草木かな

杜水	片袖をうしろへはねて筆はしめ	一五三	杜綾	長月の夜もなからす後の月	一五四〇
杜井	さつと来る雨に蚊柱崩しけり	一五四四	杜陵	打水のうたれた形に氷かな	一五四二
斗雪	石菖の鉢にも竜の潜めるか	一五五五	杜蓼	腥き風ひとまくりほとゝぎす 大恩師濟春堂尊大人の古稀の寿に 杖を奉りて	一五四三
咄々坊	炉開やきのふはけふの初むかし	一五五六	鈍山	七十路の若葉にめてゝ八十の杖	一五四三
斗入	かけみゆる雨の降り月秋	一五五七	鈍支	たかむしろ二度は仕へぬ軒かな	一五四四
斗麦	待宵や酒の相人に松つくり	一五五六	吞秋	橋台へまつ出て見たりはつ裕	一五四五
吐颯	されは世や糸爪うへるも鍬に汗	一五五九			
吐峰	梅古し古きうちより新らしき	一五五〇			
土芳	かせ持てよすからかなし月の形 <small>小望月</small>	一五五三	何丸	星の雨舟なしたるおもひかな	一五四六
土卵	朝かけや露の底なる萩の花	一五五三	魚淵	青空や利窟のぬけし秋のくれ	一五四七
兔明	梅か香のとりつきたりし蒿の塵	一五五三	鍋盛	↓紫雲	
知二	春はものゝ青き匂ひやとろゝ汁	一五五四	瀾長	↓ラ	
兔由	住よさや鼻の先までしかの道	一五五五	南 <small>七十六翁</small> 無庵	水も波もいつれ涼しき姿かな	一五四六
杜由	ちりくせの棒や鳥はとまらても	一五五六	南 <small>小</small> 蒼虬		
斗圍	ふたつある馬にも云ふゆきの朝	一五五七	南瓜	寝そひれて灯をかき出せは渡る厂 <small>草菴</small>	一五四九
杜圍	生立もみとりも寿久の柳かな <small>頌</small>	一五五八	南外	蛭よ我留主はそちに預けおく	一五五〇
徒 <small>風</small> 流 <small>飄坊</small>	随風のぬしけふ予か門を叩て南山の 竹の語あるを答ふ 振合て是より薫れ梅の袖	一五五九	南外	萩さはく曙秋か来るさうな	一五五一
			南井	ひとりてに散るや牡丹も植かたき	一五五三

十

南鳥 世の中の命をこゝに田植哉  
一五三

南徳 花第舎の号を賜り月の御会を  
勤はへるとて  
菊の香に心しつまるあしたかな  
一五四

南浦 追善  
みのかさの乾く日もなきしくれ哉  
山田氏の新別窓にまかりて  
まつ爰に分る軒端やふきの頭  
一五五

南嶺 滝足は牛の通はず花すみれ  
一五六

南嶺 後の月澄や実の入物の音  
一五七

二

西武 ↓サ  
一五八

二川 ↓シ  
一五九

入江 すみの江や時雨の中の神楽唄  
一六〇

二柳 ↓シ  
一六一

任玄坊 しらぬ子へ傘の下かす時雨哉  
一六二

任口 菴あまたちよつちよと問や郭公  
一六三

ネ

年眉 久かたの空はともあれ竹の垂  
初老賀  
一六四

年洛 初老や是から永き日のはしめ  
一六五

能阿 片山陰に居をうつして  
松かきは椎はなくとも窓の炬  
一六六

野菊 ほととぎす別の袖を叩へけり  
九十の賀を申侍  
一六七

信浮 杖はいさ安くをな舞千代の春  
一六八

信元 ↓シ  
一六九

ハ

馬握 松の影踏也月の庭歩行  
一七〇

梅因 蕎麦の香の跡の祭や夏大根  
一七一

梅翁 ↓黄麗  
一七二

梅伽 朝風の心はつみを散桜  
一七三

梅伽 ものかひてみても燈籠の哀なり  
一七四

梅花 盗まれし夜明美し醜れ萩  
一七五

梅間 ゑひす講鯛に声ある夜明哉  
一七六

梅後 観念の窓おとろかせ御忌の鐘  
一七七

梅左 時雨るゝや馬に喰れし菜ひと  
一七八

買山 たれ住てはなのうしろや夕煙り  
一七九

梅七 見よかしな我初雪を傘の上  
一八〇

其二 古短冊集 (俳句)

梅室 しら浜や鶴たつあとのおほろ月

一五七

梅亭 湖を咲せはめけり菱の花

一五三

梅室 蟬螂や水に入るもまげをしみ

一五八

梅天 明月満前川  
足洗ふ蔭さへもなし萩の花

一五九

梅室 鹿啼て柔和になりぬ山の影

一五九

梅年 枯のこる千草にけふの小春かな

一五四

梅室 病中の吟  
一筆けふの命は菊の露

一六〇

梅年 早乙女の傘さして珍らしき  
久し振にて花の娘子か踊は春めきしき  
さらさいと面白くて興に入ぬ

一五五

梅室 鶯塚にねくらははなさて飛ふ千鳥

一六一

梅々 振れや袖袖や振りたる花の雪

一五六

小素信・素心 小雪雄

梅夫 今日月暮ぬ空から眺めけり

一五七

小陸々

梅風 先生に牡丹ふた本伐らせけり

一五八

梅寿 幾代々を松の五葉の初茂み

一五三

買明 春雨や柳ほとにも筋違はず

一五九

梅人 濡れながら瀬田の往来やはるの雨

一五三

買明 途巾吟  
くさ刈の側吹風の匂ひかな

一六〇

梅人 醍醐味のあなたうとくも栢榴かな

一五四

買明 人間の拍子抜たり冬籠

一六一

牧之翁のかきりなきよはひをこと  
ほき侍りて

梅裡 初雪とおもひさためぬ冬くもり

一六二

梅塵 年の豆両手につかみ余るまで

一五五

梅笠 秋七草に義土をおもひよすると  
いへる題を探りて

一六三

梅盛 晦りの夜雪いとふふり月有るをみて  
白雪のふりつもこりは月夜かな

一五六

梅路 撫子の素直につよきそたち哉

一六四

梅夕 夕かほのぬしや刺ても御所かたき

一五七

梅路 しら梅や咲た枝から夜の明る

一六五

梅調 かたしほと濡ても見たし霧傘

一五八

梅路 竹立て町の千束や星まつり

一六六

梅通 鶯の夕啼さむし淵の上

一五九

椋路 松に出て鶯の啼泣くもり

一六七

梅亭 一理行ほとは慎成花野哉

一六〇

馬印 婆に問へはくひなはしらす鳴水鶏

一六七

梅亭 いなつまや百鬼夜行の雲のみね

一六一

波鷗 蟬のから蝸牛は家重くなり

一六八

馬肝 起てけさ何又擣むからころも 一六九  
 馬肝 鼓棧はるかに冬されて月高し 一六〇  
     対巨柳君送別  
 把菊 紫揚花や都に結ふ水の色 一六一  
 白雨 青傘や都は水も美くしき 一六二  
     鏡二居士の霊前に呈す  
 白羽 薰る日の風を浄土の便かな 一六三  
 麦宇 春の風さま／＼に着たる頭巾哉 一六四  
 麦宇 みよし野やあらしの外にちる桜 一六五  
     良性導師は傍正風の道をもたのしみ  
給れしよし同念の欲はしさに  
より添ふも一円相や月の友  
 麦雨 月星もありて葉の降あらし哉 一六六  
 白英 初て柳城の斜陵雅君相見別をおしみて 一六七  
     陰もなふ蟬のもぬけの別哉  
 白燕 雑 生酔や志賀か唐崎の二ツ松 一六八  
 白猿 鮮春の駒の歩行みや歳之道 一六九  
 白猿 能き春やたゝみの上も八十の杖 一七〇  
 白起 小三升 かねぬ木も影なく暮て鳴千鳥 一七三  
 白騎 思はれつおもひ返しつ閑古鳥 一七三  
 白鳩房 名月や八声にそよく鶏頭花 一七四  
     (真) 信州松本城西長尾村 龜森右衛門

白居 山吹や角もてかつくたはれ牛 一七五  
 白芹 鼻の寐惚声也春の雨 一七六  
 白桂 山すきの無法言出すさくらかな 一七七  
 白光 兀として出放に月や雪の峰 一七八  
 白齋 水脚も秋をいそくか角田川 一七九  
 白兒 龜に對し六十は老のはしめかな△ 一八〇  
 麦四 今朝秋風庭の千種の戦くのも 一八三  
 麦二 山尊し九都のはかり炭 一八三  
     佐野氏の婚礼を賀して  
いろかえぬまつに競や冬の梅  
 藥洲 花を見る日は限らぬにけふの月 一八四  
 白寿坊 傘さけてぬるゝ人ありやよひ山 一八五  
 白醉 蝶はやし車はおさぬ此あたり 一八六  
 白醉 星清しゆふへの雲は露となり 一八七  
 白黛 水夜や雪踏乾し高はなし 一八八  
 白雉 空くせも漸定りぬ初桜 一九〇  
 白兔 一ツ屋に貰ふ茶ぬるしかんこ鳥 一九〇  
 白兔 明月や扇かさして女の行 一九四  
 白鬮 身に暮る秋はともあれ夕詠 一九四  
 白頭 杖投て道占のふや雉子の声 一九五

其二 古短冊集 (俳句)

白頭	藪入や何はなくとも鱸皿	一六四	はせ川	美しひかみもいわすに柳かな	一六二
指月庵	寄月新宅いわる侍りぬ		巴川	浦波も漸々しつまりて芦の角 <small>芦角</small>	一六三
白峯	幾千代をかけてそすめよ冬の月	一六四	坡仄	火ともして伽か出来たり冬籠	一六三
白魴	登るほとおもしろきやら春の山 <small>賀</small>	一六四	八公	人なみにあらふ硯やほし祭 <small>太宰府奉納</small>	一六四
白麻	かんこ鳥瓢叩かは膝に来ん	一六四	八朔坊	白梅の雫にぬるゝ額かな	一六五
柏也	小松引あそひは過てつゝし哉	一六四	八千	分入は伽羅の木たちや梅の花 <small>数白</small>	一六六
白輅	春立や人にも鶴の歩行風俗	一六四	八千	居直りて五形花摘けり角力	一六七
白亮	にくらしや松百丈の影法師	一六五	八千坊	麗和 烟うちの蝶うち払ふ日和かな	一六八
麦隣	草の葉に夜は明残る螢かな	一六五	八巢	清水ともいはず不断の遣ひ水	一六九
白嶺	府中六社前にて鼠十の落馬しけるに 桜見を神も妬むか山おろし	一六五	髪々	晚鐘に狂ひさしたる柳かな	一七〇
白露	蝙蝠や柳に櫛の二日月	一六五	八風	人の来るよしのに來たれば花たらけ	一七〇
白老	天の川爰に泊れはこゝのうへ	一六五	波同	おして出る道からはれて春の雨	一七一
麦浪	やとり木に音散残るしくれかな	一六五	花菱	送別の袖ぬらしたる時雨かな	一七二
馬光	↓白芹	一六五	馬年	夜さくらやきけば流るゝ水の音	一七三
馬巷	よしあしの世に繋るゝうき巢かな	一六六	馬瓢	寒き夜や一番鶏をほととぎす	一七四
巴山	うめ咲や寒ひといへはいふものゝ	一六七	波文	春もはや月夜になりぬ揚屋町	一七五
はしめ	冥埃ににけく遣ふあふきかな <small>祝</small>	一六八	はま藻	蓑の雪降ほとかろくおもはるゝ	一七六
九十四歳	千代の玉抱へて咲や雪牡丹	一六九			一七七
巴丈	やつはしにて	一六九			
はせを	こゝもするかむらさき麦のかきつはた	一六〇			

奉納

巴陵

有かたき春には成ぬ梅の花

一六七

巴陵

芦滴師のとしを賀し侍る

一六七

馬良

一面に無よくをいはふ田植哉

一六九

治孝

残菊て留主事をする内義かな

一六〇

馬令

夕貞は小町草なりさり迎は

一六一

馬六

若い時さへ待かねしほとゝきす

一六二

斑衣

葬や松に這ては千世のはな

一六三

斑鳩

漣の何やら寒し春の鳥

一六四

半柱

梧亭中に一閑室を作たる九十子に対す  
市を避て妻子を避て炉のあるし

一六五

小月居

温泉煙のとゝく所やはつさくら

一六六

斑車

かけ行は木の間にあらず後の月

一六七

万成

鑿説もなくてかたふく月見哉

一六八

板葉

公達の眉うつしく月の梅

一六九

万葉

照る日にも葉す多の露や蝸牛

一七〇

万籟

しはらくはうけて鶴たつしくれ哉

一七一

畔李

婚礼の待請ふけて寒かな

一七二

万和

うくひすの麗をいつる木の間哉

一七三

小臥鵬

小マ

(万)

七

眉山

仰向ば額にちかし冬の月

一六四

飛冲

辻君の客ともならずはちたゝき

一六五

飛鳥園

蚊やごしに見てもしつかかな世也けり

一六六

必山

黄鳥や暮てしはしの山明り

一六七

必山

雲かけも乳鳥も走る川原かな

一六八

秀長

求食にも蜘蛛となくや雀の子

一六九

眉白

鹿啼や兎はかり月の気色立

一七〇

氷室

葉に釣る二日の月や蜆貝

一七一

百化

霜一夜明ての色やつるし柿

一七二

百可

一筋の溝や枯野の幾巡り

一七三

百花

青柿やはむらへはやす風の神

一七四

百華

雲を吐虎溪の橋や鳴ひはり

一七五

百華

鐘と牛声もあふたり秋の暮

一七六

百花坊

山寺の鐘ほのかなり驪月

一七七

百古

注連かさり掛たき鹿のかしらかな

一七八

其二 古短冊集 (俳句)

百丈 寿量品妙の本門のこゝろを  
けふの月うつらぬ水はなかりけり  
一七〇九

百川 あら河の果に風流の高名なる  
泉玉先生をたつねて  
一七〇〇

百泰 国越して名のかほりけり蘭の花  
師の庵をふたゝひ結ひたまふを  
祝し侍る  
一七一

百池 嵐して空穂木を出る胡蝶哉  
一七二二

百堂 腰かける嵐ゆつりあふ清水哉  
一七二三

百明 殊尽すやとや垣ほのをみなへし  
一七二四

百野 予か老足も□登る便を得たり  
□問に心願ある□老人に句を□  
目の欲の届いて涼し富士の峯  
一七二五

氷壺 何よりの送られものそたわら炭  
一七二六

萍江 大菊や育くゝてはなひとつ  
一七二七

氷黒 浮雲に誘れやすし更衣  
一七二八

小寥松

瓢舟 友なりし風子の身まかりてはや  
一とせも夢のこゝ地に過て  
思ひ出す事もおふかれさくら麻  
一七二九

瓢水 うくひすや春日の夜燈残り物  
一七三〇

瓢風 華にとて起ても寒しあさなく  
一七三一

フ

塙菴 洗竹の曉寒し露時雨  
一七三二

風化房 夜昼と啼虫もくれの秋如何に  
一七三三

風外 明近し空も齋のひとかほり  
一七三四

小史千

風瓠 笠売の声もけふから袷かな  
一七三五

風五 夜や更ておほろの中に松の声  
一七三六

風光 をりかへす人あり花のゆふ吹雪  
一七三七

風谷 露はおのかつゆをしればそくさにおく  
一七三八

風谷 泡盛のさかつきすかす燈籠かな  
一七三九

風瓠坊 ↓徒流  
一七四〇

風齋 なかむれは哀になりぬ冬の梅  
一七四一

風絮 撫子や折手引手のはたけみち  
一七四二

楓城 紅梅や仮そめならぬ春の色  
一七四三

風草 綿ぬぎや猫背の年の針こゝろ  
一七四四

風葉 春雨やほこりのうまる膝廻り  
日暮里のあたりにて  
一七四五

風葉 日くらしや枝折も見えぬ葉のしけり  
一七五〇

風律 春雨や薪を蝶の草まくら  
一七六一

風柳	せき水やたにしの濁す春日和	一七五七	無事庵	五里来れば月となりけり小春空	一七五七
風廬坊	うき魚の波しつまつて月涼し	一七五八	寄亀祝	春榮ふためしや亀のみとりまて△	一七五八
富屋	かいくるむかさね産着や冬牝丹	一七五九	普成	腸のみな花になる盛哉△	一七五九
不海	よう候といへは舩の柳かな <small>船中</small>	一七六〇	普成	洛陽や三月尺の山かつら	一七六〇
不柯坊	早蕨の握り拳や男山 <small>九十三翁菊山人 春興</small>	一七六一	普川	朋更の賀その人のうしろに添て とし木積勢ひいくつそ七拾駄	一七六一
不求	見おくるや何所までつゝく稻のはな <small>菊秋君を送る</small>	一七六二	蕪村	花茨故郷の道に似たるかな	一七六二
不鶯	富士まうて家なき代よの朝日哉	一七六三	□ <sub>茶</sub> 外	時雨るゝや大工に咄す東山	一七六三
不言	大井川の流れ清し あらし山いくら吹ても若葉哉	一七六四	物外	のほる日にこほるゝむめの苔かな	一七六四
不言	川葦て見すにやま画楓かな	一七六五	物外	十月や六月かあるひつしいぬ	一七六五
不言庵	結ふほと草も伸けり別れ霜	一七六六	物外	世を捨てた天窓を栽る巨燧哉	一七六六
不黒	朝かほに半時早き首途哉	一七六七	物外	末かれや奇麗に肥し寺の犬	一七六七
斧山	よしや世は明日ももふさぬ花きり籠	一七六八	物外	卯の花や隣も知らぬ雪の朝	一七六八
斧山	しら菊にひかけをよふやかた折戸	一七六九	仏足尼	ほとゝきす潤ふ玉を吐音かな	一七六九
普山	むかし誰かたる月見の秋ひと夜	一七七〇	仏六	十符に寐る管孤ひろき夜長かな	一七七〇
燕山	縁結ふ紅白衣や月の夜 <small>高繩安泰寺</small>	一七七一	不転	花鳥の罪は瀬になれ御破川	一七七一
不二	名月や琴はうしろに明はなれ	一七七二	普門	江古田むらの某の許にまかりて 月雪に何不足なし冬構ひ	一七七二
小二柳			美蓉坊	紀の浦つたいし侍る時 巢たつ子に啼歎声辺の夜の鶴	一七七三
〔符示〕	川越して夜半の梅の匂ひ哉	一七七三	武陵	かすめとて松をうえしか東山	一七七三

其二 古短冊集（俳句）

古短冊集目錄

撫鹿 搔たてる灯のたしなきや翁の日

一七三

文鳥 玉と見る御手に螢の光かな

一七九

武曰 ひとくけて言為便のなきさくら哉  
光院可惜時不待人

一七三

文母 望嶽亭にやすらひて  
六月の袖すしざよ波の音

一七〇

文阿坊 飯の間に柳かへれつ夏の月  
髭風老翁古稀の賀に其地名をもて  
猶も長生をいはひ申送る

一七四

文里 温泉にぬくめ富士に涼みて千代や経ん

一七一

文海 網やすむ浦辺の雨やほととぎす

一七五

文柳拜 顔しらぬ人にもいふ枯野かな

一七二

文海 さく酒や屠蘇も及はぬ祝ひふり

一七六

文柳 窓からも北斗拜むや冬木立

一七三

文器 さく啼や椽にからひる切蕪

一七七

文柳 小徐風庵

一七三

文郷 とても来る雪を野松の嵐もつ

一七六

文路 みちとふた人を見送るかれ野かな

一七四

文眺 いささらは藻玉ひろはん春の磯

一七九

文路 小徐風庵

一七四

小乞隠

蚊山 船底や寐ぬ夜になれて鳴の声

一七〇

葎庵 薨や灑水茶碗に瑠離を照る

一七五

文二 篠の家にかさし込けり雪の袖

一七一

米花 初松魚墨の乾かぬ手紙かな

一七六

文樵 女氣の慾に生たり桃の花

一七二

米我 鳴立て河と知けり隴月

一七七

文車 柳にもちから見へたり百千鳥

一七三

平角 秋の日のほそきにならへ柿なます

一七八

汶水 合歡の花夕暮を待せもとかしき

一七四

米希 升ものにつましてしつけし女郎華

一七九

汶水 なのはなの匂ひしきりやおちひより  
賀

一七五

米彦 月花の台処なり鳩の湖

一八〇

文石 盃に千代のいろあり初日影

一七六

平砂 西行の人に宿かず梅見哉

一八一

文蘇坊 待宵に明日はあすとて更かしけり

一七七

平砂 潜るとは頭巾もしらぬ柳かな

一八三

文中 初雪や積りかゝれは暮て行

一七八

平砂 海原や花火にたらぬ人の声

一八三

平砂 遠齋主人の入湯を賀して  
水いらぬ松露の露や温泉友達  
一八〇四

平齋 こからしをけふ吹そへよ夕もみち  
一八〇五

平山 木を撰て百舌鳥の気性の高音哉  
一八〇六

平山 真丸く冴たり師走もちの月  
一八〇七

平然 蟬なくや樹のありて木の蔭もなし  
一八〇八

米全 入日にもうまぬ鳴の高音哉  
一八〇九

米仲 酒の座はみな赤人そ月今宵  
一八一〇

米徳 うさきかり盃台もわか葉かな  
一八一

米徳 立よれば入口のあまる紅葉かな  
一八二

平々 鶯のちからを借る小庭かな  
一八三

平也 青柳にかかれる鞠か月の影  
一八四

可磨 山ひはりなくや水仙又伸る  
一八五

木

抱一 ↓一簾 ↓薄花  
一八六

法雨 稲妻の戻った道を時雨かな  
一八七

蓬宇 月入てなく空広し郭公  
一八八

蓬宇 秋の夜や月を養ふ晴曇  
一八九

其二 古短冊集(俳句)

鳳宇 白兔園俳仙の菴むすひ給ふを  
風光る庵のはしめや杉の花  
一八九

鳳羽 野前  
うくひすの遠音さくるや老の耳  
一八〇

鳳羽 雨くらき林のおくの椿かな  
一八一

放下 九十七歳書  
ゆたけしな行来賑ふ今朝の春  
一八三

抱儀 大寺の際の小家や小夜きぬた  
御祝を  
一八三

鳳儀 松竹にさき草そひて祝ひ哉  
一八四

方居 冬らしく月にさらしてうめの花  
一八五

方举 よそのまて来る朝かほのさかりかな  
一八六

方壺 夕くれの風中にひゞけり峯の鐘  
帆車を鼠の鳴らす夜寒かな  
一八七

方壺 七十九歳  
かへる子や翌来る夏に尾のとれる  
重三  
一八八

法策 ましはりはけふを手本よもゝ柳  
白木屋連中勝句  
一八〇

法児 けふ塩千草魚と碇の相撲哉  
一八一

蓬室 ちるさくら鎖をやふる雨夜哉△  
廻文  
一八三

蓬室 月照れは浪も帆も皆晴て来る  
一八三

邦子坊 みつうみをととり廻しけりゆきの山  
一八四

方珠 湛能をさせる日和や山さくら  
一八五



墨巢 暮かねてうくひすなきぬ鐘のそは

北楊 懐にして揉しけり薄羽おり

甫紅 吹上て残る葉誇ふ落葉かな

保友 みよし野の奥歯に物や花に風

茶は養生の仙薬にして延齡の妙術なり  
と山谷に生すればその地神君に人これ  
を採は命なかしといへるもむへなるか  
な不白翁は茶道の先達にして唐までも  
その名かんはしくかゝる翁のかきりな  
き齡をたもち給ふへき事を賀し侍りて  
万世の寿蕙る新茶哉

保山 万世の寿蕙る新茶哉

圃竹 当て来し木影はずし夏木立

梵阿 ↓快台

凡十 小夜千鳥啼は月あるころかな

梵坊 砂あとにくさの数く春日かな

凡魯 木の葉踏て来る人はやく只みたし

マ

麻齋 まことある人の多さや御遷宮

まさき 散ふとて花ゆれしたる牡丹哉

正信 かそいろの変す雨や卵の花のりむ

正式 若菜にやふるなましろ仏の座

ますほ 角田の月またおほるなりほととぎす

一六九

一七〇

一七一

一七二

一七三

一七四

一七五

一七六

一七七

一七八

一七九

一八〇

一八一

一八二

一八三

一八四

一八五

一八六

麻中 花分て猶坂行ん足駄かけ

松夫 ↓シ

真彦 ↓シ

夕顔やひととせふりももたしめよ

すこしくはまかれるもよし花の道

此花に春は隠るゝ牡丹かな

散尽てよい日になるやけし蟲

雲に名を附ては通す月見かな

小ハ

八十翁 名月の下や残らす千松しま

三木雄 蟬の声椎に蔭りし伏家かな

顔そむけぬも余念なし花の露

きかす只してたゝかせむ初水鶏

案山子にもむかいなれてや沢の鳴

霜 日に背ほすわさを覚えぬ霜なれて

名月や心の月にくらへ見よ

初て年礼に出て鬘斗を拾ひて

幸や鬘斗から先へ恵方より

(裏)裏天明九丙年正月六日こなた御祖父様  
御筆

一八三

一八四

一八五

一八六

一八七

一八八

一八九

一九〇

一九一

一九二

一九三

一九四

一九五

一九六

一九七

一九八

一九九

二〇〇

三津人 あらし山にて  
花に人散一段と成にけり

未仏 おつる時斗鳴やむひばりかな

小燕子花

茗圃 枯尾花けふは曇りの懸り鳥

茗圃 船呼へば水鶏のはしる芦間哉

茗圃 こからしの吹たつ雲か明の不二

眠屋 日の出むとする頃寒き青田哉

眠牛 なかれては水に取つく水馬

岷江 敷物は団扇て済むや夕すゝみ

珉左 庄屋から遊ぶ日ふれて梅の花

珉上 清滝の渦に巻込と翁もの玉ひければ  
涼しさに松の青葉をゆすりけり

孟夏の七月すも迦葉山に詣る法門の  
最中に子規の啼を聞て

眠醉 蜀魄夏行の僧へ答けり

△

無一坊 艸の戸の明くれたのし時計草

夢外 見はらした処て畳む扇哉

無外 撰ぬきし秋の風雅や菊紅葉

無黄 落合の里浸しけり秋の水〔森貞次郎〕

無腸 五月雨や路錢きらして翌は江戸

無腸 幸盛寺君邂逅して  
旅僧に宿訪はれけり月の秋〔土居通夫〕

夢南 注連繩のうちはひやつく桜かな

むら女 投出せは一旦落ちて飛ふはたる

群人 浅ましの目鼻もちけり花盛

×

鳴雪 三日月や仏恋しき竹秋

鳴雪 元日や一系の天子不二の山

冥々 夜のくれや鐘鳴処称名寺

冥々 行秋やきひはた寒しはした錢

明良 元日やひと間は清き荒むしろ

めしろ あしそひの杉こそみゆれ華すゝき

モ

木鷲 もつれよとはかり見て居る鶺鴒かな

孟涵九 起よ／＼我友にせんぬる胡蝶

黙何 老知らぬ翁に恥よ蕪の髭

木賀 是ほとに更る灯はなし高燈籠

木 雞 濡竹をとふかゝえしそ蝸牛

一九七

木 齋 国味噲に蟬の喰つく木曾路哉

一九六

木 姿 はつ雪の水際にこそ風情あれ

一九九

もくし 秋の夜や罪なき雲のたゝすまひ

一九〇

木 児 ↓五条房

一九三

木 僊 仇矢射て明るわひしき夜具ひき

一九三

木 僊 初焮 散は置露さへ焮の始なる

一九三

・小 駝岳

木 舟 鉢たゝき月やこゝろの高燈籠

一九三

黙 池 手枕の見ころになりし柳哉

一九四

黙 池 よし田にて 松葉や焚んげふの会式の奈良茶飯

一九五

木 天 白雨に風なくれせし跡の山

一九六

木 兎 あきかせや万里の海に雲落る

一九七

木 導 私の渡し見出しぬきりくす

一九六

木 兎 曳あける網の目こしに月涼し

一九九

木 髪 名月やうこかぬものに橋はしら

一九〇

木 髪 七十五叟 冴返る水や齋の爪寒し

一九二

木 髪 四世 畠打や雪に遠のく山の裾

一九三

・小 永機 小 湖十

黙 平 墨水 うらゝかや水脚曳て都鳥

一九三

木 卯 我庵の窓には過しふくへかな

一九四

黙 蘭 ほととぎすさし味をひたす水清し

一九五

木 老 しからきや夜は二けんの梅の花

一九六

木 老 松の香に冷て戻りぬ猫の妻

一九七

木 和 しら露にうらなき心ならはゝや

一九八

茂 世 雪吹かゝる椽や雀の足のあと

一九九

茂 東 水に影の小春ををしむ紅葉哉

二〇〇

元 良 花の跡とふは恨の玉椿

二〇一

茂 良 宵くゝや薪滅して鳴ちとり

二〇二

茂 凌 菊の香やつまむてありくこほれさゝ

二〇三

茂 陵 清見寺にて 海に山にのまれしうへに時鳥

二〇四

諸 九 ↓シ

二〇五

門 瑟 海棠や庭籠の鳥も唐にしき

二〇六

ヤ

野 一 色そこくきの国石や春の雪

二〇七

野 一 山守に掃せて出たり雉子番ひ

二〇八

其二 古短冊集(俳句)

古短冊集目錄

野逸 自性院の靈をまつりて  
とり出せは移る香のある衣更

一九六

野逸 はつ汐や此時山の笑るゝ

一九五

冬映 方堂

野月 砂文君の初孫もふけ給ふを賀して  
万倍の栄へ見せたる早苗哉

一九〇

野松 亀の背に乗ても遊へ花の波△

一九二

カ、六十八夏 寄亀祝

八水 六十万筭の亀と諷ふは誰か春△

一九三

康道 ↓藤

夜雪庵 ↓金羅

野草 松むら／＼霞む野々末畑の末

一九三

野兎 雪空やゆきになる日の猶黒し

一九四

野馬 飛鳥山の椽に暮迄酒くみかはして  
花そこの空にしられぬ薄月夜

一九五

野馬 茶の華をいけて掃除日くれにけり

一九六

道人 たんほゝもわたぬき捨て郭公

一九七

夜白 たんほゝもわたぬき捨て郭公

一九七

野楊 雨戸からくり出しけりけふの月

一九八

夜来 人音は秋そと虫も立さらす

一九九

ユ

唯我 草と木と夜は語歎秋の声

一九〇

由阿 しら蓮や止観の窓の朝ほらけ

一九七

雄淵 来にくゝて松には来ぬかほとゝきす

一九七

雄淵 旅に寐て残る螢の類かな

一九七

幽歎 寒ければ浪より白き鷗哉

一九四

有宜 むかひ来る雨や曠野のほとゝきす

一九五

有計 貰はれた枝とて梅に結び藁

一九六

有計 ほんのりと霞に明て春の不二

一九七

幽香 声たえて眼先へおろす雲雀哉

一九七

友左坊 鬼灯やふたつ握れぬ手にも慾

一九七

友左坊 二度の名に呼ぶ月なから影若し

一九八

由肆 松か根や長閑に遊ぶ亀の貞△

一九八

由肆 鶯や艸にしみこむ宵の雨

一九九

祐昌 しらぬ火や心とむれは消初る

一九九

祐昌 唐士の月も見るかと鯨ふね

一九九

幽嘯 まつ宵にすゝきはあまりさし出たそ

一九九

幽嘯 かもなくや暮てかき行はさみ箱

一九九

勇水 きれ風や神の木すゑの御連繩

一九七

由誓 薺ややかて忘るゝ花のいろ

一九八

祇園会

有節 道かへて鳥も往来や銚の空

一九八

溶々 朝起や花に覚えし七日ほど

二〇四

右調 日のおかをのほる小荷駄や夕かすみ

一九〇

よし香 朝な／＼庵に影入る春の山

二〇五

雄尾

常／＼にみし不二なから今朝の春

一九一

与人 枝の露今朝は時雨と成にけり

二〇六

元旦

有圃 洩る月を身軽に亭の主哉

一九二

米彦 ↓へ

二〇七

有明庵

蝶々の外さわらせぬ牡丹かな

一九三

ラ

二〇八

再々宿を謝するのとて

雄友

我あとに燕らも来よ此やとり

一九四

来斎 達磨忌や山を見に出る腹こなし

二〇九

悠々

楮うつ音を隣の夜寒哉

一九五

来山 今日桃の花に科なし色上戸

二一〇

送別

有隣 美しき声を残して帰る厂

一九六

来粗 虫干のとも崩れなり山の雲

二一一

有隣

啼さして身振ふ鹿や夜の雨

一九七

来粗 京を出てまことに白し梅の花

二一二

由璉

夏草に物の化よけや梓弓

一九八

雷子 動かれて萩に心のそよぎけり

二一三

雪雄

うちとけて寐た夜牡丹に手のとくく

一九九

来示 春の花みなちいさしと牡丹哉

二一四

雪雄

棒松を蟻かたふすよ秋の風

二〇〇

萊石 はや松は過ぬあしたの朝もよひ

二一五

雪雄

小梅室

二〇一

萊石 藪かはへ舟おしいるゝわか葉哉

二一六

雪彦

滝のうへの家の寒さや不如帰

二〇二

雷堂 蛙聞夜と成にけりほとゝぎす

二一七

三

揚子

千年もまた鶴契れ冬至梅

二〇三

樂只 市中教声を聞くまことに端夜の曙却て

二一八

庸甫

ふり帰かへりてや見ん山桜

二〇四

羅江 寂寥山居を歎く

二一九

其二 古短冊集(俳句)

羅 汁	山てらの幾久に育のこそをか くらぎ夜の奥おそろしき暑哉	1019	嵐 山	ほからかにかれても朧月夜哉	1036
羅 城	竹植て見返れば月の醍醐哉	1010	嵐 二	秋の雨鐘より落る雫かな	1037
羅 川	若やきの親木にまさる楓かな	1011	嵐 七	豆和の葉のうらは通さぬしくれ哉	1036
羅 道	しらぎくやあさきにみゆる折も有	1013	嵐 秀	西へ入る日を包たる牡丹かな	1039
羅 父	人恋しぬれ色木の葉掃捨な	1014	嵐 夕	都にも移せみのをの月の照	1040
羅 風	木をわけて松に立けり月の友	1015	嵐 雪	いなつまや雨の夜はかり三日の月	1041
藍 外	霞にもわたすや浦の夕仕舞	1016	嵐 雪	来るのみか蠅も裾から折ふしは	1042
嵐 牛	波ものくらふたる日は毛髪もそけす とかきけはおとろへたる鬢先も今朝は 撫るもいさゝかたのみ有こゝちのして 鮮鯉のあるしにあへる桐園にて	1017	嵐 雪	天満宮 青幣葉によるへあり風の梅	1043
嵐 牛	夕かはやよひの床几に咲くつれ	1016	嵐 雪	山吹やつれ人のたひ花の色	1044
嵐 牛	ひく先は夕ひのかゝるなるこかな	1016	嵐 雪	酒闌にして諷ひ出す冬至哉△	1045
嵐 月	眼の前に佐渡黒みたるあられ哉 寄書花	1010	嵐 雪	下町で聞てもとつて郭公	1046
蘭 卓	鳥の跡散や此花筆配り	1011	嵐 雪	泉玉老人我か草庵に杖を曳て誰そやと おとなへたまへる時に	1047
蘭 卓	哥占の通りに月ははれにけり	1011	嵐 雪	雅にあそふ人は師走の振りもなし	1047
蘭 更	梅かゝやおもふことなき朝朝	1013	嵐 雪	澄む月に水音するや草の中	1046
鸞 岡	鹿の声今宵もきかず峯の月	1014	嵐 雪	十かへりも冬至から也宿の松	1049
嵐 山	菜の花や高瀬てくたる京の人	1015	嵐 雪	梨 一 塵塚や大根かふに花咲ぬ 追悼	1050
			嵐 雪	何草を手向となさん枯野原	1051

李郷 松山や何とはなしに冬の色  
 里曉 はつきりとねむ気は覚てほととぎす  
 陸史 水有て我に逢ふたりかんと鳥  
 六車 さひしさの月日は是そかれ屋花  
 六窓 風の来て手元におかす粽壳  
 六窓 日くらしやふみ誂にちる椽の先  
 陸馬 柳に巢あるにもあらしつはくらめ  
 六轡 夏の夜は来ぬ人の夢に入もせぬ  
 里敬 薄やうに人柄見ゆる粽哉  
 里桂 近よれば二三本なり夏木立  
 吏缸 旅せよといはぬはかりの田植かな  
 李江女 節李候の柄子は知らし靄のはき  
 里紅 ↓ 廬元坊  
 里秋 八朔の露を見に出る小庭かな  
 里住 紅梅の勇々しき艶や朝日かけ  
 梨春 梅やなき柳は雨にかくれけり  
 梨春 川船の一里や蝶も帆にそうて  
 李升 うつゝにも団のうこく暑哉

二〇五一  
 二〇五二  
 二〇五三  
 二〇五四  
 二〇五五  
 二〇五六  
 二〇五七  
 二〇五八  
 二〇五九  
 二〇六〇  
 二〇六一  
 二〇六二  
 二〇六三  
 二〇六四  
 二〇六五  
 二〇六六  
 二〇六七  
 二〇六八

李井 雅兄梅七君のたちち女六十しに  
 李井 及はせ給ふ諷くの声同うして  
 李井 松風やす多遠き野に六の花  
 李井 小存義  
 李成 負たのは鳴ぬものかは雞あはせ  
 李青 陰を行は昼間の癖や夏の月  
 李夕 織姫や波にもあやを袖の浦  
 李川 松かけや馬ひきならすけきの秋  
 李長 きく月やこゝろつもりのある内義  
 李朝 ころよきゆふへとなりぬ虫の声  
 立志 是も其こかねの花や承知也  
 栗堂 梅白し寿の字を負る亀出る△  
 吏登 ↓ 後嵐雪  
 里風 朝冷や花の明りを連子越し  
 立字 ぬく／＼と鶯近き音色哉  
 柳雨 寒からぬほと窓明て梅の花  
 柳舍 行焮に連れ残されて峯の松  
 立几 野坊は古稀過たり曲笠庵主の賀に  
 七十五翁 よそへて慾をのふる  
 千とせまて友と頼母し松の花

二〇六九  
 二〇七〇  
 二〇七一  
 二〇七二  
 二〇七三  
 二〇七四  
 二〇七五  
 二〇七六  
 二〇七七  
 二〇七八  
 二〇七九  
 二〇八〇  
 二〇八一  
 二〇八二  
 二〇八三

其二 古短冊集 (俳句)

古短冊集目錄

柳 几 夕暮をこらへくはつしくれ  
 柳 居 鳥さしの首途によしけさの秋  
 柳 壺 ちか過ぎて滝のさわかしけふの月  
 流光斎 正直をかうへに花の黒木壳  
 柳 枝 行先は錦の雲や夕時雨  
 柳 女 春うれし鶯ほとに歩行ねと  
 柳 絮 元日となりすましたるねむさかな  
 笠 人 散る花に投出して置心かな  
 柳 水 うすものゝ衣桁すへるやけさの秋  
 竜 石 元朝や祝ひ半のあさほらけ  
湖長先師をはかりなからもと  
 ふらひ奉りて  
 菫菫道人 泉 うはさにも塵にまはる落葉かな  
 柳 莊 しら梅の偽もなく咲にけり  
歳旦  
 立 圃 花ならば南枝北枝よ春の春  
 流 芳 薄ものやそれより軽き朝こゝろ  
 柳 也 鳴たつや汐の満来る磯辺より  
 了 阿 探幽か雲から出たるほとゝきす  
頰  
 了 阿 すゝしざや首途嘶く朝の駒

二〇八四  
二〇八五  
二〇八六  
二〇八七  
二〇八八  
二〇八九  
二〇九〇  
二〇九一  
二〇九二  
二〇九三  
二〇九四  
二〇九五  
二〇九六  
二〇九七  
二〇九八  
二〇九九  
二一〇〇

良 意 賀 かけてなを契れ千世木の藤かつら  
更衣  
 了 雨 仕付苧をぬくや牡丹の名争ひ  
 了 珪 花さかりちるよりおしき深山哉  
 了 月 元日のひらきはしめやしら扇  
 了 国 紅葉まできて降りゆる小雨かな  
 梁 斎 うくひすや不冷座の祈の朝かはり  
 蓼 二 暮るまで何に余念なく桜かな  
 寥 松 飛くれてはのちみゆるつはめ哉  
 寥 松 たふれ木に萍かわく風間哉  
小 群人 小 水黒  
 蓼 太 卵にはあふなき雉子のほろゝかな  
 蓼 太 朝霧や跡より恋の千松鳴  
 陵 岱 誉多気戸の安くすそ寒念仏  
 良 大 人かけの添はぬ日はなし梅の花  
 良 大 信濃路や晴さへすれば山の月  
 涼 波 瘦骨は香にわつらふかうめの花  
綾部氏の男主家の勤終りてわか  
 家路に帰り給ふを寿く  
 了 輔 ふるさとへ錦の袖や春の風

二一〇一  
二一〇二  
二一〇三  
二一〇四  
二一〇五  
二一〇六  
二一〇七  
二一〇八  
二一〇九  
二一一〇  
二一一一  
二一一二  
二一一三  
二一一四  
二一一五  
二一一六

了輔 淺黄とは能い名也けりはつ桜

二二七

寥和 嫌ひとは真赤な嘘の昼寐哉

二二八

寥和 秋の野は風と連たつ袂哉

二二九

小 咫尺

〔閨毛〕 高館にて  
あきかせや俯うこくむさし房

二二〇

李流 旅僧の所望して見る蚕かな

二二三

臨風 先つ春の曙染や濃紫

二二三

麟和 婚姻を賀し参らせて  
よろつよの影やふたみの月の前

二二三

レ

嶺元 紫陽花の重たき露を暮にけり

二三四

礪山 夕月や爺負ひにゆく鳴子小屋

二三五

麗女 白露もそむれは千種ゆふ紅葉

二三六

嶺城 味付て鳥のあひる清水哉

二三七

令来 明月や幾千代経ぬる嶺の松

二三八

令来 青竹の杖突て行雪見かな

二二九

曆外 如渡如舟  
居なからや芳野の花も絵にひとめ

二三〇

列山 朝風の目にはつめたし青簾

二三二

蓮阿 風絶て海に沈めり冬の月

二三三

蓮漪 並ひ寐た田打や蝶はとの夢そ

二三三

蓮漪 月か寐る心を邪厂や田か見へて

二三四

連屋 雨を乞また日をこひつけふのきく

二三五

連月 おもひ出す其人の坐や桐一葉

二三六

連之 華もりや笑ふて居ても年の寄る

二三七

蓮之 小 珪林  
はつ雪や花の陰行羽織ほと

二三八

蓮二 小 見竜  
何もなき空となり晷五月雨

二三九

連水 稲妻のはけしや月も落てのち

二四〇

連水 その筋かわたりよいの歎風の厂

二四一

連水 寐静まる町に来てあふしくれかな  
芦花翁の伝書を拜して

二四二

練石 玉鉞の筆へや花の一步み

二四三

蓮徒 長生は杖つくにあり菊の花

二四四

恋稻 よく聞は月に追はるゝ衝かな

二四四

蓮楽 つくくゝと夜は音して春の雨

二四六

蓮々 立寄れはうとましくなるいちこ哉

二四七

其二 古短冊集（俳句）

口

魯隱 若葉して奈良のほとけは猶ふるし 二四六  
 魯隱 おくやまのはるはいつまでふちつち 二四九  
 隴庵 明かたの烟る入江やほとゝぎす 二五〇  
 老鶯 樹に音の有てかせなし盆の月 二五二  
 浪吟女 しはし見る月も今年の名残り哉 二五三  
 楼川 遠乗の雲に届や花盛 二五五  
 老鼠肝 鐘を撞山から来た歟焔の暮 二五五  
 老鼠肝 七十四翁 茶坊主に鎧着せけり土用干 二五五  
 永機 南子を送りて  
 老 分入し跡さへ霧の匂ひけり 二五五  
 芦〔翁〕 桜狩ありつる女をむな也 二五七  
 露牙 しくるゝや不断見て居みねの松 二五九  
 侶業 うくひすや磨みて居る鼻の先 二五九  
 廬眺坊 桃咲くやそれから窓も建てわすれ 二六〇  
 竹窓 春興  
 侶月 鶯や水浴て来た函両 二六二  
 賀景  
 芦月 いつきてもあきたらぬこの牡丹哉 二六三

露月 雲脚は富士を根にして虎か雨 二六三  
 露月 はるの行ひゝきや松に暮の雨 二六四  
 廬元坊 鶯のいくつも捨て初音かな 二六五  
 廬江 腰かけによぎしば土手やうめの花 二六六  
 露香 蓬萊やくる人は皆福の神 二六七  
 廬眺坊 門も月に明るいものを火とり虫 二六八  
 露谷 若卿やそたちからとは人の上 二六九  
 芦舟 井中舎主人の年賀を祝して 二七〇  
 やかうへに緑たつ也松の春  
 露十 雲と見る気しきを華と山さくら 二七二  
 路春 初雪や頃日までの暖さ△ 二七三  
 露城 けふの間にいよ／＼さきてゆふさくら 二七三  
 露城 五形田に鋤入れてあり夏隣 二七四  
 蘆城 草かけに入るよと見えて鳴蛙 二七五  
 題長等山  
 芦水 山さくら今はみやこの後かな 二七六  
 芦錐 浦山をかけて塩干や峯の松 二七七  
 蘆尺 雪の日や案山子なふる里鳥 二七八  
 久振に尊師にまみへ奉りて  
 炉雪 時は秋そはね躰や松の色 二七九  
 持歩行く花屋かつゆの末の焔  
 炉扇 二八〇

露川 きえて涌く千嶋の妙や青嵐 三二

路右 扇 荒汐のあらきになく歎夕衛 三三

露苔 野火留のしらけし跡やうす霞 三四

鶯大 影法師も息を吹たる寒哉 三五

露朝 鄙ふりも同じ松よりたつや春 三六

蘆滴 梅咲て外へ出やうと思ひけり 三七

露白 挽んとすれは紅葉の散りにけり 三八

鷺白 ゆふたちやあらひ出したる繋き鯉 三九

鱸有 粟津か原にて 四〇

蘆湾 早梅の咲日は雪も浦の山 四〇

ワ

和孝 因たる軒や浪花の別霜 四一

和水 蒔豆の福かあつまる坐敷哉 四二

倭泉<sup>時七十八</sup> 神の留主事歎竜田の二日酔 四三

倭泉<sup>時八十</sup> むめか香や夜の浴の窓を吹 四四

倭明 足跡は花盗人かかきつはた 四五

和流 遠近の梅見ゆる夜となりにけり 四六

和流 長柄の埋木をもて造れる文台を伝給ふに  
かれぬ名やむかしなからの木の匂ひ 四七

其二 古短冊集（狂歌）

難読作者

鶴啼くやなゝつさかりの秋のふし 三九八

留守にせし罪の深よ梅の花 三九九

陰曆陽曆にまきれて蕉翁祭をわする  
老甲斐におくれてふらぬ雨時かな 四〇〇

狂歌之部

ア

秋金 おのつから霜にひゝきし声よりも雪になり 四〇一

安久楽 花とちり月とてりつゝしら山もゆきにはか 四〇二

朱楽 昔江 ↓昔江  
はるよしのさらしな 四〇三

朝起 後朝恋  
恋風のぬけぬかきりはうつり香をおしみて 四〇四

浅茅庵 ゆくりなくいとやのみせに立よりにて後のち 四〇五

東雄 夢むすぶ枕屏風の蝶つかひはなれぬ中のは 四〇六

なるゝそうき

厚丸

雪  
月花にうかれて出しよあるきもけさとちら  
るゆきのあし垣

三〇六

跡人

岡早蕨  
よしあしはそのしなてるや片岡にたかうへ  
もせて生ふるさわらひ

三〇七

綾機

霞  
みねに生ふる松のよはひの君なればむそち  
の坂はふもと也けり

三〇八

綾繁

日もなかくなるてふ斗の御所車大内山にか  
すみ引ねる

三〇九

綾の門  
衣紋

↓衣紋

初鯉  
はつ鯉うまみにほらをおとしけり夏やせす  
へきはしめなるらむ

三一一

綾人

なへて世の山てふ山を押まかすねおし形  
のあし原の富士

三一二

綾丸

松上藤  
池の辺の松にかゝりし藤波をなほかたより  
に春風そふく

三一三

有員

若鮎  
心なくきしの桜の一えたををるにちりたる  
花の若鮎

三三三

有員

みちのくなる東巴人うしをいたみて  
つねになき風吹こえて宮城野の尾花か袖も  
露こほるらん

三三四

有員

野遊  
寐つ起つ遊ぶ命のせんたくに正月ものをよ  
こす春の野

三三五

有文

早蕨のにきりて出す手の中をひらけはさく  
らしつくし款冬

三三六

有政

夢逢恋  
逢とみし夢の口説に喰切しおよひは胸の上  
にそ有ける

三三七

舍住

橋  
見るうちに空かきくれて人あしも戸絶の橋  
にかゝる夕たち

三三八

箴丸

寄風鈴に世の有さまをおもひて  
とき／＼のかせに狂よ風鈴のなるやうには  
かならぬ世の中

三三九

白かね  
いさ子

年賀  
ことぶきを干とせといわふ松の木をうすに  
してねる君か賀のもち

三三〇

多胡  
石文

寄浦祝  
千代かけし連りひよくの鳥の跡や実に敷島  
の和歌の浦野々

三三一

一樹

七夕に願ひといふは世の中の手向小袖をわ  
れはかりたき

三三二

市人

海辺梅  
はるかせに海へつひやす梅かゝを地引の網  
や難波津のあま

三三三

市人

夜梅  
梅かゝの寝かさぬまゝに手燭してみれば柳  
も目かさへた庭

三三四

市丸

薰風  
掛香よりとめて置たや夏衣のそてにそよそ  
よ風のかほるは

三三五

一 九 昔咄  
 とりあくる桃のためにはやかてこの川瀬の水そうふ湯也ける  
 三三六  
 一 三 九 松雀  
 ばら／＼と立し雀の友達を来るのを松の枝の羽やすめ  
 三三七  
 糸 彦 降積をかゝめて結句面白し無筆の窓の雪の明るさ  
 三三六  
 糸 満 此神のかもししさけと汲はやなちまたにたてるさゝの葉の露  
 三三九  
 糸 頼 名所百首の中におふの浦  
 三三〇  
 桜麻のおふの浦梨子あまの子かうまぬをよしと口にひさける  
 三三〇  
 糸 雄 鉄酒家のうしか家造りし給ふけるに  
 三三二  
 菊の枝にそへて酒を参らすとて  
 千世ふへきやとのあるしは明くれの友と見るらんきくの盃  
 三三二  
 鄙 良 住 ↓ 良住  
 野外梅  
 美和うしも遠き野中の梅の花匂ふかきりは風やしるらん  
 三三三  
 糸 磨 庭花  
 のとかなる心もしれやうつしうふる庭のかゝりは花のしら雲  
 三三三  
 稲 丸 庭花  
 鳥がなく東にとしをふる君はちよのためし  
 三三四  
 稲 万 呂 庭花  
 のありやとむらん  
 三三四  
 稲 磨 庭花  
 うるものも夏野に茂る草分て何ますらをの  
 三三五

其二 古短冊集（狂歌）

以 文 めてたしなのりのむしろに花の名のそのも  
 三三六  
 鳥 庵 団扇  
 めい／＼えなかさき土産たくさんにかさね  
 三三七  
 魚 丸 茸狩  
 しかつもとどう団扇哉  
 三三七  
 雨 什 月を見て老となりたるしは延しとまつたけ  
 三三六  
 かりにいつはらの山  
 お達者によく万代と世の人の言のはこふを  
 三三九  
 龜のかう／＼△  
 おなしもしなき四十七もしの市によす  
 祝のうた  
 三三九  
 歌 垣 四万  
 あさゆふのけふりにきはひいちみせもおほ  
 三三〇  
 くうれましこゑそろへやすらをめてぬつね  
 よわたるえとゐな京  
 郭公  
 三三〇  
 哥 種 ほととぎす月に鳴ぬるものならは田毎に聞  
 三三一  
 ん更科の里  
 山家花  
 人にまたしらせん事を三輪の山いくつ霞に  
 三三三  
 へたよりし花  
 遅日  
 三三三  
 梅 明 秋の夜の砧を扇打音にきゝつづ寐むる春の  
 三三四  
 日長さ  
 春水郷  
 角田かはつゝみにならふ柳しまはるはいと  
 三三四  
 なき人も来にけり  
 梅 成 三三四

古短冊集目錄

十五夜に雨いとう降て月のひかりもむなしく困子とともころひ寐してあしたによめる

梅彦

三四五

新月のひかりをうはふ雨かせにけさまで袖を絞り仕けり

納涼

梅房

三四六

涼しさに腰の扇もかく汗もとこてかぬけてしもふ夕くれ

十三夜

梅房

三四七

しら菊のひらきそめたる離よりまるみたらて出る月影

梅磨

三四八

春は花夏は白雨ふりかへてよし野々山にかゝる黒雲

きさらき半梅の花の散行に鶯の

裏襟

三四九

散梅の気のみしかきか鶯のこゝろなかきか今に來鳴かぬ

春懐旧

浦風

三五〇

そのむかし植し桜をゆきと見てつもれるとしを思ひ出けり

曙花

浦風

三五二

見あくれば目もかすか山霞居て雲にまかへる花のあけほの

余寒

浦風

三五三

朝ゆふの寒は春へまたかりてのひる日あしもちゝみゐにけり

うらべ口網

↓口網

工

このもとに酒吞ほして横になるハも華の下ふしのとも

英賀

三五三

もの思ふ姿と人な疑ひそ月見し首をしはし休めん

月

瑛沙

三五四

かけまくもかしこき竹の園生の姫宮行啓ましゝおおなし日初孫女を得たまひぬときゝて

たくひせは玉の輿にそ乗ぬらむ生先こもる窓のうむ声

枝成

三五五

楠はわら人形を武者にしてなき男迄遣ふ計

江戸住

三五六

綾の門衣紋

七々の緒の琴の音色に行先のたよりをまつの風かよへかし

東都の甘露門においてつくしのかたを思ひやりてよめる

琴の音に松風遠くかすかなる三笠の山と吞んで御座ろふ

焉馬

三五七

七十賀  
千歳ふる齡に見れば七十のおきなは松の今そみとり子

焉馬

三五八

才

天秤につよきめかたのこの上はまかりませぬとはねる炭壳

崗住

三五九

山春月  
煙たつ浅間の山にさせはとてすゝけ顔なる春の夜の月

岡住

三六〇

高階杉田赤尾関牛丸大野五老の寿を  
集めては三百九十三歳なりければ

岡持 松は三保こゝそみ所清見瀉よろつ代つきぬ  
富士のしら雪

小平荷

奥成 すぎとほる月の□は春山の霞鳥徳のかく  
し妻□聞

於古足 鹿聞て濡せし袖の重たはしゆすられて寐る  
旅の山駕

乎佐丸 入月に逃けよといひし山の端もひきよせた  
しな雪の曙

落栗 喜御か代のはしめそありて中／＼におはり  
なきこそめてたかりけれ

音高 風の出る穴ある谷のさくら花下より山へち  
り上りけり

音高 むかひ嶋にて七種を見侍りて  
君国へひゞきわたらし日の本にいひはやし  
ぬる焔の七脚

槌音人 茶道を好み給ふとき鈴成大人江奉誑て  
わか／＼と立る福茶のおて元もお道具も  
極そろひ哉

弟人 手もあしもふるへとまらぬ忍夜はゆきのは  
たへをおもふゆへかも

折鶴 搦衣  
夫婦より外に人なき家つとにかけむかひに  
て衣うつなり

其二 古短冊集(狂歌)

折主 賀  
万年の其定命を譲れかし六十巻を祝ふ主に△ 三七三

力

嫁々 打むれてこゝへこん／＼初午はもうあすと  
ての狂哥連中 三七三

柿人 吉書始  
書始の長生殿も御手伝ひ附て見事に出来上  
りけり 三七四

額翁 ふしのねを沖のしら帆とみるまてに尾花な  
みよる武蔵野の原 三七五

鶴寿 七夕  
しろかねの河瀬のかいの満かも落て先のる  
いもの葉の露 三七六

額輔 幾そたひ水のうきくさかきならし風の柳も  
よるへさためす 三七七

額輔 一雨庵破笠師知命の賀によみておくる  
百千たひうち返してやこゆるきのいそ路若  
やく君かとし浪 三七八

角住 咲そめてはるの尾にみん藤かつらなつの頭  
にのひる花房 三七九

影長 貧家冬月  
貧すれはとんな月夜もさへかねてうきくも  
たえぬ冬の空かな 三八〇

影佗 野馬台の空に声してほとゝきすちや出ぬら  
ん吉備の中山 三八一

梶丸 櫛るさまの柳を梅若のかみの雫にすたの春  
風 三八二

粕人

紙の名のよし野も三輪の杉原もたた一枚に  
しろき大雪

三三三

方住

年の暮も万歳村は楽く家の柱の留守は  
しつつけき

三三三

堅丸

あし音はさのみ立ねと若草のめつまにかゝ  
る庭の春雨

三三五

かた丸

清女驚はにくしといふ鳥みつからかあいと  
鳴くにいくとか愛のうらの榎か△

三三六

寿和利  
の方持

夷哥に心寄給ふ無銭老師の大黒を  
拾得たまへるを祝して  
大黒を拾ひ得給ふ小槌より一にたわれの哥  
種や出ん

三三七

勝雄

月見れば千々に物こと嬉しけれわか身ひと  
つのうきをわすれて

三三八

哥難

窓前恋  
きぬくゝにのこる姿をまたあけてのそけは  
のそく有あけの月

三三九

蟹子丸

すなはなる柳もすねた松かえもひとつ世界  
の雪の曙

三三〇

蟹守

樹陰蟬  
たちよりてきけはそれとそしられける森の  
こかけのせみのしのひ音

三三一

かねき

初春祝  
うちよりてくむ其酒も幾春かかはらて祝ふ  
とそのさかつき

三三二

鐘成

亥の元旦  
まめを祝ふその亥の年の一日さへ福□て  
ふゆたけかりけり

三三三

蕪坊

残暑  
土俵きはのこる暑さの剛いのはなつと秋と  
の関と知らるゝ

三三四

壁塗

春  
新しう春をむかへはあたらしくやなぎの枝  
に鶯のこゑ

三三五

可保留

梅  
門松にこほれて匂ふ梅か榎今朝春風のふく  
づみより

三三六

唐何味

木籬東の主の許に旅のやとりをなし侍  
りにわかれをしみて  
わかれちは時雨の空と人や見むとかく  
に後をふりみふらすみ

三三七

唐丸

歳旦  
髓の子をたいていねつむゆふへよりけさこ  
ゝちよいお多ひすのこゑ

三三八

唐丸

てりわたる月のみやこにむら雲のこゝのか  
さねはあらてさやけし

三三九

刈安

追善  
今そしる盆の燈灯ふきけしておとろかれし  
も萩の上風

三三〇

嘉留喜

嫁の朝寐といふを  
婿か朝寐すり鉢

三三一

軽人

月  
はれ曇る月の二夜のおもしろや笠置の山に  
かさどりのやま

三三二

糸瓜  
哥和種

幾度も六十一をめぐり来て千代万よの外も  
ふる亀△

三三三

川面

寄屏風  
引廻す屏風の内の喜月城そとくるにはも  
れぬ陸言

三三四

皮成 三三五  
うかれめのこゝろを  
君ならて氷もとくる傾城のゆきのはたへは  
つめたかりけり

菅<sup>紫</sup>江 三三六  
天  
愚案にはすめぬ物からすめる物のほりて天  
津空となりけん

菅<sup>女</sup>江 三三七  
遊女  
こゝろさまゆふ女成けり哥よみて客をえく  
ちの君のやさしさ

菊<sup>紀</sup>丸 三三八  
七夕てふをたわれ哥に  
笹の葉に結ふのかみの短尺はいもせを星へ  
かけているのか

菊<sup>曆</sup> 三三九  
庭前秋  
存のほか風からまれて風上へひと枝なひく  
青柳の糸

亀山 三三〇  
庭前秋  
ちる露の花かつらきとみゆるまで小尻のぬ  
る秋の小道

貴周 三三一  
暁更春月  
散をまちぎなくをまちし花鳥もおよはぬよ  
はの月の明ほの

橘洲 三三二  
名所郭公  
鶯のすたのわたりのほととぎすなきて行衛  
やしやかちふ山

〔橘洲〕  
書 三三三  
一者万物始  
あけてけさ鴉も一は万物のはしめの春やつ  
けわたるらん 菅江

稀笛 三三四  
八十ノを富士のかまちに数かけはいく万  
代の三保の松はら

木の東籬 三三五  
↓東籬  
筑波峯に登て霞ヶ浦のかなたなる故郷を  
なかめ侍りて  
つくは峯に我故郷をなかむれはかゝる霞か  
浦見なりける

狂哥道人 三三六  
庵春雨  
青柳のめをいにして眠らすはくるゝもし  
らし春雨の庵

京伝 三三七  
馬上聞鶯  
面白く伊勢路の馬のこたつにて哥よみあひ  
し春の鶯

清風 三三八  
賀  
七十八二人ひとつのほきことは世にふた  
つなき宿の愛たさ

清澄 三三九  
鶯の餌をはむ庭のくものいにちりたるさま  
や梅の花笠  
巖上亀

清綱 三三〇  
万代もうこかぬものはいはほよりほかには  
なしと亀の住らん  
初恋

鬼卵 三三一  
幽霊にあらねと申と呼懸てあとはきえたい  
やうな初恋

桐長持 三三二  
↓長持  
東都月  
月かけのこゝろのまゝにてらすらむくまと  
なるへきやまもなければ

亀齡 三三三

其二 古短冊集(狂歌)

金 鶏  
述懐  
いかなれは貧の病の妙薬を千金丹にかきも  
らしけん

金 埒  
鶴岡にまふてし頃  
旅寐して月まつ宵の侍従川ふけ行鐘も鶏も  
物かは

ク

空 蹄  
雨降は御札を申すさまをしてなほそらあふ  
蛙鳴也

うらへ  
口 網  
大海をふせく手先のそろはんはしほの間屋  
にくれのさしひき

暗 記  
春旅  
あしよわも駕籠をはずへて江の嶋の磯山ひ  
ろふ土産の花貝

倉 光  
山花  
犬上の山の桜を雲雪とあらそふはてや不破  
の関守

藏 人  
こたみ見世ひらきしたまひてよりひち草  
八日にまし生ひ茂るをみて祝し参らす  
酒の名のなつ梅からなつやの見世そひ  
らいてかうはしきかな

栗阿弥  
立春の霞  
をとめ子か手に玉しつゝ羽子のかす筑波の  
山は霞そめけり

栗園  
白主  
↓白主

栗間戸  
蚊  
三寸の舌よりも蚊か口の針五尺の身をは破  
損させとす

愚 老  
寄隠恋  
老ぬれはしたふ心の猶ふかく夕さりくれは  
思ふうき世か

桂樹園  
蓮  
寛永寺見おろす四文銭蓮のは裏につきし池  
のさゝ波

敲 阿  
木の東籬のぬしへ返したいまつるとて  
筆のかさよしみをあつく重ねたしなかい  
のちもあらんかきり

玄 陰  
江月  
波にすむまのゝ入江の月の色に尾はなを遣  
てかよふ浜風

コ

鯉 丸  
甲子春  
甲はるかさりのあひのつものよりもなかくよ  
わひを引か子の年

蒿 蹊  
寄竹述懐  
ほとくのふしなかりせはくれ竹のなほき  
もたのむかひやなからん

孤月尼  
ちり塚にちりうせぬ松の言の葉をみよやい  
く千代文車のふみ

胡蝶庵  
↓ゆめ輔  
寄餅恋  
いかにせん恋くさ餅もねはりつきちぎる間  
もなく浮名たち鬼

言 規  
古稀年御号  
むかしよりまれなるとしにいたれともなす  
ことわさはいまにおさなき

此主 樽してこそより待し春来れはくさめくの 三三二

出る道野辺

駒成 酒呑の友やほしけれ呼子鳥酔しれ顔は猿に 三三三

かも似る

駒彦 山吹の花に向ひて蛙等は何おもはゆく跡す 三三三

さりする

湖鯉鮒 十六夜月 せけんては夕へのつかれに寐やうともかけ 三三四

かまひなく月やみるらん

高麗丸 春月 うららかな天上眉や月のかほかすみの簾を 三三五

もれし腫よ

古渡 点数もはつか五三家古三郷はん附もしたに 三三六

く居るなり

西馬 六十の賀に名所を詠添ておくる 三三七

老の坂かけはしりして木曾路なる六十余次

酒壺 皿に桃も月かけにうかれては秋の夜床の 三三八

尻もすはらす

酒守 夏月 千とせまで作れるまつのみかふよりのほり 三三九

過たる夏の夜の月

沙魚 歳晚のかけとりをよめる 三三九

いる事は矢立を用ひてうちに弓をははり

笹上 雪丸 ↓雪丸 三三九

て出たつかけとり

其二 古短冊集(狂歌)

膝元 左久留 とふけよりほんけかへりをうらなへは龜の 三三二

齡の万代やへん△

定丸 心なき身にも涙はこほれけりあくひの跡の 三三三

秋の夕くれ

颯々 蛙 行暮て木の下蔭になく蛙いくさの中に哥や 三三三

よむらむ

三駄 山月 八幡山老分はすんて月今宵はなつ雀も凡百 三三四

正 恋

三陀羅 きぬくの情をしらは今一つうそをもつけ 三三五

や明六つの鐘

三馬 人間はは息をもいとへ白玉か何そといふと 三三六

きえたかる露

山陽 初夢をみつのあしたか宝永のやまもほゝゑ 三三七

む春そ樂しき

三利 霰似玉 音たかくをさゝかに聞ゆなりちるやあら 三三八

れの玉のひゞきは

慈延 シ 落花 なれ／＼しかひこそなけれ木本にちらぬこ 三三九

ゝろを花はならはて

鹿丸 里擣衣 ふんとしにのりをかいつの里の家はうつさ 三三九

へしまつ一へんにして

九十六巻  
しきふ

寄亀祝  
立出てゆふけをとへは亀の背にきみ万代と  
あらはれにけり

三六一

賤丸

歌曆  
大空へつゝきて不二の雪四六極り七九十見  
る高根哉

三六二

紫笛

高野山に春をむかへて  
ひとも来す節季も来たる山中に見事光にけり  
この花の春

三六三

柴人

納会をことほきて  
年の数三十一文字のわかみとりよみ納めた  
る松の言の葉

三六四

慈悲成

東山を見て  
蒲団着て寝た山見てもあつからぬ四条かわ  
らの夕すゝみかな

三六五

島人

鶴  
手かへしをよくして沖のなみに結ひ千とせ  
ふる着の霏の毛衣

三六六

霜解

秋夕  
あき淋し柳の本の夕まくれ蝙蝠羽織きた人  
もみす

三六七

舎風

廊花  
家尊いろの求や応らんきのふけふうられ  
てきたるよし原の花

三六八

定規

柳  
青柳の髪も着にけん袖頭巾めはかり出して  
花の見へぬは

三六九

松月

賤の女も早苗とるには行義よくならふや菅  
の小笠原流

三七〇

小眉住

松山

十かへりの緑をそへて八千代まできみか齡  
をまつの初夢

三七一

正直

降まゝに沓もはゞきも見えぬ迄あしならて  
はしる雪の辻鶴

三七二

蜀山

としのはしめに  
お出には及はぬものを老らくの春は来にけり  
りく

三七三

蜀山

いたつらにすくる月日もおもしろし花みて  
はかりくらされぬ世は

三七四

蜀山人  
二代

墨色皆不知めや世の中の人のこゝろのうつ  
くしの玉

三七五

小覃

白酒

ふるゆふへみわかぬ驚にひきかへて鳥の目  
たつ雪のあけほの

三七六

栗園  
白主

青によし檐の広はのかたつふりみやこうつ  
しの車をやひく

三七七

白主

賀  
老の波よるを様く遊あしのあとへ年とる  
わかの浦鶴

三七八

森羅亭

桜  
犬桜その名にめてゝ咲花を雪となかめて狂  
ひあるかむ

三七九

又

季鷹

梅盛  
北南枝を分しは昨日にてにに東に薫るう  
めか香

三八〇

菅 伎 我色にはや戻り来て夕露のこゝろはかりは  
残る白きく 三三八

七

杉 丸 尋ぬれは案内顔にや散て来て嬉しかなしう  
おもはするはな 三三六

関 住 松か枝にまとへる藤のいろころもはるとな  
つとの御詠向 三三九

杉 丸 元服賀  
めてたさはけふ元服の男山くむやかすみの  
名にたてる春 三三三

錢 丸 鶯川  
闇の夜に漁とる業の邪魔なしてう船に月の  
客やさしけむ 三三二

菅 雄 朝倉の閑路をうけてかへる鷹さんしやうほ  
とにみへつかくれつ 三三四

俣 神風の伊勢の海辺や正直にはるたつ日より  
霞そめけれ 三三三

鈴 成 針に糸よし通るとも雲のそてほころひ口は  
月につゝめな 三三五

仙 七 寄鶴祝  
和かの浦の鶴にならひてうら笑みきみ社千  
代の齡ひ経ぬれ 三三二

捨 魚 いふものにそへて  
はつかなるさいてなれともうれしさの袖に  
あまらむよすかとてこそ 三三六

千 高 盛 ↓ 高盛  
ソ 黄鳥  
刷七の名にこそよへれすり餌にもこゑは汚  
さぬ籠のうくひす 三三五

炭 方 ちからつくうてつくにても咲花の匂ひはさ  
らにぬしらすく 三三七

外 成 祈恋  
此ことくあはせたまへと両の手にちから一  
はい神拝むなり 三三六

隅 成 散らぬかといそく梅見の道案内さきへ立た  
る風おほ束な 三三八

外 成 恋  
逢ふ阪の関もる神の御社もあちらむきには  
ならぬものかや 三三七

墨 縄 庭の梅更沙と見へて風呂敷のかすみにつゝ  
む春の曙 三三九

空 寐 曙雪  
雪の太鼓はやくらにひゝきつゝゆたちに逝  
こむぬれ風木戸 三三〇

寿和利 ↓ 方持  
道頓堀白雨 三三〇

寸 柳 雷の太鼓はやくらにひゝきつゝゆたちに逝  
こむぬれ風木戸 三三〇

空 満 美しい人に見らるゝ夢さめてかほのまはゆき  
雪の曙 三三六

其二 古短冊集 (狂歌)

夕

大酒

山吹  
口をしと花のごとくに山吹のものいはぬ色  
はあへてことなし

三三九

種丸

九ツに四ツうつ里の拍子木もうそか五ツの  
町の風俗  
季鷹君の御盃をいたゞくとて  
か茂の君の流れいたゞくなにはもの朝夕汲  
し川水のほか

二四〇

大春

春雨  
野心有ふる春雨におもひけちてやとの火桶  
にもちひやきをり

二四〇

玉城

追悼  
日を添へて苔の衣やけさも又きては涙の袖  
をぬらしつ

二四二

高彦

封したる御師の手紙と窓の梅きた斗また雪  
に開かず

二四一

玉成

野鶯  
おしからん庚のさるも耳をとちきく人もな  
き野辺の鶯

二四三

高盛

仲の町花に見とれてかへらねとはるはしつ  
けき山の神さま

二四二

玉成

神たにも哀はかけよみしめなはつきぬ願ひ  
を世にもとむとも

二四三

千盛

九月尽  
行秋の背中たゞひてしやくりより留なんけ  
ふの別れおしきよ

二四三

玉也

賀  
老の身となるをしら毛の翁面君か千年の三  
番叟なり

二四四

たく山人

果報とてねてもまたれぬ世の中はおきてゐ  
てすらまにあはぬなり

二四四

玉丸

福丸うしの賢息君の初轡を祝して  
二葉よりかむはしき子の初のほりそのせん  
たんも長き柄の鐘

二四五

内匠

初盤  
買ひし直はきもにこたえるはつ鱈いさわた  
ぬきてさしみつくらむ

二四五

玉守

蚊遣  
蚊遣たく海士か苦屋は塩ならてからきうき  
めになきむせふらむ

二四六

竹成

名所連  
池の名はいはねとさすかしろくとしるく  
咲けり忍はずの蓮

二四六

田丸

元服を折にて見へし村扇ゆく末広ふひらく  
ことふき

二四七

多胡石文

梅  
↓石文  
なには津の梅はまさしき兄なからさくらに  
王をゆつるかしこさ

二四七

為景

君も猶たゞ一へにはなかめしな残るかひあ  
る八重の村菊

二四八

田鶴丸

雲をわけ霞を別てはるくどねこゝしやま  
を帰る鷹かね

二四七

為丸

夕花  
いそくへき道を忘れて日高くも宿のさくら  
の目にぞとまれる

二四九

種成

穴賢付てあふけはたかさかのまつのみとり  
に月かゞやけり

二四八

多磨

いそくへき道を忘れて日高くも宿のさくら  
の目にぞとまれる

二四〇

軍

浅間山をみて  
ふしの跡の烟はたゞすなりぬるを浅間の山  
そとことにはにみゆ

二四二

千

千明

花街の雪といえることを  
道もわかす今朝降雪や積るらむさらても人  
の迷ふちまたに

二四三

千枝

野遊  
見たひ髪かきやりなから菜つむ覧野守の鏡  
見まほしけなり

二四三

智恵

内子

↓内子  
獵人  
獲なきぬしいさむとやなま皮にゆみはりて  
出ますすらをか妻

二四四

千賀江

郭公  
はや啼とせけんともりて郭公きよくく去  
年のまゝの古声

二四五

近住

名所螢  
なかるゝももゆるも風のかけめ物宇治の螢  
は朱らうそくかも

二四六

近道

寄浦祝  
住よしの浦野氏とて米とともにもこれも粒  
くたからいてたり

二四七

竹阿弥

虫  
女郎花尾花か袖にまねかれてころりとした  
る鈴むしの声

二四八

千たけ

扇合の点あへける時  
よむごとにきもそひやせるおもむきやあふ  
きなかわる歌合とて

二四九

千寿

煤払ひして  
払ひぬとおもふもおかし宿の煤ちりの他な  
るすみかならぬを

二四〇

千万多

待恋  
あすの夜をおほえ違へて今夜かところん夜も  
やはり君そまたるゝ

二四二

長羽

思つるとよめる  
世間もかくこそ有らぬ松原のすくなる道は  
行よかり鬼

二四三

長汀

夏  
月雪の色にかよひて咲ものをないうの花と  
名にはいふらん

二四三

著作堂

芙蓉をよめる  
はちす花かの峯とほく濁る世をわたるはお  
なし池のかけ橋

二四四

月守

ツ  
遠山余花  
しつはたの山路に蓮の糸さくら遠き青葉も  
花の漫陀羅

二四五

月安

廓雪  
ふるゆへにかよふ廓の居つゝけに君の心の  
とけぬ大ゆき

二四六

月良

町  
水無月の頃川越に旅寝して兼て哥の友な  
る仙波の里黄金の屋雀守といへる人にま  
みえ同じ扇町やなる鶴むらうしを訪ふ  
にたちねの今年千代のことほき祝ひ給  
ふときゝてけふ雀守雀村の君にまみえし  
は目出たき事このうへやあらんかし

二四七

月良

町の□の扇にかきし鶴なればつくる齡ひは  
あらしとそおもふ

二四七

筑波 借月 天地はとまれかくるな月の入る山を動かす歌はよみたし 二四六

槌音人 都鶯 ↓音人 鶯もものにこまきみやことてひともし梅にかさや縫らん 二四九

槌丸 都鶯 藤丸うしの旅立けるを賀してうたの友蛙にしかし文字さへも頓てめて度かへるともよむ 二四〇

筒長 時鳥 ほとゝきすなくかゝと待身にはおもひの外に長き夏の夜 二四一

積方 関月 関守か心とめたる秋の夜は月も笠をそぬきて行らん 二四二

露繁 千年山千もとを移す千代の松千々をかさねて幾千代やへん 二四三

津良樹 拜人 蓬菜の山をもなさむ万年龜の齡を積重ねて 二四四

釣村 拜人 富士はそもほさそといへとなまくさのすはしりもありこのしろもあり 二四五

鶴村 テ 野路梅あるしなき野路の梅にも制札を立場の茶屋のわらの弁慶花 二四六

底之 テ 野路梅あるしなき野路の梅にも制札を立場の茶屋のわらの弁慶花 二四六

停々 テ よしのやまよしやまことの雲までも花にしとおけ花のこの頃 二四七

貞右 九月十三日夜雨のいたうふりけるふしりうきういもてふものをたうへるととて薩摩いもむし／＼くらへは空も又むしくらいなり栗の名月 二四八

照道 有花即入のこゝろを回文にてしらるはとはなにとひてきいつかはと 二四九

天作 君の恵うつるあやめの花のときさて咲たりやいろも香もある 二五〇

東雲 道のゑにしあるかたへ忠孝の石摺をあくるとて愚言をのふるになんおろかなる老のすさみに世の人のしらぬはしまてさらしの月 二五一

東朔 父母と君のめくみはから衣きて見ることに身にそあまれる祝 二五二

東籬 暁のかねなりけふのみせひらきかをう／＼のご多そ賑はし初名代の間にほとゝきすをきゝてよめる待／＼て淋しくねやのほとゝきすあたしおもひそかけたかと啼 二五三

時春 一筋にからくするのしみやこ路をふみ見る君のいとゆかしけれ餞別 二五四

年竹 早瀬たちわたる霞の袖のたもと艸野辺にちりてやむらさきの塵 二五五

俊満 寄坐敷恋とやかくやせん畳坐敷やくそくの人ははるかにうくみゆるかな 二五六

与清 越りては人やかめん錦きて立りと見ゆる  
二四七  
姫桃の花

豊とし およひなき月にこゝろは届かすも上見てく  
二四八  
らせ今宵はかりは

鈍阿弥 よろつ代も替らぬ春に逢坂の鳥もかけ音は  
二四九  
なかね関の戸

ナ

内記 社頭鶯  
うら白の連歌に面しろかりきひとくをつゝ  
二五〇  
れ宮の黄鳥

内子 言出後悔恋の心を  
二五一  
恋のみちころはぬさきの杖もかなくちのす  
へりしあとのくやしき

長生 出産  
二五二  
爺に似たにかみかあると噂して産子に用ゆ  
五香湯劑

仲臣 うつくしき雛ともいはんむすめよりまた座  
二五三  
をもつもとしまやの酒

凹 水鳥  
二五四  
おとめ場としりて上毛の霜までも落つき払  
ふ小田の水鳥

中嶋 はな番をおくるとて  
二五五  
懐に入る小菊は大りんのはゝにすかりてち  
々千代や経ん

仲澄 立春風  
二五六  
垢付し衣はぬけとあたゝかにはるたつ風や  
光見すらむ

其二 古短冊集 (狂歌)

仲塗 若菜  
二五七  
奉公する葛西生れのまゝたきはなをもわか  
などおつけのみかな

長根 寄刀祝  
二五八  
をさまれる御代は刀の黒つかに目貫の鬼の  
こもるはかりそ

長人 天の川あひそめきぬる七夕のくもの衣は秋  
二五九  
のそら色

長持 年の賀をことほきて  
二六〇  
万代のかめの甲より祝はるゝとしのこうこ  
そ目出度かりけれ△

長持 年用意三千駄の薪とりひえのあらしの音も  
二六一  
かれ行

奈賀良 年賀をほきまゐらせて  
二六二  
いくとしも色はかはらて老初るきみかすか  
たや和歌の浦松

鳴音 花  
二六三  
寐ては尚をられきりけり延す手のはなにと  
ゝかぬ夢のさめきわ

投網 遅日  
二六四  
暮かぬる春の日あしにつら杖もいつしかと  
れて枕とそなる

波丸 蚤  
二六五  
取とめた手なみはいかに人喰ふなんち悉皆  
色もあか鬼

業枝 寄駒祝  
二六六  
千代までと鷹野々駒も仕合の君にひかれて  
万代や経ん

成丈 虫  
二六七  
更る夜のうり行虫の音を聞はいくらにもま  
たかへぬ淋しさ

二 播磨屋四郎兵衛となん言へる御方の古稀  
にならせ玉ふを賀して  
人毎に言はずは誰かしる兵衛殿ほう祖のと  
しの十歩一とは  
二四七八

二 鷹 柳 さしやなきめてたき春の手鞠うた庭にねも  
よくついたりく  
二四七九

似 足 こゝらかと足をとむれば彼方には口をとめ  
たる藪のうくひす  
二四八〇

塗 磨 又 花 隅田川当こととはん人までも花の手引に賑  
はへる声  
二四八一

寐 翁 ネ としはくれにき  
花もみち見しもきのふの春あさくおもふに  
はやく年はくれにき  
二四八二

七十八 寐 言 程ヶ谷 戸塚はと急ぐ旅路の日くれ前とまるにはよ  
き程ヶ谷の宿  
二四八三

軒端 杉丸 ↓杉丸  
貧者太平楽  
欲はなれうつくしよしの気楽さよその日く  
らしの身はうすくとも  
二四八四

野州良 井水  
冬深くみこもる蛙井の内のことたにしらし  
氷とつれば  
二四八五

吞 高 若帖  
山川の矢よりも早く行水に柳の葉ともみへ  
し若帖  
二四八六

吞 直 寐 八十一翁  
置しちの利そくを加はひ鼠算月くんに産む  
こかね仰山  
二四八七

面 独 翁 吞 安 つはくろの出入ほととの戸をあけて孫子もと  
もにいづる麦秣  
二四八八

憲 章 元服し給ふかたへよみて賀し侍る  
前髪のとれて心も広くとす多幾かすみた  
つおとこ山  
二四八九

乘 安 御当所の遊女をよめる  
青柳のまねく川辺に出見れはこゝろのうこ  
く舟のうかれめ  
二四九〇

八 吾妻にも花の都をまなひてしもと桜をこ  
き交にけり  
二四九一

梅 軒 皎月様うしをかしてよめる  
船をは雀にならひてむつましく男蝶女蝶も  
羽そてあわしぬ  
二四九二

梅 春 菊好ぬしの大山まふてすとときよて  
たちいつる気もせきその山まいりほとよ  
き旅そたのしかるらん  
二四九三

馬 伎 田毎にまかりしときに  
深山にうつれとてもいたつらに見るな小判  
のはしこ田の月  
二四九四

菽 野 翁 二四九四



古短冊集目錄

秀丸 枝をりて残しゝ哥は花守かいかる心の鬼ひしく体 二五六

雛亀 初春鶴 雛初 雛初けたる羽袖も白き力紙霞む額や鶴の舞 二五七

雛丸 禁中柳といふをよめとあるに 女かとののまをしやあやしむみ格子たゞく風の青柳 二五六

雛丸 雨後夏艸 此の頃の雨のかけん敷われる程照れともしめるかわら撫子 二五九

雛丸 後頰 ことしをはいろ古稀とのみ祝いつゝつい米の賀になれるめてたさ 二五〇

紐長 傾城梅見 くれむうちに酒もさめなん傾城のとめてかほれる袖の梅か香 二五三

百人 紅葉 小倉山みねの紅葉々心ありてきをいためしか夏山の嵐に 二五三

照 桜 さら花あはれとおもひ初しよりこゝろのとけき春のすくなき 二五三

広門 女郎花はなのあだ名のたつことは跡にまつむしのなけはなりけり 二五四

広紀 田畑持丸てふ高名は知りなからいまたまみへ侍らざるにみまかり給ふをいたみてよめる 二五五

名残おし今は七々四十九のもち丸長者となられける哉

広長 月に松の形を月影に松のこふしをさしたしてさるの苧かせのさかる水の上 二五六

広丸 野草芳菲 梅か香もうつりて匂ふくさむら路しきのはしめの春の野もせに 二五七

広海 としのはてに むくらにもさはらてとしはゆくものをあはれしはしとなにをしみけん 二五六

笛成 初秋 鋸のぎりの一葉はこほれけりとしを二つにひきわくるとて 二五九

笛丸 正月七日庚申なる日され歌とも諷ひつれて江南の襟に昇り孝女敷嶋ぬしにまみへたるを祝て 二五〇

福住 かうしんのその人の日に逢ひたるはうれしき島や哥よみの友 二五〇

福丸 舟中五月晴 今宵のみはれたる入梅の山谷堀つきの出番の乗れる猪牙舟 二五三

福丸 富士 から人もふしの姿にしへのかしうらおもてなきやまこゝろを 二五三

節躬 うつむひて髪あらふ様や青柳のさかさま川にえたをひたすは 二五三

藤丸 分草菴うしの判者ひらきを祝ひて短冊をおくるによめる 二五三

敷嶋の道にこゝろをそめなしてなかくあそへとおくる短冊 二五四

藤 戸 呂  
行末を語らん我に名のりてよさきに標結人  
し不有は

糸瓜種  
↓ 歌和種

二 葉  
世を詫たとるをみなの旅笠と見はや嵯峨  
野のきつかうの花

木 端  
寄池恋  
いつ花かさくらの池そつれなくて逢ふへき  
事は遠江のくに  
明治甲午元旦試筆

文 員  
六十のとしの坂をしこゆるにもつえをわす  
る一人そめてたき

北 斗 翁  
霞中柳  
心けて持て  
先づ結構な春駒も世わたる手綱

大 打  
寄西恋  
癪ならて妻戸の西の月影も待夜はいたく更  
てさし込

干 則  
祝  
くれなひの霞のきぬにそくはしやはないろ  
染の青柳のいと

文 膺  
咲ける有しほむもありて百種のさかりのは  
もしれぬ武蔵野

細 道  
鶴亀の齢をかりて君か代のちよ万代の例を  
や見ん

芙 蓉 花  
あらためてなかへは鐘の一筋に大役につく  
しるしなるらん

本 木 宣  
ひめこ松こけおふる迄なれてみん君かちと  
せに我もひかれて

旧 家  
寄浦祝  
よみいつる和歌の浦なみ静にて世々のさか  
えを見そし一文字

マ  
三夕のうたかきたるに  
さみしさは浦の苔家に塩もなく榎立山に茶  
もわかぬしぎ

古 根  
手作りの磯海苔にそへて  
汐はやき三浦の海をあまを船のりあしくと  
も召てたひけん

真 顔  
池上月  
ひと夜みてもたらぬやうなは池の中に照月  
なみやかそへ込けむ

ふ る 道  
万歳に追はれて雄鹿ならねとも少女のをと  
す角のかんさし

増 恋  
約速を反古になさねはとりかはす日ふみの  
数のましてこひしき

平 荷  
うめか屋の子日にまかりて  
ねの日するみきりの梅の咲出てひく手もか  
をる姫小まつかな

真 金  
初春鶴  
初春のはつ子の松の齢ひをもそもおしめの  
千代の老鶴

小 岡 持

雅 海

二五五  
二五六  
二五七  
二五八  
二五九  
二六〇  
二六一  
二六二  
二六三  
二六四  
二六五

二五三  
二五四  
二五五  
二五六  
二五七  
二五八  
二五九  
二六〇  
二六一  
二六二  
二六三  
二六四  
二六五

雅雄 由伎 あしあとをつけたはたそとうたかひもこたつにかゝる雪のぬれきぬ 二五五

政毅 眺郭公 ほとゝきすこかひ怠る賤のめか夢おとろかすあかつきの声 二五五

真砂 山家花 ひらきては来る稀人と侍れけりみやまの奥の花のさくら戸 二五六

舛守 春月 春若きほとは霞のうち気にておもてよわさよ朧よの月 二五七

真袖 虫ほしといふ事を むし干のかたなのふき粉霜おきぬ土用に氷見るはかりかは 二五六

間鷹 春植物 春の気を梅にむすんでその已来さくらによれる青柳の糸 二五九

街 納涼 富士風二三合つゝ吹こほれ一こく橋のたもと涼しも 二六〇

松蔭 餞別 首途の気もはる風やかほり来てふきおくりたる梅の花むけ 二六一

松笠 寄浦祝 ↓玉成 二五三

松人 此浦はちよに八千代を引つゝくひくやまわたの鶴のことふき 二五三

儘也 寿の字の御盃を祝して 二五三

真間世 梅 雲慶のさくらにあふや梅の花あうひにふける風の声 二五六

真守 山吹 山吹の花は蛙のうた所いろもこきんにならひてや咲 二五五

眉住 華 さくら狩のほる女中も御殿山花に見まかふほうし一むれ 二五六

真弓 待郭公 ↓松月 今更に思ひかへせはほとゝきすやくそくもせて待したわけさ 二五七

丸寐 古木柳 姿こそ老木と見ゆれ春毎にめはたしかなる青柳の枝 二五六

万象 初冬 偽りのなき世なりけりまめたちてあられ交りに時雨ふる空 二五九

・森羅 ミ 二五九

幹文 亀 うたかはむふしもなければやかぬよをかめもうれしとおもふなるへし 二七〇

実副 春月 春の夜の月の朧に鷺草のはなも水かとうかふて 二七一

未時 うくひすのはつ音に春をさとりてや雪の達磨の坐禪くつるゝ 二七二

水盛 杜若 おしの住池にさかりの杜若人もつまとそ渡  
る八はし 二五三

道かた 菊の花匂ふ山路をとめ行は千と世よにふる  
人や住らん 二五四

道草 松浦瀉むかしをしのお姫まつのみる月はち  
とせひくふるの嶺 二五五

道成 寄茶碗恋 いよれとかふりはかりをふる茶わん染付  
のよき返事をやまつ 二五六

道頼 一日百首の中に後朝恋を  
きぬに腰をぬかせし後はたゝつら杖つ  
きてたつ名をそ思ふ 二五七

道頼 宝 いはやかから鬼のやうなる男等かこかねをは  
こふ佐渡の嶋山△ 二五八

御津風 通遠方恋 歩行はたし一時三里ゆく間さへより来ぬか  
とて妹やまつ覧 二五九

三日坊 きの額に改めあらため玉ふを賀して羽折  
の紐進上するに  
すみ立る家や羽折のいとなみと孝のこゝろ  
は胸に結ひて 二六〇

光丸 樂聖鹿 八十八の賀をよめる  
てる月に老をわすれて兎より米つきもちも  
つきてめてたき 二六一

満丸 手弱女を七人画し贊とて  
月とみたり雪とみたりか其中にひとり劣ら  
ぬ花のおも影 二六二

岑頼 喰積 喰つみのまつ根笹にしらよねのあられた  
はしる音はありけり 二五三

三好 子のひ野にうたよむ人のたもとより引いた  
したる松葉たんさく  
翫花 二五八

三輪丸 雪と見る甲斐あらばいさ桜花ともしとなし  
て夜もなかめん 二五五

虫成 △ 駒か原天のめくませ給ふらんこぬかの様に  
降れる春雨 二五六

無銭 福本氏四十二を寿して  
世の禍を始終二除て是からは千とせも生の  
松にかも似て 二五七

むせん 華 盃もまた手に取らぬうちにはやありにさゝ  
れし花の下陰 二五八

明阿 × あさましき身としおもはゝたゝもふをふか  
さちかいを常にわするな 二五九

飯盛 あにとよひ母とかくなる梅咲ぬ犬のをはて  
ふ雪の中にて 二六〇

飯盛 卯の花の月にうかるゝ庭にきてけふみそか  
とは馬鹿をいへ主 二六一

面独翁 呑安 ↓ 呑安

其二 古短冊集(狂歌)

毛

木阿弥 山家  
糸ほとに落るしみつをむすひつゝいのちつ  
なく山の下庵  
夜雪  
二五九三

木鉢庵 天群のはかり目ならて夜目にさへつもりて  
みゆか雪の白銀  
初恋  
二五九三

持風 盆ならて習ふ手ふりは初恋のうかれ心に胸  
や踊らん  
二五九四

幹有 芳野川花につとふは一寸のあゆにも五分の  
大和たましひ  
春野  
二五九五

元成 乙女子かこゝろを春の野遊ひにほとけかゝ  
りしゆきの縫ひあけ  
残菊霜  
二五九六

元成 朝な／＼霜もこゝろをおき添てまかきに残  
るしら菊の花  
二五九七

元木 阿弥 ↓ 木阿弥  
冬の哥あまたよみける中に  
遅桜さく風情あり榎葉の青葉ましりに雪の  
はつ花  
二五九八

桃花 正札もつきと雪とに花川戸ねは千両の金兵  
衛か宿  
待空恋  
二五九八

守舎 よき耳とほりてまつ夜におもひきやふけゆ  
く鐘の声きかむとは  
二六〇〇

盛砂 をさまれる御代は戸さゝてもものゝけの大小  
はかりくわんの木にさす  
二六〇一

盛住 おなしこゝろを  
五月雨に声をゆつりて淋しさは□日鹿の浦  
に秋やきぬらん  
二六〇二

森住 天津空下りて千代のためしにそいくつを撫  
鶴  
や鶴の毛ころも  
二六〇三

もり住 鷹の名のしらふに降れと雀にもけおとされ  
ぬる竹の葉の雪  
名所鶯  
二六〇四

守晏 七十二  
すかはらやふしみの里の呉竹にねくらたす  
ぬるうくひすのこゑ  
河辺螢  
二六〇五

諸持 河やしるいそふあたりは心してほたるよお  
のかみ火白くたけ  
二六〇六

安貞 ヤ  
秋の菊  
みても又またも見かへす庭菊やをなしとこ  
ろにむかしかはらす  
二六〇七

安直 八十翁  
千なりの中に一つのたね瓢是木の下の詠め  
成らむ  
二六〇八

安則 山家梅  
かぎつけて訪ふ人まれの山里は一しほ深き  
軒のうめか香  
二六〇九

安良 船行夜已深  
浪枕棹にくたきて水鳥の夜ふかき夢や驚か  
すらむ  
二六一〇

宿成 春されは先さく花の弟かきくねを分る垣の  
うくひす  
鶯  
二六一一

宿満

遠かたは空のむらく時雨して落葉にさむ  
き夕あらしかな

二六三

藪丸

いさゝらはそめきあるかんよ立してあつさ  
はなけの花のいろ里

二六三

山住

犀月奄おもわつも黄泉に趣れしを八月の  
頃聞いたみて  
皐月田の植しも今は植果てゝこくらく上に  
みのりなるへし

二六四

山彦

万代のうへを見こしの松か枝はかき根の外  
の齡成へし

二六五

山彦

余寒  
消残る雪も凍りてあつさ弓はるとしもなく  
さゆる此頃

二六六

山道

蓬萊の縫の小袖か浦なれば幾千代経ても模  
様かはらす

二六七

ユ

祐翁

百草園の風景を詠めて  
七年もさらし百草に三里よりひとひはこゝ  
にみこしすへたし

二六八

行就

寄鳥恋  
大鵬の羽うちて恋のやみにせよあまり人目  
につきの夜頃は

二六九

雪人

不二の歌をよみける中に  
いたゞきに雪かあらずはもえいてん用心の  
よぎひの本の富士

二七〇

笹上丸

雪下園の老師七句の賀に狂歌  
七十になりても末を松の花十かへりはかり  
賀も祝ふへし

二七二

雪丸

落花  
山風のつれなき咎はなかくにはなのをち  
とゝなるそ佗しき

二六三

雪丸

月  
冴けさを月には持てとも嬖捨し涙に戻すさ  
らしな月

二六三

胡蝶能  
ゆめ輔

寄浦祝  
千代をふる袖しの浦に打寄するはまの真砂  
の宝の数々

二六四

良住

倚花恋  
野の萩の花にしあらは我衣ゆき来摺なはつ  
か増ものを

二六五

芳貫

鯉  
古くとも間を合せたる初松魚かほにすわう  
の色はきぬれと

二六六

義成

正月  
おもしろき狂歌を我はエる歳なや返しても  
桃くゝとふもいわれぬる

二六七

米人

春月  
大かたに月をもめてよ寐わすれはくやしか  
るへき春のあけほの

二六八

四方の  
歌垣

↓歌垣  
小野小町  
言の葉はしげりにけりなうき艸の跡をはめ  
わひしなけきせし間に

二六九

依平

ラ  
依平

二七〇

菜佗住

↓佗住

二七二

蘭丸

富土  
成りあはぬ地は水海と成りなりてなりあま  
りたる山は富士の根

二六〇

籬島

立春朝  
佐保姫の霞のころもうら／＼と春たつけさ  
の日かけ長閑き

二六三

四方庵  
滝水

秋の月  
そとをいく風はひかぬとかなしさに鼻をか  
まするあぎの夜の月

二六三

柳直

后月  
むさしのゝ同しはらより出たれと瓜さね貞  
の後のめい月

二六三

梁

春の哥とよめる  
東路やはつねのはらの初よもきもゆる春へ  
になりにける哉

二六四

了阿

世の中は米一石に錢五メいつも二十てころ  
は四五月

二六五

両堂

猿曳  
人に毛の足らぬところを三猿のいと三す  
しを添へし猿曳

二六六

淮南

寄錦絵恋  
かきうつす姿も花の錦絵に春のこゝろやま  
つうこくらむ

二六七

和哥伎

婚礼賀  
千世鶴の友よふこゑは高砂にすみよしとて  
やつかひはなれぬ

二六八

和樽

田家秋  
なるこひく片手にあすの仕事をも追はれし  
とするかりほせはしき

二六九

染住  
八十式牙書

関の残暑  
関守も残るあつさはとめかねてつめには通  
ふすかたひらのあせ

二七〇

未詳

歳暮

煤〔破れ〕いてやふれ障子のそ〔破れ〕はるを松下禅尼

二七二

和歌之部

ア

泉畑主

↓畑主

東雄

小月  
かくまさはいかにのとけきこはるてふなを  
さへおへるこの月のそら

二七三

敦子

ますかゝみうつりかわりてむらさきも今わ  
むかしの色なかりけり

二七三

淳時

七夕艸色  
露かけて咲や真萩の花の枝をけふをりひめ  
のあかて愛らむ

二七四

イ

出 つきみればむかしおもほゆるもともふね  
こぎいてしむかしおもほゆる

今世 寄松祝  
かぎりなき常盤かきはの岩田野に根さす小  
松の千代そ知らるゝ

被忘恋  
わすれ草つみやかへけむ七車かよひし道の  
跡もたえにき

大平 壬午昔試筆  
初日かけ豊に仰く民草は我大君のめくみな  
りけり

興敬 寄花懐旧  
かきくもる空に夕日も入はてゝなをおしま  
るゝ花の下蔭

興敬 呉竹  
くれ竹にそよとの風のさま見えつときしり  
顔にしける頃哉

興敬 初孫のいさましくたわむるゝさまを見て  
もてあそぶ童の車こゝろしてすゝむるさま  
のいさましき哉

興敬 力  
臣といふ臣はあれとも勅もておみの鏡と仰  
かるゝ君

廻翁 民勞の廻文  
ねきらひを民はなりはひ熊手もてまい日は  
りなは三田をひらきね

其二 古短冊集（和歌）

景樹 春懐郷  
たか春の花の昔を忍ふらん鳴くらしける鶯  
のこゑ

景樹 冬祝  
種つものかりて収るくら垣のさとは冬さへ  
賑ひにけり

景柄 山家水鶏  
風わたる柴のあみ戸の月更てたに水近く  
ゐな鳴なり

花朝尼 行路春月  
麗よの月おもしろくみちゆけはわか門をさ  
へとほり過けり

勝雄 さきしより春のゆくまで君をのみまつにか  
ゝれる花と見よかし

勝久 立秋  
みそき河けさは秋たつ麻のははなかれもあ  
へすはつ風そふく

勝美 難波江の浦なみさえてはるゝとあしのか  
れはに満る夕しほ

聰丸 罽中花  
みやこにはひとへと見しを旅衣日数かさな  
る花の白雲

哥遊 月前花  
さくら花散くるみれは春のよの月の影にも  
風や吹らん

〔菊貫〕 庭梅春久  
色もかも猶ふりせしなく春をちきるみき  
りの梅の盛は

〔裏〕 父八十年賀三月廿九日迄勸進米良篤朽  
木左兵衛殿が頼来

〔菊貫〕

松琴千年  
すえ遠き松の梢ともろともに千世のとちと  
や齡くらへむ  
〔裏〕文化七年十一月晦日大久保佐渡守殿隱  
居七十年賀

二六四

宜歳

寄名所述懷  
名取河なき名もとらしうもれ木のうもれて  
よしや世はすくすはも

二六五

堯胤

草漸青  
そこしもわかぬ下根のありかををのれ  
しらすの庭の若草

二六六

きよき

霞中花  
あさひかけさしてそしるき明ほのゝ霞は山  
のさくらなりけり

二六七

清矩

かはなみのよるへもとむとはつ声をやまほ  
とゝきすなきわたるらん

二六八

ク

園雄

陳思  
よちのほる高嶺も月は猶たかし麗のかけは  
しつけかりける

二六九

国安

真孤かる三津のゝさとの夕月さすかけさえ  
て水鶏鳴也

二七〇

ケ

玄州

すみた川の花をみて  
かた若木なりけり

二七一

蒿溪

さわらひ  
のとかなる光にもえしさわらひをわれおと  
らしとたをる山人

二七二

紅城

雪ましりふくやあらしのとなみやままぎの  
葉しをる音もとゝろに

二七三

惟箴

夜梅  
うめかゝを枕にしめて春のよのやみをあは  
れと思ひそめにき

二七四

サ

定頭

月迎秋明  
さやけさはけに秋なれや月のかけ春はかす  
みておほろなりしを

二七五

貞敦

立歸まふはいかにひとたひの逢にかへてし  
命ならずや

二七六

定信

鏡の山  
湖のこゝもかゝみの山なれやこゝろうつさ  
ぬ人しなけれは

二七七

真守

夜帰雁  
關なれと声よりこゑをしるへにてこよひい  
くつら鴈の行らむ

二七八

さよ子

待わひてつゐ手枕にうたゝ寐のきみかおも  
かけ夢にや見むと

二七九

シ

自寛

旅人の寐覚の里の秋風にきその麻衣今やう  
つらむ

二八〇

重 恭 寄梅感慨  
降雪にほし梢はつゝめとも梅のかほりは  
なとか隠れん 二六八

周 魚 春雨晴  
はなくさのたねおろしてむよきほとにつち  
うるほしてあめはれにけり 二六二

祐 為 寄鏡述懐  
老ぬとはおもはさりしかますかゝみむかふ  
にはつる面かはりせり 二六三

成 梅花薰風  
はなのあたりいとふもよしやへたつれは風  
をたのみの野路の梅か香 二六四

蜻蛉楼 月前砧  
長安の万戸にかへて山里にすむ一片の月の  
夜ぎぬた 二六五

宗 固 掃衣寒  
遠つまを松の戸きむく更過てあくる夜ちか  
く衣うつこゑ 二六六

宋 世 炭籠  
あはれ也うきかうつにも炭やまのたへぬ夜  
さむにねかふ心は 二六七

宗 中 春來驚避  
春はきぬなれよなにとてつれなきはむくら  
のやとのうくひすのこゑ 二六八

隆 正 夕 花  
よの中はこゝろ／＼とおもひしを花にはそ  
むく人なかりけり 二六九

〔たき〕 松有敬声  
かへりこぬ春やむかしとしのふれはおほろ  
に過てかすむよの月 二七〇

忠 房 築地霞  
幾秋の花の盛りに置露をくめや山路の菊の  
下 二七二

千 浦 潮も岸につぎちの浦かせにかすむ瀬わけて  
走る白船 二七三

千 蔭 こかねゐの花見にまかりて  
聞わたる天のかはらかさく花のくもの中ゆ  
く水の一すち 二七四

ちか子 水辺松藤  
ときはなるまつに契りて春いくよかはらぬ  
いちやいけの藤なみ 二七五

親 愛 海辺霞  
しほやかぬ浦も塩屋の烟そと見まかふ春の  
夕霞かな 二七六

千 楯 寄山祝  
九重のうしとらまもるおほひえものときき  
みよのすかたにそたつ 二七七

其二 古短冊集（和歌）

直 庵 さをしかの朝立野辺にきてみれば露にふし  
たる萩か花妻 二六九

經 平 鹿 ツ 掉鹿の声あわれなり夕霧にたちまかひてや  
妻を窓らん 二六九

鶴 群 みめくりのくる日くる月くるとしの秋をお  
もへはいとと露けし 二七〇

泥 舟 テ 西郷隆盛 さつま瀾岩かねゆするあら波のなにをこゝ  
ろとうちくたけけむ 二七〇

貞 宣 風破旅夢 さなくとも仮寐の夢はむすはしをなとふき  
さまざまかせや吹覽 二七〇

天 敬 書 のをかほむ千とせの後もしら鶴のきみにと  
のみやちきりおくらむ 二七〇

東 樹 ト 越の海や沖つしほかせ北ふけはいその岩か  
ねゆするしら浪 二七〇

時 成 柳 青柳の手してまねけはまねかれてよりくる  
春の門のいろ鳥 二七〇

富 有 崎の春の明はの 神さひし磯辺の松もかすみつゝからしまか  
二七〇

富 有 秋をかねて結ひおくめる白露のたまをつら  
ぬくをのゝ村草 二七〇

与 清 寄天祝 物ことにたたへる御代は久方にみつの光り  
の影も貴し 二七〇

友 義 時雨晴 遊ふ月と淋しさは猶残りけり時雨は風かさ  
そひ尽せと 二七〇

友 頼 紙籬 桃桜かざる錦の切細工たもとおとしを付る  
二七〇

豊 頼 千歳経む松と君との友かゝみさやかに見ゆ  
る苔清水かな 二七〇

豊 貞 泰平歌衆多 くるま路も船路も広く進む世はこゝろのゆ  
かね方なかりけり 二七〇

豊 添 梅経寒苦発清香 人もたゝうきをしのへよ梅かえのふゆ経て  
後に花を咲ける 二七〇

直 与 十 千さらきはかり梅か屋をとひて  
この春は初子おとなもとはさりきなにゝひ  
かれしわか身なるらむ 二七〇

直 養 隠士出山 君かよはみ谷のわらひをりを得てしけりや  
すらむとる人をなみ 二七〇

直 与 月を見てよめる 今はかくおもひてもなき身の程をしらてさ  
そふや月の古しへ 二七〇

直好 垣夕顔 夜見れとまかはさりけり此宿のまかきに咲る夕かほの花 二七七  
 長秋 白浪の立もさわかぬあをふちに春来る小亀の千代にあへなん△ 二七八  
 長広 春の始によめる夷曲歌 年礼のあさ上下も春の日にかすみて見ゆる 二七九  
 夏蔭 夏月易明 遠山小紋 はずす葉のひかり涼しき露のまにこほれもはてす明る月かな 二八〇  
 成章 甌置麦 めかれすよ庭もしみらにたね蒔て花まちえたるやまとなてしこ 二八三  
 信景 新結ひせる庵あり桜花咲たり人のなかめ 今更に心よはくはあらねとも此春はかり人もとほなむ 二八三  
 信近 春興 書始にむかう恵方の庭に来てはや口すさむ鶯のうた 二八三  
 宣長 泉 むすはてもすしき物を筆にはよしやにこさし山の井の水 二八四  
 焯主 野外萩 朝つゆは葉にいたゝきて大原野あきに咲たつはきの花つま 二八五

其二 古短冊集（和歌）

八十叟前秋長堂 庭前の菊 白鶴 頂きにへにわたのせて甲斐の国鶴の郡をう老人 すすしらすく 二七六  
 浜臣 占恋 占てあふしるしを見せてうれしくもやますけうらのむすほゝれぬる 二七七  
 浜綱 逢恋 逢恋 かつた袖に妹か枕のしたにして逢嬉しさにしくものそなき 二七八  
 望山待花 望山待花 望山待花 望山待花 二七九  
 春海 望山待花 望山待花 望山待花 二八〇  
 春海 望山待花 望山待花 望山待花 二八〇  
 久子 炬辺言友 かくはしき言葉の花のえた炭もさしそはり 行うつみ火かもと 二八三  
 弘賢 春は猶花にまかひてかたはらのみ山木さへもつものしら雪 二八三  
 弘訓 きみか代はえその千嶋の果までももれぬ恵のひろめけるなり 二八三  
 不齋 川亀の淵瀬もしらすなかれてのよろつ代か けて契る年波△ 二八四

古短冊集目錄

八十八才  
物外  
節句後菊  
昨日けふ心のいろのちらすをればさかりは  
かれぬ菊の花むら

物築  
寄竹祝  
雪つめは弓となりたるくれ竹も祝しものな  
る御代そめてたぎ

木  
野亭梅  
木の芽煮るけふりのすゑもかをりける野く  
ちのやとのうめのした風

葆光  
マ  
関郭公  
こへやらてしはしきかはや子規関のすきは  
ら過かてになけ

雅章  
社頭桜  
神路山桜にあくるしのゝめははなおもしろ  
のあけの玉垣

正篤  
月前秋  
玉のみのなれりと見□て日□つゆにうつろ  
ふ秋の□月

正(辭)  
箱根神社に詣てよめる  
君か代をいかしのみよとまもりつゝたつや  
はこねのもりのほこ杉

正孝  
しるにこもりける頃ちゝ神保内蔵助か討  
死したるを相しる人々のいたみけれは

雅長  
残らさりけり  
雪  
みとり子を懐にしてはつ雪に様乱さぬ松の  
常盤木

町住  
三七三  
三七四  
三七五

六十二翁  
道人  
うる子もふけ生したるを祝て  
かねておもふ福のみとりの子宝もなを行末  
の千代を賀そへむ

通村  
山家月  
ふもとには猶まぢわふる程なれやまぎの葉  
のほるやとの月かな

躬弦  
本草とを見侍りけるついでに  
万代集の詞書  
天地のみたまのふゆそかりそめのくさのか  
き葉もおほにな思ひそ

峰人  
立春  
とこやみの除夜ほのく／＼とあら玉の春にひ  
らくや天の戸かくし

明善  
水辺花  
すみた河水にも花の影みえて小船のつなて  
よらぬ日そなき

毛  
古柳  
としをふるくち木なからも春ことに枝はお  
ひせす見ゆる青柳

以量  
月  
春見しは有明桜燦もまたちりもくもらぬ月  
のりむ

持茂  
里搦衣  
たか里もおなしよさむの小夜きぬたうちか  
はすらし此ころの声

持豊  
三七三  
三七四  
三七五

元長 欵冬  
枝たれて花そつゆけきよしの河いは浪たか  
きぎしの山吹 二七五

基損 三鳥伝の内をよみ侍る  
覚東な呼子鳥聞く時はなをさるるとりかも  
わかぬ山中 二七五

守<sup>七十翁</sup>寿 河山吹  
打いれし駒の蹄の染るかとはなかけうつる  
玉河の水 二七五

諸平 江楼流螢  
ふぎのほる夕川かせにはすませば雲井にと  
めてはたるとふなり 二七五

泰昌 ヤ  
冬風  
一葉ちるきりの梢にふきそめてまつにのこ  
れる木枯しの風 二七五

康道 関路雲  
都出て逢坂山を越行は雲もさなから関と隔  
つる 二七五

行広 ヌ  
かこしものひとりふせやにさくうめの花を  
しみれはものもひ出る 二七五

義方 三  
もゝちたひくりかへしては繰かへせあやも  
にしきも糸はひとすし 二七五

義方 浮雲をはなれて今はおほそらにすめはず  
しき夏の夜の月 二七六

芳樹 たゝひとつ風なかれして行かけも水よりす  
ゝし夜半のほたるは 二七六

由清 春江花月夜  
夕日影いり江のさくらあかすしてかへらむ  
浪に月そ浮へる 二七六

義言 かく花の散に付てもよの中の常なきことそ  
なけかれにける 二七六

義言 池半氷  
池みつにふゆはわきても来さりけりいかて  
こほりのかたへなるらむ 二七六

義正 若木梅  
咲そはむ言葉の花をちぎれなをわか木のむ  
めの行末の春 二七六

麗子 草花  
白露のおきてそいろのまさりける手枕の野  
のもゝくさのはな 二七六

八十三才 山家  
つぬさはふ岩ほなからに都へにおくらまほ  
しき軒の山松 二七六

蓮(月) つる  
ひなつるのゆく末とほき声きけはみよをち  
とせとうたふ也けり 二七六

口 旅人渡橋  
暮かゝるをちのゝ川のひとつ橋こゝろほそ  
くやわたるらん 二七六

蘆庵 二七五

其二 古短冊集(和歌)

ワ

(はしめの  
若狭少将  
前)  
〔貼紙〕

此夕秋風すゝし七夕のとわたる舟のをひて  
なるへし 二七〇

無署名

竹によせて宝喜奉る

嘉奉たのむ竹のみとり色ましていく千代た  
かく生茂るらむ 二七一

梅契多春

万代の春までさかむ宿の梅をいのちもかな  
やたをりかさゝむ 二七二

秋風の吹にし日より久かたのあまのかわら  
にたゝぬ日はなし 二七三

しられぬや野わきの露のおも影にさへかへ  
りつゝ物おかねとも 二七四

小短冊之部

ウ

耳順を賀して

鶴は舞ふ亀はさゝやく耳の春

有 雨 江 手のとゝく家根へ飛たり雀の子

二七五  
二七六

カ

哥夕女 六十一賀を祝して  
幾春をかさね榮る亀の山

キ

其慶 亀に手を引かれつともに千代の春

九雙 行違ふ人酒臭き春の風

コ

湖十 降雪の解るや鯉の鼻はしら

セ

成雅 花の香をかさねて亀の齡かな

青波蘆月齋 浮亀の今年も若き遊かな

小竹亭

千之 亀の尾を曳さへ長き春日哉  
(裏) 秋田 河村専右衛門

チ

竹亭 誉なり江に浮く春の遊ひ亀

小青波

二七六  
二七八

ハ  
選曆のよろこひ  
八夕房  
六花のあゆみ初るや春の水

三七八

芦洲

口  
六十一賀を祝して  
龜遊ひ鶴舞ふ松や若みとり  
(裏)赤石廓中井上杏珉敬後

三七九

フ  
寄亀祝  
文人  
十かえりは龜の差図よ松の華  
(裏)姫路家土 石田弥右衛門

三七六

正利

江利  
欲聞滄浪曲行至緑揚村為末独清客漁父見不  
言

三七三

木  
寄亀祝  
蒲公  
みつの江に世々ふる春の龜なれや  
(裏)伊州名張 来島小左衛門通厚

三七七

雑之部

マ  
漫々  
万年のはしめやひらく冬の梅

三七八

はせを  
最う指にかゝる日数や花曆  
麦人  
人ひとり通らすと鳴くうつらかな

三七三

ミ  
寄亀祝

如  
春風やななき堤の行戻り  
賀

三七五

眠竜  
うらゝかさ寿老も龜も日向ほこ

三七九

頭空洞なら黎明の蓮の立つ  
百舌鳥啼て河原に水もなかりけり

三七七

リ

柳枝  
龜の寿をいくつ重ん若緑  
(裏)播州三ヶ月之内乃井野 省々館

三九〇

商豆  
中納言  
家持  
われこそはおちはおちかそこのうもれしひあり  
としられてみやくちなまし  
掉牡鹿の朝立小野々秋はきに玉跡見左右置  
有白露

三七九

古短冊集目錄

翠村 人の世にうらみは消えて永遠に平和あれ

二八〇

芳洲 石翻々兮氣舞花淡々兮生香

二八一

付水口豊次郎筆蹟並肖像

俳句短冊 夕風や穂を摘み終へし粟畑 あまつ厂

二八二

肖像画 水口高根画（昭和一六年）

二八三

水口氏旧蔵短冊の本館収蔵は、昭和三〇年九月（原田実館長）のことであり、当時、中村俊定先生の指導のもとに大学院にあって俳文学を専攻していた山下一海・萩原恭男の両君が、この古短冊の整理に従事し、昭和三年六月二〇・二一日の両日、本学社会科学系大学院の会議室に一五〇点余りを選び展示し、展示目録を刊行した。つづいて一〇月、同じく中村先生の御尽力により、芥北文庫細川岱峨翁の集められた古短冊の寄託を受け、昭和三八年には杉浦正一郎氏旧蔵の短冊をも加えた。

その後、昭和四〇年度の俳文学会の大会が本学で開かれることになり、館蔵俳諧資料による「古俳書展」の企画もされたのは、その年の六月のことであった。この展覧会には、これらの古短冊を先の展示とは違った角度から展示してほしいと中村先生の希望もあったが、先の整理は山下・萩原両君の仮整理のままであつて、図書館としては種々の事情もあり本整理を完了するに至っていなかったのである。その状態はアトランダムに仮番号を付して、メモによる仮整理で、短冊の順序の決定、閲覧カード作成・請求番号の指定、ラベル貼付をせず、短冊帖を展示用に購求したものの、原本は茶箱に保管したままになっていた。そこで、これを契機として、急遽展覧までに本整理を終了すべく、佐々木八郎館長・加藤諄（前）副館長の指示により、再度中村俊定教授の指導を乞い、大学院学生雲英末雄君、和漢書係荻野隆恵さんの助力を受けて、特別資料室の柴田光彦・松本弘・沢本君恵および酒井清がこれを担当し、整理に着手した。この年の夏期休暇の殆どを返上し、一丸となって整理に加え、展覧会前にか全部にラベルを貼付し、すべて短冊帖に挿入し、作者別の五十音順に配列し、また破損のものには補修を加え、展覧会前にか全部にラベルを貼付し、すべて短冊帖に挿入し、作者別の五十音カードを作成し、一〇月九—十一日の古俳書展には、この中より二百点程の短冊を中村先生に選定を願い、他の古俳書とともに、本館第二閲覧室に展示し「古俳書展覧目録」作成、展覧終了後は、特別書庫中に新たにしつらえた短冊帖棚に収めた。その後、仮カードをそのままにするにしのびず、柴田が勤務の傍ら私に冊子の形にまとめたのが、この目録二種の原稿であり、この度機会を得て刊行されるに至つたのである。またこれを機縁に細川氏より従来の寄託の形から改めて御寄贈を申出て頂いたことは望外の喜びである。当時御健康に恵まれぬ中を押して、炎暑の中を幾度も図書館にお越しいただき、親しく我々に御指導を賜つた中村先生、ならびに、他の所属乍ら係員以上の努力を傾け、今は退職して原夫人となつておられる荻野さんに深く謝意を表するとともに、先に水口氏旧蔵短冊の下整理をされた山下・萩原両君の往年の努力を多とする次第である。この短冊目録にはなお多くの難読・誤読を残し、且このように印刷に付することには慚愧たるものがある。先学の叱正を乞う所以である。終りに臨み、編集の茂木堯秀氏ならびに印刷所の諸賢にも心からお礼を申し上げる次第である。

（柴田光彦記）

早稲田大学図書館紀要 別冊2

早稲田大学 古短冊集目錄 二種  
図書館所蔵

昭和四二年八月二五日 発行

実費 四〇〇円  
頒価

編集兼 早稲田大学図書館  
発行者

印刷所 早稲田  
大学 調度課印刷所

発行所 早稲田大学図書館

